

■風俗文献とSMプレイ情報満載■

奇譚クラブ

昭和57年3月1日発行(毎月発行)

奇譚クラブ

復刊記念号

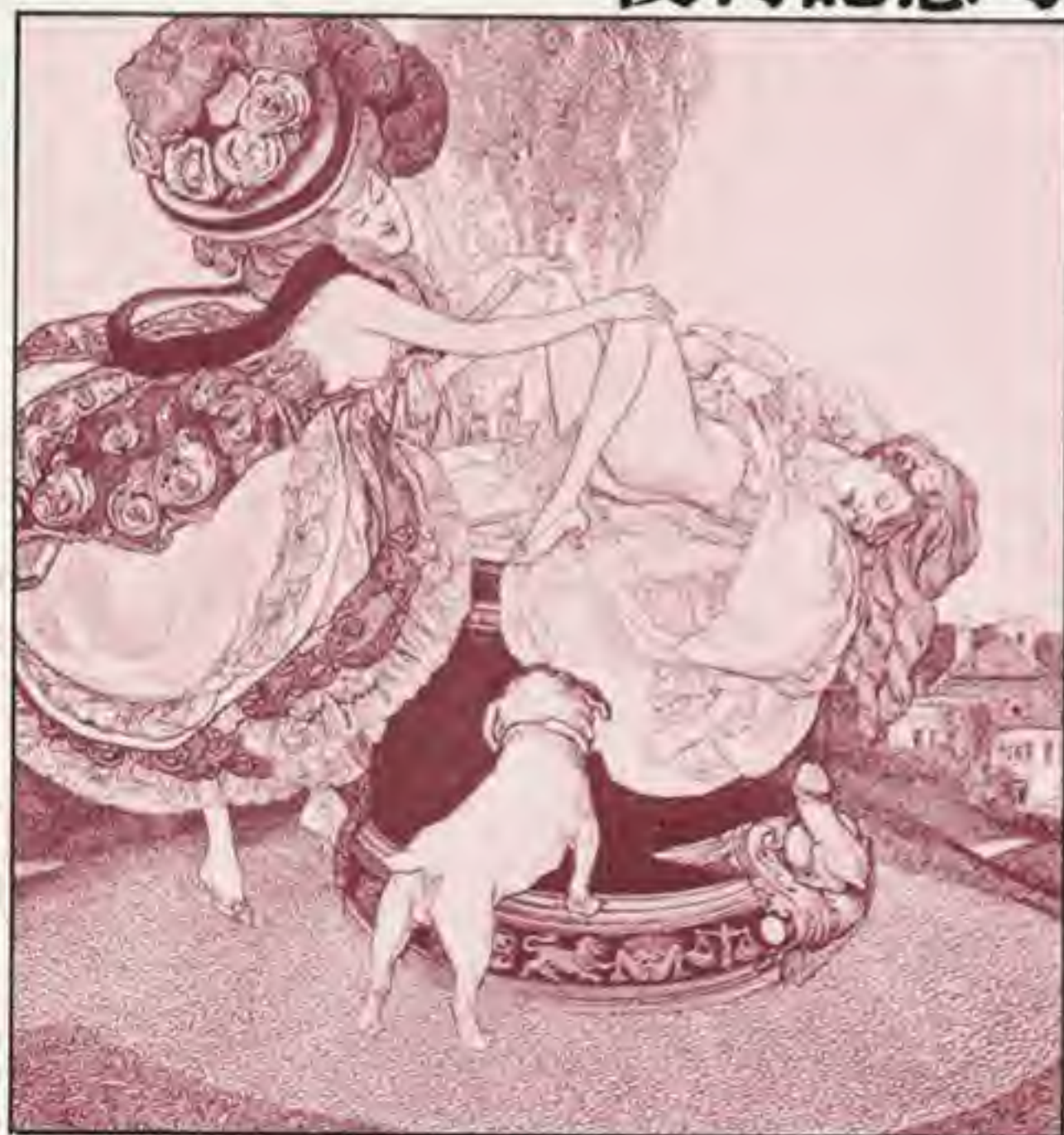
マニア待望の読者参加SM情報誌

♥SM秘密文学探求♥隷女発掘・縄妻志願の
美女紹介♥辻村隆氏との交遊記♥SM交際術
・倒錯愛のメッセージ♥SMクラブ潜入ルポ
♥カメラハント「私はこうしてM女をさがす」

復刊記念号

3

SMのエキスだけを集成した
マニア待望の読者参加情報雑誌



雑誌02805-3

定価1000円

株きたん社発行

ビデオ公開 賀山茂の

こんな男に屈辱の姿体をとられ、苦痛と責めに泣き悶え縄の抱擁の悦びの中で果てる私。
もう二度とされまい、しまいと思いつつ……

■私のビデオ■

紫 痕

これがSMだ!!

3人の女が責めの競演

アマチュア生活30年。ひとりで楽しんだSMをここに公開します。その真髓を披露します。

お申し込みは… 東京都港区六本木5-13-3 ニューキャッスル麻布405号

サム・エンタープライズ

(定価15000円。ソニー用かビクター用を明記のうえ現金書留にて送金下さい。10日以内にお送りします。)

奇譚クラブ3月創刊号 定価1000円 昭和57年3月1日発行 発行所(株)きたん社 東京都港区六本木2丁目4番5号402 電話03(407)0081番 発行人森田公治 編集=風俗資料保存会 東京都中央区銀座1の22の10ストークビル501号

奇譚クラブ創刊号目次



| | |
|----------------------|-------|
| マニア秘蔵フォト① | (3) |
| 秘画再発見(磨佐緒蔵筆) | (7) |
| マニア秘蔵フォト② | (8) |
| マニア秘蔵フォト③ | (11) |
| 復刊のご挨拶 | (19) |
| 辻村隆氏との交遊記(賀山茂) | (20) |
| 妖気漂う黒ミサ | (31) |
| 法延秘録・産科医の姦淫事件 | (32) |
| 地下本発掘・生人形地獄(美保戸実彦) | (38) |
| カメラハント・私はこうしてM女を見つける | (48) |
| SM秘密文学探求 | (58) |
| プレイメイトを募る「あひる会」 | (70) |
| サディストの彼を募集する美女達 | (72) |
| SMサロン「SAMM」の近況報告 | (74) |
| SMビデオテープ制作現場より | (76) |
| 読者通信欄・倒錯愛のメッセージ | (78) |
| 探美会・K会員の報告 | (85) |
| 禁断の美肉(雲海寺竜) | (88) |
| ナウいSMプレイ情報 | (98) |
| 標的は牝犬(火夏圭介) | (102) |
| アナルスワップのハイテクニク | (115) |
| SM雑誌ぱとろーる | (122) |
| 死を賭した上淫(仏光刀四郎) | (124) |
| 投稿原稿応募規定 | (144) |
| 読者通信欄応募規定 | (145) |



マニア愛蔵フォト公開❶「烈火有情」







秘画再発見



磨佐緒戲筆

肉 刑

マニア愛蔵フォト公開②





豊満すぎる女体に苛酷な刑罰が
与えられる。必死の哀願も冷然と
斥けられて、玩弄の好餌へと……。







マニア愛蔵フォト③

鎖・荒縄・雪

優れた写真には撮した人の並々ならぬ愛情がこめられており、映像の鮮烈さにもかかわらず、温味がある。







だがその寒さも、情念
 の炎を燃え立たせる隸女
 には、絹の褥（しじ）に身を横た
 えるような甘美さか。
 妖気と残酷美の漂う白
 銀の世界で、倒錯愛の儀
 式がれんめんと続けられ
 責める側も責められる側
 も、時を忘れている。



“雪”をもあざむく美女
 の柔肌。
 しんしんと降りつもつ
 た新雪に見事にとけこん



春は名のみ春にて：
風の冷たさが身に沁む早
春の昼さがり。
荒んだ田舎家の庭に引
き出されて責檻を受ける

隷女ひとり。
続やかな肌に縄の衣裳
をほどきされ、苦しみ喘
ぐ女はしかし、残酷美に
光り輝く。









荒縄の衣裳をまとわせた隷女の紅涙を絞りつくす激烈な責めが次々と展開し、冷気の漂う庭に一段と凄味が加わった。哀切な隷女の悲鳴は妙なる楽の音か……





裸身に冷水を浴びせられた隷女の
続肌が寒気立ち、酸鼻な光景を
ひとときわ懐愴に引き立てる……

「奇譚クラブ」 復刊のご挨拶

S Mの耽美なる世界を、始めて世に伝えた「奇譚クラブ」が、その最初の使命を終えてから幾星霜、当時の若き読者諸氏も、はや白髪の混じる年代へと成熟されたことと存じます。「奇譚クラブ」の名は、未知の世界へ挑戦した、そのフロンティア・スピリッツと共に甘美な世界を提供し得た唯一のS M誌として不滅の栄光に輝いていたものであります。そのような「奇譚クラブ」をここに復刊しました主旨は、際限なく邪道へひた走る昨今のS M界の風潮に慨嘆し、本来のあるべき姿を取り戻さんが為であります。

幸い、旧「奇譚クラブ」を支えた多くの有志の協力を得て復刊の運びとなりましたが、今後は、新旧読者諸氏の御支援、御協力を賜わり、更に充実した誌面作りを心がけていく所存でございます。

最後に、現在病床に伏しておられる辻村隆氏を始め、多くの方々から励ましのお言葉を頂戴し、誌面を借りて厚く御礼申し上げます次第です。

編集スタッフ一同

縄と鞭とカメラの達人

辻村隆氏との交遊記

賀山 茂



彼女のイレズミを完成させるために催されたパーティで辻村さんと知り合った

筆者はかつて奇譚クラブ誌の「カメラハント」欄において大活躍しておられた辻村隆さんと二十年来の交遊関係を持つ。

S M マニアとしてまだ駆け出しの頃筆者は、縄とカメラの達人の辻村さんからS M プレイの奥儀を懇切丁寧に伝授され、いまなお畏敬の念を抱き続けている。

このところ体調すぐれずS M 活動を休止されている大恩人辻村さんへの親愛の情が筆者にこの文を書かせるに至ったのである。

「私の運命を決した」 「恩師との出会い」

ある日一つの郵便物が届きました。裏面を見ると「暁出版」のゴム印が押されています。

胸をドキドキさせながら開封しますと、

私の人生は大型の奇譚クラブを

読み出してより目覚め

S M街道を邁進しました

近く須磨の大閤苑で山原清子嬢のイレズミを完成させる
後援会の招待状でした。

喜びいさんで出席の返事を出し、当日は胸を高鳴らせて
勇躍会場にのりこんだ私です。

百帖敷きの大広間に四十名ほどの方が車座になっていま
した。私は指示された場所に座を占め、囲りを見回します
と、宴はすでに始まっていました。

がんじがらめに縛られた男性を、山原嬢が打ったり蹴つ
たりいたぶっており、イモ虫みたいにうごめく男のからだ
が異様な雰囲気をかもし出していました。

やがて山原清子嬢のイレズミの披露が始まり、あらわに
なった豊満な素肌を彩どるイレズミは未完ながら、思わず

生ツバを吞むすばらしさです。

主催者の奇ク発行人吉田さんが立ちあがって、

「この彫物を完成させたいので、皆さまのご協力をあおぎ
たい」との言葉があり、満場一致で募金が行われ、スムー
ズに終わりました。

そして、これから山原嬢を責めて下さいと声かけられ
ました。

初心者の中には、出番など考えられず、ぼんやりしてい
ますと、中年の紳士が「どうれ」と声をかけて中央におど
り出て、山原嬢の手をとり、海老責めの型で、後手におさ
えこみすばやく後手、胸縛りを決めたのです。

やわらかい山原嬢の肉体が折りたたまれ、九〇センチの
グラマラスな乳房がより大きく目にとびこみ、オッパイマ
ニアの私は思わず「ゴクリ」と生ツバを呑んだのです。

縛りは次第にエスカレートしていき、圧巻は荒縄による
縛りでした。がんじがらめに縛られた山原嬢の肉体は、彫
物と荒縄が不思議なハーモニーを見せ、まるで天女が生贄
にされた趣きでした。

「賀山さんですか、私が辻村です。わざわざ東京からお見
えいただいてご苦労さまです」

自由奔放にS Mプレイを楽しんでおられるあこがれの辻
村さんから声をかけられ、私はすっかりあがってしまい、
返事もしどろもどろで、何を話しているかも分からず、た

中年の紳士が中央におどり出て山原嬢を海老責めの形に



ださいごに、

「これから是非おつきあいをしていただだけませんか」

とおねがいするのがやっとでした。

私のこのおねがいに、

「よろしいですよ」

辻村さんは気さくに答えてくれたのです。

やがて宴も終り、参加者は三々五々と散会していきましたが、私は辻村さんと一緒に河岸を変え、交友関係を深めるべく、夜の大阪に向いました。

そのことから、私は急速に辻村さんと親しくなり、ある

柔らかい山原嬢の肉体が折りたたまれ乳房が一際豊満に



週末、私は奈良に向って旅立ったのです。小、中学校の献血の仕事をしている辻村さんは、土、日旺しか時間をつくらることができないのです。

間口よりも奥行きの方が長く造られた、いかにも古都らしいどっしりした辻村邸をおとずれるや、私は大歓迎を受けました。辻村さんは早速テーブルの上にアルバムを山のように積みあげました。私は嬉しさの余り胸をときめかせ喰い入るように入見入ったのです。

私が夢中になって写真を見ていると、

「賀山さん、明日はこちらでプレイをしませんか。モデル



は伊吹真佐子です。よろしければ電話しますよ」
いやなわけがありません。私は天にも昇る気持で、是非
おねがいしますと返事をしていました。

胸亀甲に縛られて横倒しにされ、片足吊りにされた伊吹嬢は狙の鯉

モデルの伊吹真佐子はOKしてくれ、翌日京都のタワー
ホテルのロビーで待ち合わせるようになった。

と辻村さんは急に、今夜は前夜祭ということにして、ウ
チのカミさんをやってみませんか？ などと物騒なことを
言うのです。私が返答に困っていますと、少々手荒らな責
めでも平気ですよ、などとけしかけるのです。

そして離れにフトンを敷かせましょう、と言って奥の部
屋に姿を消しました。こんご気まずい思いをしたくないし
それに好みのタイプでもないのです、いずれまたということ
でご遠慮ねがいました。

「縄、ローソク、鞭」 伊吹嬢との烈戯／

「会うまでが花です。どんな美人かと想像をたくましくし
ますからね。まあたまにはスッポかされることもあります
が、それもまたいい所です。世の中一寸先は闇ですから」
京都についた私と辻村さんはタワーホテルに向っていま
した。ホテルに入りかけたところで、先生と声をかけられ
ふり返ると、奇クでおなじみの伊吹嬢が艶然とほほえんで
いました。

「賀山さん、ご存知でしょう。伊吹真佐子ですよ。きょう
はがっちりいじめてやろうじゃありませんか」
辻村さんはせっかちな私をせかす始末で、三人はタクシ



ふさふさした彼女の密林と二つの噴火口
はあえかに息づきつつその全容を露わに



ーに乗り込み、平安神宮に向いました。裏側はラブホテル
街です。辻村さんはまるで我家の庭みたいスイスイと和
風のホテルに入っていきます。

プレイが始まると、辻村さんは目の色が変わり、すごくセ
カセカして、人間が変わったかと思うほどです。

「伊吹君、さあ、脱いでちょうだいね」

伊吹嬢はストリップみたい順々と衣服を脱いでいき
さいごはパンティ一枚になってたたみの上にかしこまりま
した。

辻村さんはまぢかねたように彼女を後手、胸亀甲に縛り

あげましたが、惚れぼれするような細さばきです。モデル
との呼吸もびったり合っていました。

横倒しにされ、パンティもとられ、片足吊りにされた伊
吹嬢はマナイタの鯉よろしく観念し切った様子です。

やにわに彼女のふとももに手をかけ、逆立ちのポーズで
股に首をはさんで立ち上った辻村さんは、

「シャッターを押して下さい！」

私を見て、ニヤリと笑うのです。私へのサービスだった
のでしよう。辻村さんはしばらくその姿勢で仁王立ちにな
っていました。

伊吹嬢の頭が上下し始め、だんだん赤味がかってきたな
あと思っていると、辻村さんは彼女をフトンにほうりなげ
荷物みたいにからだを折りたたんで、手足をそろえて縛り
上げたのです。

お尻を天井に向けられた彼女は、意識を喪失したのか、
まったく、されるがままなのです。

辻村さんはズボンからベルトを引き抜き、彼女の豊かに
張った臀部にピシリと打ちおろし、ピクリとうごめくまろ
やかな太もも鞭打ったあと、ぐったりとなった彼女を、モ
ノに憑かれた表情でふたたび後手開股縛りで、顔の所まで
折り曲げ、縛り直したのです。

「やっぱりお前はMだね」

脚にはさまれて苦しげな伊吹嬢の顔に笑いかけ、お前は
女奴隷だ、プライドも何もない、これからお前をいじめま
くってやるぞ、そう言って辻村さんは彼女の体にまたがっ
たのでした。

自由を封じられた伊吹嬢はただ呻くばかりです。ふさふ
さとした彼女の密林と二つの噴火口はあえかに息づきなが
ら、辻村さんの視界にその全容を露わにしていました。

「賀山さん、ローソク責めでいきます」

そういわれた私は小さい方のローソクに火を点けて辻村
さんに渡しますと、

「おさえてますから、賀山さん、やって下さい」

私は一メートルほど離れた所から蠟涙をたらしめました。
なかなか思うように命中しません。しかしそのうち狙いが
定まってき、肌の弱い所に落下すると、彼女は裸身をくね
くねと悶えさせ、女獣みたいに呻き声をあげます。

彼女の懸命に耐えている可憐な姿を眺めていますと、私
もだんだんS気が昂まってき、ところかまわず蠟涙をたら
し、とうとう口開いた花唇にローソクを深々と差しこんだ
のです。

「大きいローソクも使ってみましょう」

辻村さんに言われ、直径二センチのに点火して渡します
と、

「お祭りですよ」

と言われ、さっきからピクピクうごめいている可愛い蕾
にあてがい、二、三度押し込んでみましたが、伊吹嬢
のするどい悲鳴とともにねつけられ、悲しげな泣き声を
あげる彼女は「いやいや！」と、なんとか入れられまいと
抵抗します。

私も手を貸して、やっとのことでガッチリと呑みこませ
ることに成功しますと、すごく充実感をおぼえました。

「人間燭台が出来あがりましたね」

辻村さんを見上げていいますと、辻村さんもいたく満足
された様子でした。

「賀山さんも相当のものです」

と辻村さんにほめられてとても光榮に思いました。

「きょうは徹底的に尻責めでいきましょう」どこから取り出したのか、見ると手に針を持っています。その針で尻にこびりついたロウをとりのぞく作業を始めました。ときどき針が尻肉につきささり、さしこまれたローソクが揺れ動くのです。そのショックでたまり切ったロウが流れ落ち、「ギャーッ」という悲鳴もろとも、伊吹嬢は体をがっくりと落しました。失神したのです。

ヒクヒクと荒い呼吸をくり返している彼女の尻肉にズブリと針を刺しますと、「アッ」と彼女が叫んだかと思うと体が跳躍し、体内に再び力がこもりました。

見れば注射針です。

「何本刺しましょうか？」

手に小さなプラスチックの箱を持った辻村さんは、悪鬼さながら、彼女のお尻めがけてギューと針を刺しこむのです。

賀山さんもうですと一本渡され、やってみましたが、ほんの少ししか入りません。ブラブラゆれている針を見て辻村さんは「ダメですね」と言っグイッと刺しこみ、お手本を見せてくれました。

10本余りも針が刺しこまれると、尻肌のあちこちに血がにじみ、「針地獄」の様相です。

きょうはこれにて終りということで彼女の脚の縄を解い

てやると、ぐったり足を投げ出しまるで死んだみたいに横たわってしまいました。しばらくはおしておくことにして冷蔵庫からビールを取り出して二人でカンパイしました。「賀山さん、どうです、こんなところでご満足いただけましたか」

と云われ、私がこれまでヌードモデルを縛るだけの経験しかなく、本当にびっくりしましたと答えますと、「女を縛るだけでは面白くありません。SMはプレイでなくては。伊吹君も最初は人形みたいになだ縛られるだけでしたよ」

伊吹嬢も意識を回復しましたので、ビールを飲まないかと誘いますと、ユカタを着てやってきました。

コップにつがれたビールを、一息にグーッと飲み干し、「ああ、おいしい、先生、きょうはこれでおしまいなんですか」

とまるで何事もなかったようにニッコリほほえんでいるのです。

「そうだなあ、そろそろオシッコもしたんだろう。賀山さんがとても感激しておられるから、サービスにオシッコする所を見てもらいなさい」

と言っ彼女の手を引っ張ったのです。

「あら、いやだわ」

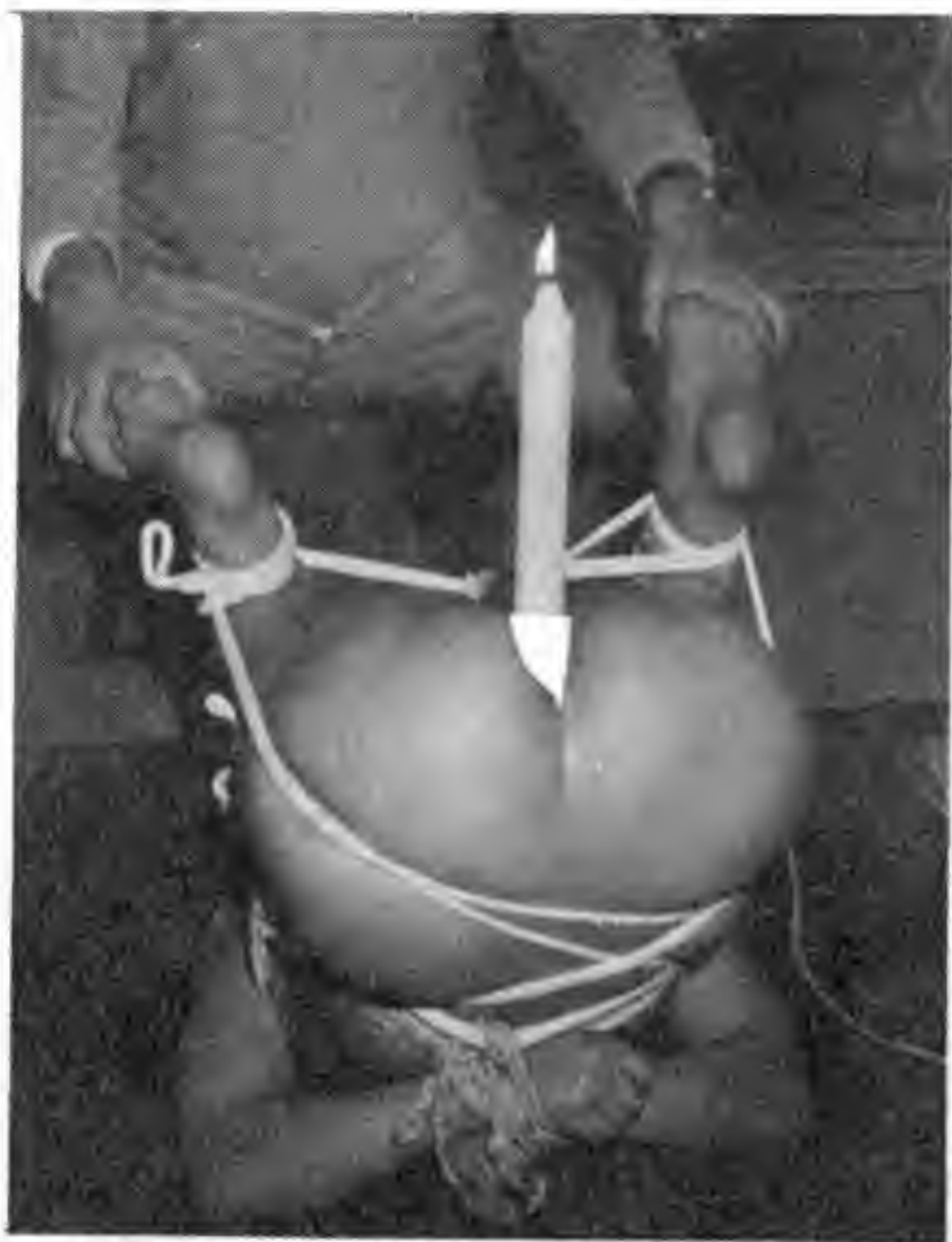
と言いながらも、お尻を辻村さんにたたかれると、手を

とられてトイレに向います。辻村さんはドアをあけてやり
そらと彼女を便器にしやがませます。

伊吹嬢も観念して、ユカタをまくってすわりこみました。
次の一瞬、シャーッと一条の尿流が滝みたいに使ツボに落
下しました。

「躍動美あふれる」 「女子大生の縄肌」

京都駅で辻村さんとお別れするのがとても淋しかった私
は、きょうの驚くべき初体験のひとコマひとコマをしっか



直径2センチのローソクを呑みこませた
一条の尿流が滝みたいに使ツボに落下

り網膜に焼きつけて車中の人となったのです。

十日ほどして、辻村さんから電話が入り、Sの女性がい
ますが、如何ですとお誘いをうけました。

大学生の彼女は、パートナーと別れたばかりで、相手を
搜しているとのこと。私も特定のパートナーが欲しい
と思っていましたし、女子大生というのにも魅力を感じ、
辻村さんに教えてもらった京都の電話番号をダイヤルして
みました。

思ったとおりの、明るいハキハキした応答の声が返って
きました。



京都の祇園ちかくの喫茶店で待ち合せの日私は、約束通り紺の背広でグリーンの大封筒をテーブルの上におき、彼女の出現を今や遅しと待っていました。

私が気づかぬ間に、若い女性が向いの椅子に腰をおろしていました。

「お待ちになりましたか？」

私のはっと顔を上げると、まだあどけない容貌のいかにも女子大生らしい可愛い子ちゃんがキチンとかしこまっています。私が辻村さんから紹介された賀山ですとあいさつしますと、

「堤です、〇〇大学の二年生です。わざわざ東京から大変でしたね」

ニッコリ笑って私を勇気づけてくれるのです。私がきのうは嬉しくてねむれなかったこと、こんな形の交際が初めてで、SMプレイの経験も少ないことを告げました。

堤嬢は、某会社の社長御曹子と二年ばかりつきあったとのこと。御曹子はMで彼女に虐められて喜んでいたと話しました。彼女は奇クの座談会に何度か出席しているもののMの方のプレイは未経験だといい、それほど乗り気でもなようです。

私はちよつとがっかりしましたが、気を取り直し、大しきついいことはしませんからと彼女を説得し、早速プレイしましょうと彼女を促して近くのホテルにとびこみました。

しかしどうスタートさせてよいか分からずまず手始めに風呂から上ってきた彼女のヌード写真を撮影することになりました。彼女は裸になるのは抵抗がないらしく、自分の美しい肉体を誇示するように大胆なポーズをとります。

「軽く縛ってみようね」

両腕を後手にして柱を抱かせ、柱を中心に乳房にも縄を回しました。嫌だと言われないように細心の注意を払ってやさしく扱ってやりますと、彼女も心の垣根を取り払って私の責めを受け入れていくのでした。

和気あいあいの雰囲気でこんごの相談をし月に二度、一回は京都一回は東京でデートすることに決めました。

「SからMへMからSへ」 「エミ子嬢と感激の再会」

東京駅のホームまで堤エミ子嬢を出迎え、そのまま真っ直ぐマンションにつれてきました。自分の部屋ですから何の気かねもいらず彼女もすっかり打ちとけていますので、まず今までの彼にやったように、私にやってみなさいといいました。京都で、SになったりMになったり両方の形でプレイするという約束もしていたのです。

彼女はパンツ一枚になった私を四つんばいにさせて馬乗りになり、部屋中をぐるぐる回らせました。二回り三回りするとさすがに苦しく、勘弁してくれと懇願するのですが



ヌード撮影からじわじわと縛りにもっていく細心さが肝要



なかなか許してくれません。へとへとになった私を足蹴にして、さらにはいてたスリッパをとって所かまわず打ちつけるのです。

やがて、これでおしまいと彼女がソファに両脚を投げ出して腰かけました。私は彼女をソファに横たえ、両手両足を引き伸してソファの脚に縛りつけました。ブラウスのボタンをはずし、ブラジャーをとり、上半身裸にして、鳥の羽根でクスグリ始めました。煩悶する彼女のスカートのホックをはずしパンティもろとも一気に引きおろしました。

彼女のからだは細身で、幼なさの残った太腿の間から甘い匂いがほのぼのと立ちのぼってきます。

何かを求める風情の彼女を起こし乳房の上下に三重四重にたんねんに縄を回しました。乳首がぶっくり頭をもたげとてもそそられます。足をあぐらにし、ジュータンの上に押し倒し、海老責めのポーズに足首と頭をくっつけるように、あちこち縄止めしました。

窮屈な姿勢を強いられる堤嬢が何か言う前に、豆しぼりの手ぬぐいで猿ぐつわをしました。彼女のもっとも秘めやかな個所が私の眼の前にすっかり晒されています。

そつと手を出し、

「恥かしくないかい？」

彼女は首をふってイヤイヤをし眼で何かを訴えています。



何かを求める風情のエミ子嬢の乳房の上下に丹念に縄がけ



あまりダメージを与えてはと縄を解いて抱き上げてソファに坐らせ、こんどは解剖だよと囁いてテーブルに手足を伸して固定しました。目、鼻、耳といじり回し、口には手を突っこんでかき回し、嫌がる彼女に顔の検査は済んだから次は感度の検査だと言って、乳房を手で盛上らせて口にほうばり、舌で強く弱く舐め回しますと、体をピョンピョン跳ねさせて、

「ダメ、ダメ、私そこ弱いのに……」

と切なげに哀願しますが、構わず左右の乳房をなぶりつづけました。虚ろな目付で放心状態の堤嬢にさらに追打ちをかけるように、からだ中の醜い毛を剃り上げてきれいにしよう、脇の下なんかどうかな？ 手をあてがい、いやここをきれいにしようと、股の付根のフサフサしたヘアーをさすり、浴室からシェービングクリームとカミソリを取ってきました。

「さあ、いよいよ始めますよ」

何も答えない彼女の唇にキスし石けんの泡をたくさん吹きつけ、胸を高鳴らせながらカミソリを当てていきました。ひとなでごとに長短のちぢれたヘアーがカミソリにからみつき、*「やったぞ」*と心中快さいを上げたのです。

(以下次号)

サ ミ 黒 う 漂 気 妖

六本木のSMクラブ「SAMM」では毎月下旬、妖気漂う「黒ミサの会」を催している。

「黒ミサ」とはキリスト教の異端分子たちが悪魔を呼び寄せ、自分らの邪悪な想いを実現させるため、祭壇に生贄をささげて行った怪奇な儀式である。

その日は頭からすっぽり黒頭吊をかぶったにわか異端教徒（お客さんたち）が、生贄に供された美女をよってたかつて全裸にひん剥いてしまう。

そして祭壇の上にかつぎあげ手足を縛り



氏六鬼団に紛した祭司の悪魔

生贄の柔肌にワインが注がれる



つけて身動きできないようにし、裸身の上に料理を並び、ワインをふり注ぎ、狂気の宴が始まる。

参加者は先を争って裸女の上に盛られた料理を貪り喰い、胸や下腹部にしたたるワインをすすって栄気をつけ、鞭打ち、色責めなど、思い思いの淫虐の限りをつくし、日頃のストレスを解消する。

この「黒ミサ」に参加を希望される向きは同クラブまで連絡されたし。（電話・東京587局二三六六番）



責めするエスカレートなく果し

五十歳の産婦人科医が通院してくる十八歳の良家令嬢を治療にことよせて誘惑したあげく、妊娠したと知るや中絶手術を行なったという容疑である。本事件が発生した昭和初期には無届けの中絶手術は禁じられていた。

産科医が犯した姦淫事件

(法廷秘録)

内診の理由

「被告は昨年十月初旬、文子の局部を内診したか」

「ハイ、内診イタシマシタ」

「いかなることから同人の局部を内診するに至ったのか」

「文子ガ、月経不順デ貧血ノタメ、腰ガ冷エルトイウ主診書ガアリマシタノデ、診タ次第デス」

「患者、またはその保護者から特に内診の依頼がなかったのに、内診してもさしつかえないか」

「医師ハ、ソノ病氣ノ治療ニツキ、患者ノ一身ヲアズカツテイルノデ、不都合ハナイト思イマス」

「内診にはどんな方法をとったか」

「普通ノ婦人科診断法ニシタガイ、指ヲワギナ内ニ挿入シテ、膈壁ヤ子宮口等ヲ内診イタシマシタ」

ソノ結果、子宮口ハビ爛シ、膈ハ処女ト思エヌホド弛緩シテイルコトヲ発見シマシタ。ソレニ文子ハ性ニ対スル感受性モ鋭敏デアルコトモワカリマシタ」

「そのとき、文子の態度はどうであったか」

「内診ノ際、彼女ヲ起立サセ、両手ヲ私ノ肩

ニカケサセ、指頭デ子宮口ヲサグリマシタガ彼女ハ顔ヲ真ツ赤ニシ、体ヲ小キザミニフルワセ、明ラカニ興奮シテイタヨウデス。

ソノ反応カラ、子宮口ビ爛ハ、交接過度カ手淫ノ結果ダロウト考エマシタ」

「被告は内診のとき、非常に時間をかけ、文子にイタズラしたというではないか」

「三度目ノ折リ、特別診察室ニツレテ行ッテ内診シタノデスガ、ソノトキ文子ハ呼吸ヲハズマセテオリ、私ニ情ヲ移シテイルヨウニ察セラレマシタカラ……ツイ私モ……」

「被告の医院には看護婦はいないのか。また特別診察室とはどんな設備を持つものか」

「看護婦ハオリマスガ、主ナ仕事ハ受付、診
断書ノ整理、注射ノ用意、ソノ他ノ雑用ニト
及ンダ次第デス」

ドマツテオリ、特別診察室ニハ、患者ト私以
外、入レマセン」

「そこで、どんな行為に出たのか」

「フタタビ指ヲ挿入、内診ヲくり返シマシタ。
タダシ文子ノ様子ガ、前ニ述べタヨウナ状態

デアリマシタカラ、単ナル内診以上ノ行為ニ
思イマス」

「文子は三、四分間もイタズラを受けた、と
陳述しているが、その通りか」

「ソナナコトハアリマセン。三、四十秒ダト
思イマス」

好色医師の裏面

「被告はそのような行為を、ほかの患者にも
しばしばおこなっていたのか」

「イエ、マツタケ初メデアリマス。コレハ
神ニ誓ッテ申シ上ゲマス」

「なぜ、文子にだけ劣情をもよおし、けしか
らぬ行為に及んだのか」

「ソレハ文子ガ非常ニ
美シカッタタメ、ツイ
医師トシテノ本分ヲ逸
脱シタ次第デアリマス。
マタ彼女ハ、初メカラ
私ニ好意ヲ持ッテイル
ヨウニ見受ケラレマシ
タカラ……」

「文子はまだ十八歳の
良家の子女である。内
診のとき、呼吸をはず
ませ、情を移している
ように見えたというの
は、被告が自己を有利
にみちびく詭弁ではな
いのか」

「イエ、コノ点モ医



師トシテ、嘘ハ申し上ゲマセン。タシカニ彼女ハ体ヲ動カシ、快感ニタエヌモノノヨウナ態度ヲイタシマシタ」

「しかし、たとえそうであっても、患者はただうら若い令嬢である。内診にかこつけて彼女の体を玩弄するとは卑怯ではないか」

「……」

「そのうえ被告は、名誉ある学位を持つ医師である。おのれの行為を破廉恥と思わなかったのか」

「ソノトキハ、タダ夢中デアリマシタ」

「医師として、さようなことは重大な罪であることを心得ているか」

「ハイ、申し訳アリマセン」

——一説によるとこの博士は、地方の名家からもらった妻がヒステリー性で、夫婦生活がうまくゆかず、欲求不満に悩んでいたという。当時の医師にはよくあったことだが、おそらく妻の実家が財政的なパトロンで、そのためもあって妻には頭が上がらなかったのにちがいない。

一方、文子は、色の白い、ふっくらとしたたいへんな美女である。そればかりかまだ十八歳で世間知らずな良家の令嬢だった。こんな相手なら、少々のことをして世間にバレ

ることはあるまい、という計算に立って、博士が痴漢と化したのも、男なら察しのつくところであろう。

さて、審問はいよいよ核心に触れていく。

期待する令嬢

「被告は昨年十一月頃、文子に対し、座薬をもちうると称して、姦淫したことがあるか」

「アリマス」

「どういう行きがかりで姦淫したか」

「ソレハ昨年、十一月二十八日ノコトデ、前ニ申し上ゲタトオリ、文子ヲ内診シマシタトコロ、彼女ハ情ヲ移シ、私ニ強ク体ヲユスリツケル動作ヲ示シマシタ。ソレデ私モ、姦淫ヲ許サレタルモノト思ッテ、行為ニ及ンダワケデアリマス」

「内診のとき、薬をつけたのか」

「イエ、ベツニツケマセン」

「それでは、内診も予備行為であったのか」

「ハイ、申し訳アリマセン」

「文子はその交接を、治療のため座薬が挿入されるもの、と信じていた。そう陳述しているが、どうか」

「ソレハ違イマス。交接スルノダトイウコトハ、チャント心ノ中デ知ッテイタハズデス」

「文子はそのとき、協力的、合意的であったか」

「ハイ、アキラカニ歟ンデオリマシタ」

「その交接状態はどのくらい続いたか」

「四、五分間グライダッタと思イマス」

「被告はそのとき射精したか」

「致シマセンデシタ」

「なぜか」

「ダレカ来ル氣配ガイタシマシタカラ……」

「被告は交接中、息づかいを烈しくしたというが、どうか」

「ソレハ、文子ノハウガ烈シカッタと思イマス。シタガツテ彼女ニ、私ノコトガ詳シク觀察デキタトハ信ジラレマセン」

「被告はその後、どうしたか」

「文子ノ体ニ脱脂綿ヲ挿入シ、別ニ脱脂綿ヲ

与エテカラ、一緒ニ立チ上ガリマシタ」

「今日は座薬が溶けるかもしれないから、これで拭きなさい、と言ったのか」

「サヨウナコトヲ申しタヨウニ思イマス。ソレハ文子ガ快感ヲ示シタアトナノデ、キマリガ悪イダロウト考エタカラデス」

「被告はさらに、十二月十二日頃にも文子を姦淫したか」

「ソウデス」

「そのときは、文子を寝かして、行為したというではないか」

「申し訳アリマセン」

「そのとき、文子の顔の上に、毛布をかぶせたというが事実か」

「文子ハ、交接ヲ了解シテイタハズデスガ、恥ズカシガルダロウト思ッテ毛布ヲカブセマシタ」

「文子はそれを性行為だとは夢にも思わず、座薬を挿入してもらっているとのみ信じていたというが」

「ソシナハズハアリマセン。彼女ハアキラカニ第一回ノ行為ヲ欲ンデオリ、二回目モソレヲ期待シテイマシタ」

強姦か和姦か

——この辺の質疑応答には微妙な問題がふくまれている。和姦的状况であつたと主張する博士、あくまで「知らぬうちに犯された」と言いはる女性、どちらの言葉を信じるかによつて博士の罪に軽重の差が出てくるからだ。しかし常識的に考えても、これはおそらく博士の陳述が真実に近かつたのではないかと思う。いくら良家の、若い娘であつても、医学的治療と性行為をとり違え、しかも何度も

くり返すというのは不自然にすぎるだろう。

ただ彼女は、事件が発覚した現在は、社会や法廷に対して、あくまでも「被害者」の立場をとらねばならず、どうしても紋切り型の陳述をくり返さざるを得ない。その点で、博士がいかに「和姦」を主張しようと、取り上げられる余地はなく、形勢不利は明らかだつた。

× × ×

「しからばなぜ、文子に毛布をかぶせたのか。まったくの処女と交接したわけでもないのに相手の顔を隠して行為をする必要はないではないか」

「ソレハ前ニ申シ上ゲタヨウニ、文子ガ恥ズカシガルト思ッタカラデス」

「その場の状況をもう少し詳しく述べよ」

「前回ノヨウニ、マズ内診ト似タ行為ヲハジメ、充分ニ文子ノ準備ガトトノツタ時点デ、インサート致シマシタ」

「部屋には二人だけであつたのか」

「ハイ、当日ハ、文子ノ来診ガアラカジメワカッテオリマシタカラ、看護婦ヲ遠去ケテアリマシタ。ソシテ特別診察室ニ、二人ダケデコモツタ次第デス」

「行為はどのくらいの時間を要したか」

「約三十分ダト思イマス」

「文子の抵抗はまったくなかったのか」

「ハイ、ムシロ欲ンデイタノデス。私ノスルトオリニナツテイマシタ」

「文子はその折り、何か言葉を発したか」

「特別ノ言葉ハ発シマセンデシタ。タダ喘ギヤ、泣クヨウナ細イ声ヲアゲタト思イマス」

「被告はそのとき、射精したか」

「致シマシタ」

「文子のほうはどうであつたか」

「充分ニ満足シタト見受ケラレマシタ。シカモ二、三回ダト思イマス」

「被告は同年十二月十八日頃に、前同様、診察室において文子に三回目の行為をしたか」

「致シマシタ」

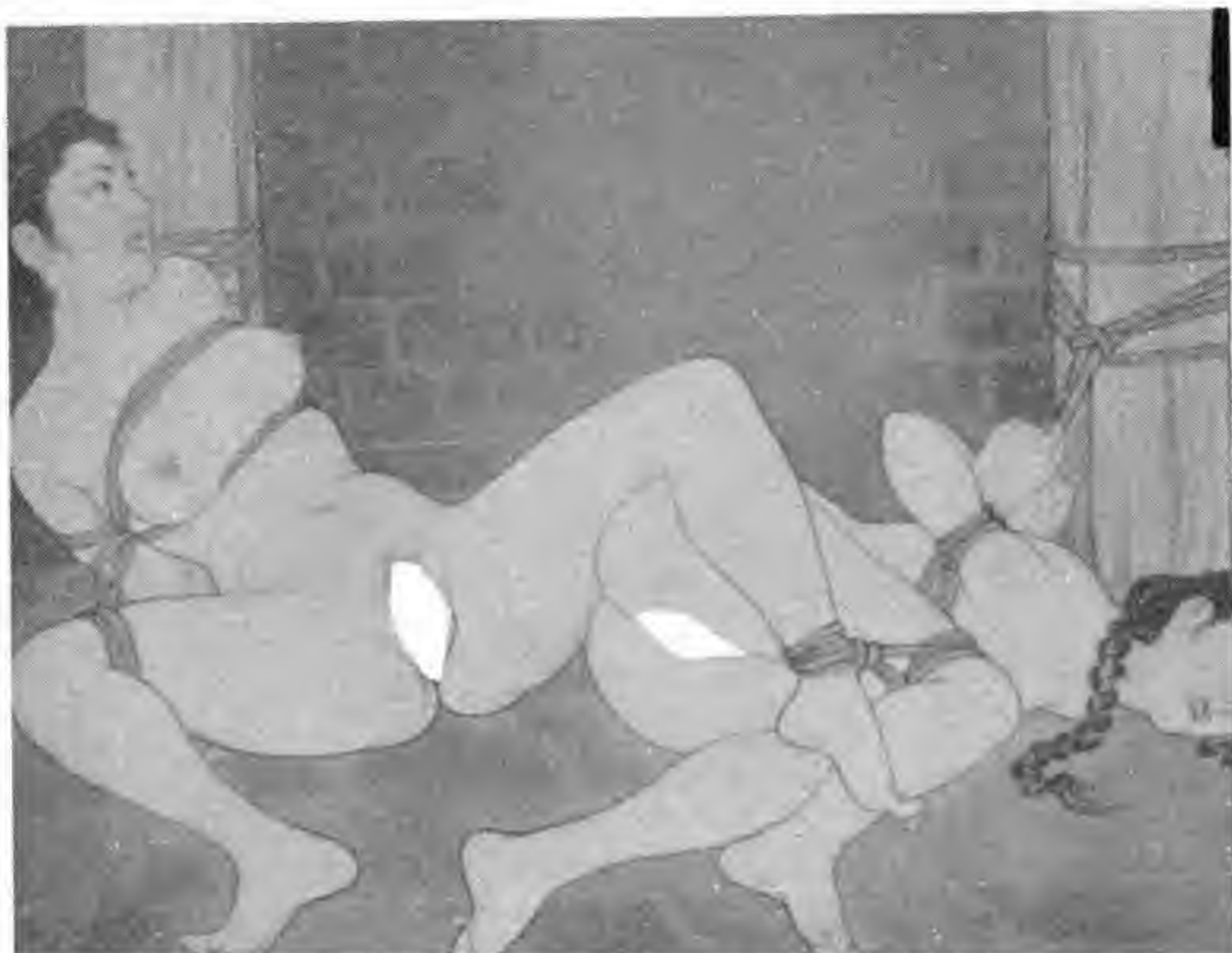
「そのときの方法は、第一回目と同じく、文子を膝の上へ跨がらしたというが、それは事実か」

「ハイ、サヨウデス。シカシ私ハ最後マデ至リマセンデシタ」

問題は体位

「第四回目は、同二十二日頃におこなわれたのか」

「ハイ、シカシコノトキモ私ノホウハ途中デ



止メテオリマス。時間
モ短カッタト思イマス」

「被告はそのとき、座
薬を四本入れたと文子
に言ったそうだが、ど
んな意味か」

「四回マジワッタコト
ヲ、座薬ニタトエタノ
デアリマス。文子ハソ
ノ意味ヲ知ツテイタト
思イマス」

「文子は前三回と同様
性行為とは知らず、治
療のため座薬を挿入さ
れると信じていた。そ
う述べているが、どう
か」

「イイエ、ソノヨウナ
コトハナイハズデス。
文子ハ性ニ対スル感受
性が鋭敏デ、私ノ行為
ニ歎ビ、充分ナ反応ヲ
示シテオリ、事実ヲ知
ラナカッタトハ信ジラ
レマセン」

「四回目以後は文子を姦淫しなかったのか」
「ソウデス」

「その理由は何か」

「年末ト正月ガ重ナッタメデアリマス。文
子ハ一月五日ニモ参リマシタガ、ヤハリ多忙
デソノヒマヲツクレマセンデシタ。マタ、ア
マリタビタビオコナウト、妊娠スルノデハナ
イカ、トイウ不安モアリマシタ」

「妊娠のおそれ、どころか、立派に妊娠した
ではないか」

「ハイ、ソウデス」

「被告は文子の妊娠をどうして知ったか」

「一月五日ニ参リマシタトキ、彼女ノ乳首ガ
黒クナツテイマシタ上ニ、吐キ氣ヲモヨオス
ト述べタカラデス」

「被告がそれを確認したのは何日か」

「一月八日ト二月十二日ニ内診シタ結果、妊
娠ト診断イタシマシタ」

「それは文子から、妊娠の模様があるから診
察してくれと求められたのか」

「二月十二日ノ場合ハ、文子ノ母親カラ、文
子ノ具合ガヨクナイカラ、ヨク診テクレト電
話ガアッタノデス」

「その結果、どうしたのか」

「文子ノ妊娠ニハショックヲ受ケマシタ。シ

カシトニカク母親ニ報告セネバナライノデ
グランドホテルニ呼ビ出シ、面会シマシタ」
「被告は同ホテルで文子の母に、文子には許
婚者がいるのか、とたずねたそうだな」

「ハイ、ソノ通りデス」

「答えはどうであつたか」

「ソノナ男性ハイナイト否定シマシタ。ソコ
デ私ハ不審ニ思イナガラ、文子ハ妊娠三カ月
ニナツテイル、ト話シタノデス」

「なぜ不審に思ったのか。文子の妊娠は被告
が原因ではないか」

「サヨウデナイト思イマス。私ノ診察シタ二
月十二日頃、スデニ彼女ハ妊娠三カ月グラ
イデアリマシタ。ソノ上、私ノ四回ニワタル行
為中、射精シタノハ第二回目ダケデアリマス。
シタガツテ私ガ原因トスレバ、マダ三カ月ニ
ハナライハズデス」

新考案の中絶法

「しかし鑑定人の報告によると、文子の受胎
は昨年十二月初旬である、となつてゐるぞ」

「ソノ鑑定ハ誤ツテイルト思イマス」

「被告は自分が姦淫した結果、妊娠したもの
と思ひ、文子の母親と会見したのではないか」
「サヨウデハアリマセン。文子ノ妊娠ニシヨ

ックヲ受ケマシタガ、冷静ニ考エテミルト、
私ガ原因デナイトワカリマシタ。シカシ、ソ
ノママ放置ハデキマセンノデ、母親ニ報告シ
タワケデス」

「単に報告しただけか」

「イイエ、コウシタ事態デハ、妊娠中絶スル
ヨリホカ仕方ガナイト、参考マデニ申シマシ
タ」

「当時、文子に果たして堕胎が必要であつた
か」

「医学的ニモ、彼女ノ環境的ニモ、必要デア
ッタト思イマス」

「自己の行為ヲ隠蔽するため、手術をすすめ
たのではないのか」

「イイエ、前ニモ申し上ゲマシタヨウニ、文
子ハ月経不順デ、シバシバ貧血状態ニオチイ
ツテオリ、コノママ出産スルコトニハ疑問ガ
多々アツタ次第デス。マタ、許婚者モオラヌ
状態デ、コノ事態ガ周囲ニ知レマスト、本人
ガ氣ノ毒ダト考エテオリマシタ」

「その結果、二月二十二日、文子の居室にお
いて妊娠中絶をおこなつたのか」

「ハイ、オコナイマシタ」

「いかなる方法でやつたのか」

「普通ノ婦人科的方法デアリマス。初メ卵巣

ト子宮ノ間ニガーゼヲ入レヨウトシマシタガ
ウマク入ラナカッタノデ、次ハ私ガ考案シタ
金属製プーゾヲ挿入シタトコロ、四回目ニ成
功シタノデス」

「さような妊娠中絶を文子は承知したのか」

「ハイ、特別ナ反対ハ致シマセンデシタ」

「文子の体に障害を与えなかつたか」

「ベツニ、ソノナコトハアリマセンデシタ」

「手術後の経過はどうであつたか」

「文子ハ三日間、床ニツイテイマシタガ、間
モナク元氣ニナツタト聞イテオリマス」

「文子宅から何らかの連絡があつたか」

「一度、文子ノ母カラ、月経ニツイテ問イ合
ワセガアリマシタ。ソレデ、モウ少シ様子ヲ
見テクレト答エタノデス」

「その後、文子に会つたか」

「イイエ、一度モ会ツテオリマセン」

「被告は、このようなおのれの破廉恥な行為
に対して、現在、医師としてどのように考
へてゐるか」

「ハイ、医師ノ名ヲ恥ズカシメル卑劣ナフル
マイデアツタト、深く反省シテ、罪ヲ悔イテ
オリマス。マコトニ申シ訳ノナイコトヲ致シ
マシタ」

生人形地獄

美保戸 実彦



乞食の娘
とは思え
ぬ美しい女

童二郎は須黒男爵邸に入ろうとして、ふと足を止めた。

高い煉瓦塀の陰に親子連れの乞食がうずくまっている。この頃街中で乞食を見かけるのは珍らしいことではなかったが、人通りもまれなこのお屋敷町、請願巡査の威嚇的なサー

ベルの音さえ聞こえようというこの通りに乞食の姿を見かけたことが異様に思えたのである。

親子とも赤茶けた蓬髪を地にすりつけて年令のほどはさだめがたいが、子の方は蓬髪を小さな髷に結っていることで娘と知れた。垢じみて布目も分かちがたい着物のその垢の底からほんのり赤い模様も浮き出ている。すりつけた頭の前に置かれた欠け茶碗には

一銭銅貨ひとつきりで、あとはどこから流れて来たか桜の花びらがひとひらふたひら。

(華族屋敷の前に店を張るだけあって、上野の山の乞食より、少しはましな身なりをしている)

胸の裡に苦笑して門前に足を踏み込みかけた童二郎の眼に、もたげかけた娘の横顔が映った。

襟足までどす黒く垢にまみれた顔だったが鼻すじのとあった横顔の線が、童二郎の職業意識をくすぐった。そこに稚ないながら一人の女を見たのだ。

(この歳の女なら、なにも乞食の親の後について歩かなくとも……)

東北地方の打ち続く凶作で、身売りをした農村の女たちが流れるように東京に入ってくる時代だ。女郎屋はそんな女たちで溢れていた。童二郎はそんな女たちを扱う仕事を表向きの仕事にしている。つまり女術である。

(あの歳なら、曲馬団に売りつけた方がいい値になるかも知れんな)

玄関までの砂利道を下駄で踏み鳴らしながら、銭勘定の指を折っている。

あわせ
拾の着流しに日焼けした二重まわしを引っ掛け、長髪に髻面といった風采は、女術とい





と茂る古木に囲まれて、疲弊に喘ぐ帝都を傲然と見降ろしている。

扉を開けた老執事は竜二郎の顔を見て、いやな顔を隠さなかった。忠義な老執事には、竜二郎が主人を墮落させている張本人と見えているのだろう。だが主人から取次無用を言われているのでは拒みようもなく、しぶしぶフロックコートに包んだ体をずらせて、道を開けた。

「殿様は地下室でございます」

「門の前に親子連れの乞食がいたぞ」

うやうやしく下げた白髪頭の前をズイと通りながら、竜二郎は言った。

「娘の方をこれで引き取ってくれ」

耳を疑う執事の手には、ふところから出した重い財布を乗せた。

「百円もくれてやれば御の字だろう。つべこべ言うようだったら、巡查を呼んで引き渡すがいい。それから娘の方は風呂に入れて磨いておけよ」

あんぐり口を開けたままの老執事をそこに置いて、竜二郎は勝手知った奥へ下駄の音も高く歩いて行く。

うより、近頃横行しているアナーキストに近い。だが、長身瘦軀、細面に鼻梁秀でた白面は、日陰をうかがうアナーキストのそれとは異なり、どこか貴公子然としている。

事実、今年二十八になるこの目下竜二郎、れっきとした華族の出で、大学時代より放蕩に身を持ち崩し、果てはさる子爵家の令嬢を強姦して、勘当の身となったのだ。

胸算用を終えた竜二郎は、玄関の大扉についた真鍮の獅子の啞えたノッカーを音高に鳴らした。

須黒男爵、爵位は低い、先祖代々理財にだけ、政商と結託し、地主を抱き込んで、今日では日本全土をゆるがす恐慌の嵐にもビクともゆるがぬ地盤を築き上げている。ここ目白の高台に構えた数千坪に及ぶ屋敷は、鬱蒼

グツと白いうなじを反り返して乳ぶさを喘がせるその風情は男の手にかかるのを待ち受けている様子であったノ



男爵自慢 の地下室 で泣く女

男爵自慢の地下室は、関東大震災で損壊した建物を再建する際に造られたもので、男爵が外遊中に立ち寄ったパリの魔窟の雰囲気を模している。

とつつきの部屋は地上のそれと変らない居間風にしつらえられているが、その一面を仕切る緋色の緞子のカーテンを引くと、そこにたちまち中世の拷問部屋が展がる。居間より数段低く造られたその部屋はアーチ形の漆喰天井を持ち、壁と床は石造りを剝き出しにして、さまざまな拷問具を置いている。×字架、鉄寝台、奇怪な形をした椅子、木馬、枷架、そして革鞭と鎖。

竜二郎が降りて行ったとき、男爵はその革と鉄と、石組みの大きな暖炉に燃える火の臭いとに満ちた拷問部屋に立って、一糸まとわぬ裸女と対していた。

裸女は、天井から下がった鎖に取りつけられた横木の両端に手首を縛られて、真っ白な両腕を万歳のかたちに吊られ、下肢は鉄丸のついた足枷にそれぞれつながれて、大きく捻げられていた。おどろに乱した束髪の陰にな

ってガックリ折った顔は見えないが、肉の締まり、乳ぶさの張りようから、若い女と推測された。絨のような光をたたえた腹と腿の付け根に横ざまに赤い鞭痕を刻んでいるのが無残だった。

地下室にはほかに二人の人間がいた。

一人は丸坊主の若い男で、女と向かい合った壁の×字架に全裸で縛りつけられている。書生の寺田とすぐわかった。哀れにも男の根を革紐で結ばれ、極限までふくれ上った先端を血を噴かんばかりにさせて喘いでいる。

いま一人はその傍に腕組みして立ちはだかっている大男。中世の拷問吏さながらに男はタイツに肩までかかる頭巾に顔を覆い、眼だけを光らせている。男爵の護身役でもあり、拷問蔵では助手をつとめる啞の牛太だ。

「やってますな」

竜二郎は氣さくに声をかけて、拷問室への階段を降りた。

「今日はばかに大がかりじゃありませんか」

「不義の成敗をしているところだ」

「不義密通はお家のご法度というわけですか。いったい誰です寺田くんをたらし込んだのは」

男爵は手にした乗馬鞭で、女のをしやくり上げた。

「ほほう、寺田くんも眼が肥えている。お屋敷一の美女に眼をつけましたね。もちろん、奥方さまをのぞいてということですがね」

竜二郎はその奥方お気に入り奥女中の無残にやつれた貌を見やりながら軽口をたたいた。もっとも胸の裡では、眼をつけていた女を横取りされた口惜しさ半分というところだろうと見当をつけている。

たしかにお小夜は、銀座をのし歩いているモガ連にくらべてもひけを取らない美貌だった。もっとも面だけはやや古風で、今はやりの断髪は似合わないだろうが。

それがほつれ毛をふたすじみすじきつと整えて、細い眉を苦しげに寄せている様子は、ちよつとシネマでも見れないほど艶である。

「それにしてもとんだところでお小夜ちゃん

の裸をおがませてもらえますな。いい体だ。向うの男性美と好一对というところじゃありませんか」

男爵は返事もせず、あごからはずした鞭で白い腹を横に薙いだ。白い顔がヒツとのけぞり、ほどけた束髪の輪が躍った。寺田がいたましげな眼を注ぎつつ唇を噛んで呻く。恋人の無残絵を眼近かに見せつけられ、胸の裡の憤怒とは裏腹に若い欲情が肉の先端に奔騰す

るのをどうすることもできないのだろう。額にあぶら汗を噴き、紫色に変色しかかった先端をピクピクさせつつ透明な液をしたたらせている。

そんな恋人の眼に曝されたお小夜の羞恥と屈辱にまみれた姿も、見ものだ。いくら肌を許したといっても、こんな大の字なりのあからさまな姿態を見せたことはあるまい。乳ぶさはおろか、腋毛も暗も、さらにその下にかたちよく生えそろうた纖毛までもあからさまに曝して、苦悶する姿を見せねばならないのだ。うつすらと汗を絨光らせてわななく雪肌はその死に勝る苦しみにはほんのり染まって、さらに男を地獄の苦しみに悶えさせずにはおかない。

竜二郎はぐると大の字なりの裸形のうしろにまわって尻のかたちも観察した。レビューガールのようないかたちの尻だ。キュッと腰がくびれて豊かなせり出しが上に吊り上っている。これで薄物のズロースをピッタリはかせて舞台で尻を振らせたら、大向うによだれを垂らさせるに違いない。

「で、どうなさるんです」

竜二郎はお小夜の尻たぽを横一文字に走っている鞭痕を指でなぞりながら訊いた。

「白状はしたんでしよう」

「うむ」

男爵は、こんもり盛り上った纖毛を鞭の先で軽くたたきながら、思案するようだ。本来なら追放というところだが、未練たっぷりなのが顔に出ている。鼻下の美髯を摘みながら、縁なし眼鏡を光らせている。

男爵須黒道明は年の頃四十あまり、短軀ながら堂々とした押し出しで、洋行以来のハイカラ好みは、こんな湿っぽい地下蔵でも、白のチョッキに金鎖を光らせ、黒いズボンの折り目をピンと立てている。むろん鞭を持つ手は絹の白手袋である。

「お屋敷払いなら、わたしにゆずってくださいませんか」

竜二郎は汗で重くなった黒髪をもてあそびながら、挑発した。

「いや、まだ用がある」

「妾にでもするつもりですか。あなたは妾は困わない主義と思っていましたかね。それに書生なんかと通じた女を妾にしたとあっちゃ須黒男爵の名にかかりますよ」

「いや、この女、まだおぼこだった」

お小夜が身を慄わせて泣きだした。

「へエ、プラトニック・ラブですか。近頃珍

らしいこともあるものですな。調べたんですか？ それとも……」

「白状しおった。これから本当か調べようと思っていたところだ」

寺田もお小夜に合わせて身を慄わせて泣きだした。

竜二郎はふと哀れをもよおした。普通ならこんな理不尽な侮辱に会えば齒を剝いて怒鳴りだすところだ。が、いかに昭和の御代になったとはいえ、貧乏人に自由はなく、主従の枷もまた厳しい。寺田は男爵の故郷の貧農の件で、その才を見込まれて男爵家の書生に選ばれたのだ。そうでなければ、今頃は泥の中に這いつくばって、東京の大学に通うなどということは夢のまた夢だったろう。

その桎梏に縛られて、このような屈辱にもただ齒を噛みしばって泣くばかりなのが哀れだった。

が、その哀れも他人の運命をもてあそぶことを商売とする竜二郎にとって、薬味のような作用をしたにすぎない。



処女性を
探查する
怪奇椅子

男爵は鞭を竜二郎に渡すと、ゆっくり白手

袋を取った。

「生娘かどうか調べるんなら、あの椅子の方がいいんじゃないですか。奥まで調べられませう」

「そうか」

男爵は牛太にあごをしゃくり、椅子を指さして見せた。牛太は頑丈な桎材の椅子を怪々とお小夜のうしろに抱えて来た。

いずれ上海あたりから買い込んだ物なのだろう。一見坊主の腰掛ける曲木のような朱塗りで細かな彫刻をほどこし、異様な恰好にうねり伸びた肘木は竜の姿をかたどっている。背もたれの、床屋の椅子のように角度を変え、蝶番の部分だけが金属でできていた。万事西洋中世風の拷問具の中で、この椅子だけが文字通りの異彩であった。

牛太はさらにお小夜の足枷をはずし、両腕を吊った鎖を適当な高さにまで下げた。尻が自然に椅子にはまった。

「……おゆるし下さいまし……このようなあさましい恰好だけは……」

両脚をもたげられる段になって、はじめてお小夜は声をあげた。お小夜もまた恋人の寺田同様、金力と権力とに縛られた身なのだ。それでも精一杯腰をゆすって足掻いた。朱塗

りの竜の胴に載せ上げられた真つ白な脛が爪先をよじって空を蹴った。そんな弱い抵抗を楽々といなしつつ、牛太は肘に乗せたお小夜の下肢を取り付けの革紐で固定してゆく。

「これはみごと」

仕上げられた曝し姿は、竜二郎が思わず声をあげたほどみだらで浅間しかった。尻たばまで割れ切って、ふだん太股の間にたたまれている肉をすっかり開け広げている。生まれてこのかた一度も目の目を見たことのない部分分が、しらじらと電灯の光を浴びて、女のいのちをさらけ出している。透けるほどに白いその肌のまん中に、赤貝色の線がひとすじ縦に入り、その線が上に尽きるあたりにふっくり盛り上った肉が、あえかな纖毛のひと叢をフルフルおののかせている。

お小夜はそんな浅間しい姿を恋人や他の男たちに曝す羞ずかしさに生きた心地もないのだろう。吊られた腕にひたと顔を押し当てて呻くような泣き声を洩らしている。

竜二郎はそんなお小夜と、それに向き会って男根を締め上げられている恋人の寺田とを交互に見くらべつつ、いい図だと思った。美男美女の組合せはどんな恰好になっても図になる。まさに朝顔に下り藤と言いたいところ

だ。が、この下り藤、下るところか朝顔をのぞんで赤熱したものをますます上向きに取り上げて、したたる露を脈打つ胴にそうてしたたらせるばかり。真つ赤に苦悶する顔にあぶら汗をしたたらせ白い歯を剝いて総身をわなわな慄わせている。

男爵も眼鏡を光らせて、満足げに二人を見くらべていたが、牛太が居間から鹿の毛皮を持って来て椅子の前に敷くと、そこへ膝をついた。

「竜、お小夜の額を上げさせていてくれんか」
竜二郎は椅子のうしろにまわって、汗に湿ってなまめいた匂いをさせている豊かな黒髪をひとまとめに掴み、グイとばかり顔を起こさせた。

「上の顔と下の顔との見くらべですか」

頬に伝う涙を指でしゃくり上げながら、自分も下の顔を覗き込んだ。

「ああ、おゆるし……」

「神妙に旦那さまのお調べを受けるんだよ、お小夜ちゃん、恋しい男も眼を血走らせて見ている」

ヒューと白い喉を絞って、生え際も抜けんばかりに顔を振りたてた。

「本当なら、自分から××××を開いて、ど

うぞ存分にお調べ下さいましとやらなければならぬところなんだよ。それをお殿様がじきじきにお指をけがそうとして下さる。有難いと思わなくちゃ」

竜二郎は硬い胸のふくらみにやわやわと手を這わせながら囁いた。

その殿様のマニキュアのゆきとどいた指が羞恥の汗に湿った柔肉をゆっくり左右にくつろげた。

「綺麗な赤貝色をしますな」

「うむ」

男爵は返事を喉にからませながら、しげしげと見入る。舌状の肉が柔肉の拉がりにつれて、ねっとり左右に分れて奥を剥き出しにした。頂点のない三角様のとがりまで剥き出しになった。飾り毛は薄くてすこしも観察の邪魔にはならない。

「この頃は東北の山出しのおぼこを飽き飽きするほど見ますがね、これほど品のいいのはすくないですぜ。かたちといい色艶といい、極上ものですな」

お小夜は生きた心地もなく慄えている。

男爵の指がゆっくりまさぐりはじめた。慄えが高まり、臓腑を絞るような呻きが、愛らしいお小夜の口から洩れる。花電車専門の女郎さえいやがることを、十六七の生娘が強制されているのだ。



「あ、いた……」

お小夜が竜二郎になぶられている乳ぶさを激しく衝き上げた。男爵の指が奥を小突いたのだ。指のうごめきにつれて、お小夜は生え際に小粒の汗の玉を浮かせつつ、うむ、うむと呻いた。

「おぼこだな」

チョッキの胸から取り出した絹のハンカチで指を拭きながら、男爵はうなづいて見せた。「さて、おぼこことわかつては、このまま引き下がれませんか」

竜二郎が楽しげに言った。



姫泣きクリームの使用感

「実は今日うかがったのは、かねてご注文の品をとどけるためなんで、ちょうどよかった。これを試して見ませんか」

竜二郎がふところから取り出したのは黒いガラスの小瓶である。受け取った男爵は赤地に金文字のラベルを読んだ。

「唇咲膏」

「唇はハマグリ、咲は笑うという意味。つまり姫泣きクリームってことです。上海直輸入の品ですぜ。天狗楼で水揚げ前の生娘に一度

使って見ましたがね、すごい効きようでした」

「面白そうだな」

「男を知らないおぼこが、男を欲しがって泣いたりわめいたりする図はいいもんですよ。どうです、こいつを寺田くんの手でお小夜さんに塗らせてみたら」

愛する男にそんなことをさせるということに男爵の気持ち動いた様子だった。

「聞いていたろうな」

男爵は寺田を振り返った。

「お小夜にこいつを塗ったら、許してやろう。この屋敷にも置いてやる」

寺田は激しくかぶりを振った。

「いやならいつまでもそうやって放っておくぞ。根をそのままにしておくと、血行が止まって、大事なものが腐れ落ちてしまうが、それでもいいか。もっともその方が不義者にはふさわしい罰だが」

根が腐れ落ちると聞いて、寺田は血の色を失なった。男にとってそれは死の宣告にも等しい。

「寺田くん、承知したまえ。恋しいお小夜ちゃんの××××にもさわれる上に、男を失わずにすむ。それに罰も許して下さるというんだ。有難いお話じゃないかね」

竜二郎がそそのかした。

お小夜は消え入りたげに泣いている。

いとしい。一緒に死んでしまいたいくらい可愛い。だが唇と胸にしか触れたことのない白い肉体を眼の前にしていると、獣のような欲望に狂わされてしまう。喉から手が出るほどに、あの体が欲しい。奥まで拗げられたういういしい肉の合わせ目に、自分の猛ってならぬ肉を根元まで埋めたい。埋めたくて身ぶるいが止まぬほどだ。

せめて触ることでもできるなら——それは眼くるめくばかりの誘惑であった。

が、この誘惑に乗ることは、愛する者を男爵の手に導くようなものではないか。怪しげなクリームの効果は、おそらく女体を男欲しさに泣き悶えさすことだろう。そしてそれを鎮めるためにと言って、男爵がお小夜の処女を奪うに違いないのだ。

これは完全な裏切りである。

喘ぎ悶える寺田の口の端から、よだれが銀の糸となってあふれた。同様に、同じよだれはヒリヒリ脈動する先端からも絞り出されている。

「どうだい、寺田くん。この立派なものはない。にお小夜ちゃんばかりのために持っている

わけじゃあるまい」

屹立するのをスーと逆撫でされて、寺田は眼の前に金の火花を散らした。

ほとんど痴呆のような顔になって、寺田は屈服した。

「そうだ、人生いたるところ青山あり、浜の真砂は尽きるとも、貝の種は尽きずってどこだ」

「お小夜さん、ゆるしてくださいッ」

悲痛な声を絞って寺田は絶叫した。

「……寺田さん、ひ、ひどい……」

顔もあげえず、お小夜は身をわななかせて慟哭した。

すべてのいましめを解かれた寺田は、開け、広げのお小夜の白い膀間を拝跪するように、石の床に崩れ落ちた。

「……ゆるして下さい……」

寺田は身悶えして慟哭する。

男爵はこの愁嘆場にウンザリしたと言わんばかりに顔をそむけ、竜二郎は退屈げな視線を二人に走らせながら、髯をひねっている。

金と権力に打ちひしがれて泣き恨む弱者――

――それはこの二人だけではない。昭和と改元されて間もなくのこの時代に、日本国中のすみずみにまで満ち溢れている。男爵も竜二郎

もこんな情景は飽き飽きするほど見ていて、心を動かされることもない。もし動くものがあるとするれば、それは金と権力を握った者の嗜虐の血だけだ。

「さ、寺田くん。その涙で無駄に石畳を濡らさないで、お小夜ちゃんの内股でも濡らしてやりたまえ。そうすればお小夜ちゃんも感激しておぼこの貝をしっぽり濡らすだろう」

竜二郎は小瓶の蓋を取って寺田の手に握らせた。

「お小夜さん……弱いぼくを哀れんで下さい……いや、さげすんで下さい……」

慄えつつにじり寄りながら、寺田はお小夜を見上げた。

「……こ、こんなことになるのなら……どうして、あの時……いっしょに死んで下さらなかったの……う、うらみませ……」

見上げる寺田から顔をそむけつつ、お小夜は精いっぱい恨みを口走り、さらに声を高くして呻き泣いた。

「ぼくが死ねば……田舎の両親と妹たちが……」

寺田はお小夜の内股に額を押しつけて身悶えた。溢れる涙は竜二郎の言ったとおりお小夜のブルブル慄える内股にしたたる。

「お小夜さんッ」

思いあふれたように、寺田はお小夜の腰に抱きつく、涙に濡れた顔をガバとその股の奥に埋めたのである。



舌と唇で
別れを惜
しむ辛さ

いったんそんな行動に出ると、寺田は狂ったようになって、お小夜が泣き叫ぶのもかわず、ぐいぐい顔を押しつけ、舌で舐めまわした。

「どうやら女は初めてのようだね、寺田くん」
縦長の唇と横の唇とがもつれ合っているのを覗き込みながら、竜二郎が言った。

「上っただけじゃ女は悦ばんよ。もっと広げて奥まで舐めてやらなくっちゃ」

「やめてッ……寺田さん……おねがい、気をしずめてッ」

お小夜の悲痛な泣き声も、身も世もない身悶えも今はないかのように、寺田は欲望の奴隸となり果てた。柔肉を左右に大きく引きくつろげて舌を長々とさし入れる。

「ホラ、ここのポッチが感じやすいんだよ」
竜二郎は指を伸ばして、繊毛を掻き上げ、まだ厚い皮を強引に剥いて肉の芽を曝し上げ

あぶちすと激白

排便を見たがる夫

私の主人は私が排尿したりまた大きいのを出したりするのを見るのを好みます。

夫は寝室に便器を用意します。

いろんな便器（小児用オマル、病人用差込み便器、金魚鉢改造のガラス製便器など）を集めていて、

その日のムードにあわせたのを持ってくるのです。

私はまずそれにオシッコをします。時に夫の口の中に少し出すこともあります。

大の方はいつでも思うように出る訳ではありません。新婚の頃は恥ずかしさが先立ち、とても出ませんでした。

出ないと夫は浣腸するんです。

夫は浣腸器もいろんな種類を持っていて、必ずグリセリン溶液で行ないます。夫は自然便を見たがるので、大量浣腸はしません。柔らかくなってしまうたのは余り面白くないらしいのです。こんな夫ですが、私はとっても彼を愛しており幸せな毎日です。（M子）



た。

「ここをしゃぶってやると、どんなおぼこでも腰を憐れさせてよがるものだ」

寺田は血走った眼をそれに向けたと思うと口をとがらせて吸いついた。

「ヒイ——い、いやですッ」

「ホラね。女がいやというのは感じるってことなんだ」

竜二郎は体を起こすと、むっとり顔の男爵を振り返ってウインクして見せた。

「せいぜい別れを惜しませてやりましょうや」寺田は悲鳴をあげつつ顔を振りたてているお小夜を上眼づかいに見ながら、肉芽を吸いたてている。あたりはつばきでベトベトにな

り、寺田の顔も涙と汗とつばきでクチャクチャだ。手が上に伸び、乳ぶさを握りしめた。この美しい体が遂には自分のものにはならないと思うと、欲望が狂奔するようだ。

お小夜の泣き声が力萎えたように弱々しくなった。男を恨みつつその切ない想いを思いやって、じよじよに許してゆくのだろう。時折肘に乗せられた脚の白い足裏をたわめてキユウと爪先をしならせる。ああとうわづった声をあげる。

「うまいうまい。そこでそのクリームを塗ると、もっといい声を出すよ、寺田くん」

寺田は憑かれたように慄える指で、赤黒い軟膏を指にすくい取り、つばきでベトベトに

した貝肉になすりつけ始めた。

「あまり塗るとただれるからね。薄くまんべんなくすみずみまで塗るんだよ」

「……かんにんして……」

塗りたてられるにつれて、お小夜はかぼそく声を憐れさせた。男の欲望の嵐に巻き込まれて、生れてはじめて腰のうずくのを感じ取ったお小夜だった。そこにえたいの知れないクリームを塗り込められて、どんな体になるのかと思うと、初心な娘心は、はや生きた心地もなくわななく。いじくりまわされるおぞましさと、その指の動きのひとつひとつが死ぬほど羞ずかしい感覚に呼びかけてくるのに満足に息もつけない。

「可愛いお××ちゃんにもタツプリ塗ってやりたまえ」

ふたたび剣き上げられクリクリと塗りまわされて、お小夜は悲鳴をあげつつピクンピクンと跳ねた。

「次は尻の穴のまわりだ。尻が女にとって泣きどころだってことをよく覚えておきたまえ」
「いやあッ。やめてノ……おねがい、そんな所だけはッ」

「ホラ、暴れるだろ？ いやと言って暴れる所ほど女は感じるってことなのさ」

寺田は竜二郎の忠実な弟子になった。すみれ色に小さくつぼまって慄えている蕾に、クリームを盛り上げた。

お小夜はヒイヒイと喉を絞りつつ、狂ったように顔を振りたてる。重く濡れた黒髪が悩乱の極をさまよう貌にバサリバサリと打ちかかり、ますます竜二郎好みのみだら絵風になった。

塗り終った寺田はガツクリ肩を落として、仕上がりには吸い込まれるような視線を向ける。

なぶり抜かれた繊細な肌は薄紅を刷ったように染まり、クリームの効果で充血しはじめた貝の舌は、肉の閉じ目を内から押しくつろげるようにして身をあらわし、かすかに濡れ

うごめいている。肉の芽も苞を押し上げてチヨッピリ赤い顔をのぞかせている。

「あ……」
お小夜がブルツと身ぶるいして、爪先を反り返した。

「ほら、始まった」
尻がレザー張りのクッションの上で小刻みにうごめきだした。はみ出した舌が身を揉むよううごめきを見せたかと思うと、吐息をつくようにして透明な汁をツツと蟻の戸渡りに溢れさせた。

「あのクリームは粘膜から吸収されて女の性感を刺戟するようになってるんだよ。ほらお小夜ちゃんの顔を見てやりたまえ、ずいぶんと色っぽく変ってきているじゃないか」

竜二郎の手でしゃくり上げられたお小夜の貌は、さつきまでとはうって変って、ハッと胸を衝かれるようななまめきの色を帯びている。黒い瞳がトロリと輪郭をぼやけさせて、花の唇はしっとり濡ればみ喘いでいる。

「お小夜さん……」
寺田が内股にすがりついた。
「……寺田さん……助けて……」

グツと白いうなじを反り返して乳ぶさを喘がせるその風情は、男の手にかかるのを待ち

受ける様子である。
「お、お小夜さんッ」

ワツとばかり抱きついてゆこうとするのを竜二郎の手が引き止めた。
「残念ながらそこまでだ。寺田くん」

合図を受けて、牛太が進み出、寺田の裸身を引き離し、石の上を引きずった。わめきたてもがくその間に赤黒くふくれ上ったものがむなしく弾む。

「しばらく檻に入れておけ」

男爵が部屋の際に据えられた、猿を入れるほどの大きさの鉄の檻を示した。

「あばよ、寺田くん、せんずりでもがきながら、恋しいお小夜さんが女にされるのを見物していたまえ」

竜二郎は牛太の腕の中でもがきながら血走った眼をお小夜に向けている寺田に手を振った。

「ああ……た、たまらない……どうにかして……」

引き離されてゆく恋人に追いつくような声を絞り出しつつ、お小夜は濡れそぼった股間を衝き上げ始めた。（第一話・了）

私はこうしてM女を見つける

草刈 善恵



ハントの心得

まだ女を縛ったことのない読者には申し訳ないが、縛るということはそう難しいわけではない。多少、無器用でも馴れてくれば、いわゆる緊縛プレイぐらいのことは誰れでもできる。

難しいのは、まず相手を見つけてることであり、嫌がられずに縛るにはどう誘導するかということであろう。

まず、ハントのテクニックだが、これは、人によっていろいろとやり方が違うし、相手によってやり方を変えなければならぬ場合もある。

例えば、会社のOLを口説くのと、街で女に声をかけるのでは、当然、ハントの仕方が違ってくる。

しかも、単にラブホテルへ連れこんでセックスすればいい、というのとは違い、SMプレイをしようとするのだから、ますますハントが難しくなるのだ。

ところで、SMマニアも本格的になると、セックス抜きでプレイで満足できる人もいるが、ハントの場合、セックス抜きのSMプレイをしようと

しても、まず無理である。縛られるだけのためにノコノコとラブホテルへ連いてくる女なんていうのは皆無といってよからう。試しに、ちよつと縛らせてくれませんかと女の口に頼んでみるがいい、気狂いだと思われるのがオチである。

S M小説などには、縛られたがる女がよく登場するが、そういう女は現実にはいない。マゾ女は見つけるものではなく、普通の女をマゾに飼育していくものなのである。

そこで、ハントする場合に、その女にマゾ性があるかどうか見極めなくてはならない。マゾ性というのは、まだマゾとしての自覚がない状態のことで、マゾ性が多ければ、飼育次第でマゾに目覚めるが、少なければいくら飼育してもマゾにはならない。

これは当然のことなのだが、女にはすべてマゾの要素がある、などと一部の人間がバカなことをいうものだから、女は縛られるのを喜ぶと本気で信じる者が出てくるのだ。縛られて喜ぶのはマゾに目覚めた女だけである。

マゾ性があるかないか、ということより、どれくらい多くマゾ性を持っているか、ということがハントする場合に必要な洞察力なのだ。

性格のきつい女よりもおとなしい女を選ぶのは当然として、おとなしい女にもいろいろあることを知っておかなければならない。

おとなしくても芯の強い女もいるし、性モラルに忠実でS Mプレイなどは嫌悪する女もいる。おとなしいからといってすべてS Mプレイを許してくれるわけではないのだ。そういうわけで、マゾ性が多く、飼育によってマゾに目





覚めてくれる女というのはごく限られてくる。
最も適当な女はどれか、というと、それは男に従順な女

であろう。

従順な女というのを別の言葉でいえば、全く主体性のない、つまり、自分の主義主張を持たない、すべて男任せの女のことである。こういう女は、本物のマゾに飼育することができし、他の女を飼育するよりもずっと楽だ。ハントするときは、このことを忘れずにいてほしい。

S Mプレイへの誘導

さて、これはと思う女を見つけたら、次はS Mプレイへの誘導であるが、その前に是非ともやっておかなければならない事がある。

それは、S Mプレイを伴わないセックスをまずしておくことである。ヤクザな男の言草ではないが、女に言うことをきかすにはまずヤッてしまうことなのだ。これ以外に、女を従わせる方法としては、カネの力しかない。

女にいくらS Mプレイの面白さを力説しても、まず無駄と思ったほうがよい。そんなことで納得してくれる女というのはいないのである。

ところが、何度か普通のセックスをした後に、S Mプレイを誘ってみると、案外簡単にのってることがある。ことに好奇心の強い女の場合には大抵これでいける。

女は、特に従順な女は、肉体を知られた男にはヨワイものである。処女であればなおのことだが、たとえ、何人も

の男を経験している女であっても、セックスをした男に対しては、弱味を握られていると思うのが、女の考え方なのである。これを逆手にとり、SMプレイをなかば強制的に実行してしまう。

もし、その時に女が反抗的になったら、それは、セックスで満足させられていなかった証しだ。セックスで満足させられていれば、大抵のことはきいてしまうのが女なのだ。

女の頭の中には理屈というものは存在しない。あるのは、色と欲だけである。この事がわかっていないと妙な理屈をこねてSMプレイを正当化し、女に協力させようとするようになるのだが、そんな理屈は女には通用しないことは前にも述べた。

好きな男が、コレコレをしよう、というからするのであって、そこで妙な理屈をこねれば、女の疑いを呼ぶだけである。

SMプレイは依然として変態とみられており、それをいくら正当化しようとしても所詮、無駄なのだ。女



は男が考えているよりも遙かに古い性モラルにとらわれており、自由奔放といわれる現代の若い女たちでもそれは同じである。セックスに対しては解放的な女であってもSM

プレイは別なのだ。週刊誌などのデータメな記事を信じてはならない。

誘導の仕方を間違えれば、変態呼ばわりされかねないSMプレイだが、これもセックスの最中に取り入れると、セックス抜きの場合より不自然さは薄らぐ。

焦って最初からロープを取りだすのはあまり上策とはいえない。むしろ、最初のうちは心理的なSMプレイで相手の反応を見極めていく。

例えば、背向位で結合させながら女の両手を背中へ捻じあげてしまう。そのまま女の両手を押さえてロープで後手に縛ったのと同じ状態で更に結合を深めていく。

女にとってはあたかも強姦されているような状態だが、そのまま絶頂へ達してしまうようならマゾの素質は充分といえる。



これはなにも背向位でなければならぬというのではない。要するに、女の両手が使えないように押さえつけておけばいいのであって、もがきながらも気をやるようなら次にロープを取りだして両手を縛ってもさしたる抵抗はしないものである。手で押さえつけているのは面倒だから縛っておく、とでもいっておけばそれでいいのである。

何度もいうようだが、女にSMプレイの面白さをいくら

説明してもわかってはもらえない。要は、体に覚えこますことなのだ。縛られたまま気をやることの嬉しさを身をもって味あわせることなのである。それさえ覚えこませてしまえば、あとは簡単である。

女を縛る難しさは、この後手縛りに辿りつくまでで、それ以上の緊縛プレイ、例えば、海老縛り、開脚縛り、あぐら縛りなどは、その延長に過ぎない。

清美と靖江の場合

ハントであれ、SMプレイへの誘導であれ、決まりきった方法があるわけではなく、相手の性格や生活環境によって変えていくのはいうまでもない。路上で女のコをハントしようとしている男たちでさえ、相手によって誘う言葉を変えていることを知るべきであろう。勿論、人によってハントのうまい、へたはあろうが、要は根気と智恵（あまりよい智恵とはいえないが）である。

ここで、最近の私の経験をお話することにしよう。

清美というその女を見つけたのは私がよく行く喫茶店でのことである。清美は、その店で働くウェイトレスの友だちで、暇つぶしのつもりか、昼間からよく来ていた。

ブラブラしているわりには服装もよく、裕富な家庭の娘に思えた。

清美は客として来るだけでなく、店が忙しいときにはウエイトレスに早替りして、コーヒーなどを運ぶのである。

私が清美に興味を持ったのは、中年男の心をくすぐる小悪魔的な魅力とでもいおうか、

ある種の個性を感じさせたからだった。

個性の強い女というのは、SMプレイに対しては両極端の態度を示すことが多い。まったく拒絶するか、人一倍のめりこんでしまうかのどちらかである。私の受けた印象では、清美は拒絶するほうではないかと思えた。

そんなわけで、清美に興味を持ちながらも、積極的にハントしようとする気は起きなかったのだが、ひよんな事か



らつきあいが始まることになる。

急に土砂降りの雨になった日のことであつた。

出版社から頼まれた急ぎの原稿を書くつもりで喫茶店へ向うと、タバコ屋の店先で雨宿りしている清美を見つけた。

声をかけると、喫茶店で顔見知りになっていたせいか、清美もニコツと笑いながらちよつと頭をさげた。私が傘をさしだしたのはいうまでもない。

喫茶店へ向う道すがら

清美は自分のことを話してくれた。ブラブラしていると思つたのは間違いで、彼女は演劇学校へ通っていた。将来は女優になりたいのだが、もう二十一歳にもなっているから目的を遂げられるかどうかかわからない、というようなことを話した。女優を志すぐらいだから、自分が個性的な女であることを自覚していたに違いない。

ところで、私はどちらかというと芸能界なるものを毛嫌

いするほうで、まして、女優を志す女なんてのは好きにならないのだ。

それにもかかわらず清美に興味を持ったのは、OLや人妻と違ってある種の気楽さがあったせいだろう。はっきりいって、女優などというのは、所詮、まともな女ではなれないのであり、いわば、SM愛好者と同じくこの社会の異端者、はぐれ者である。案の定、清美は私がサラリーマンでないと知ると、急速に親しみを増したようだった。

私と清美がラブホテルの門をくぐったのは、それから一週間とたっていなかった。

清美は処女ではなかった。過去に二人の男と関係があったということだが、そんなことは私は意に介しなかった。私が清美に対してSMプレイへの飼育にとりかかったのは、五、六回も肉体関係を結んだ頃からであろうか。それまでの清美の様子から、最初の印象と違い、かなりマゾ性があると判断したからだった。

最初は、前述したように、結合したまま両手を後手に捻じあげる方法である。体位としては、背向位か後側位であろう。両手が自由にならないので、清美はしきりにもがいたが、この方法でしか私が終わらないのを覚えこまずと、おとなしく身を任すようになった。そればかりか、両手を後手に捻じあげられた時は私の終わりが近いことを知って自分のクライマックスも合わせようになってきた。



この間、約一カ月ほどかかったが、週一、二回のセックスから考えれば、清美の順応性はそう悪いほうではないと思う。

私は清美に対して他の女よりも慎重になっていた。というのも、彼女が感受性の強い女だったからで、へたにSMプレイを始めて拒絶反応を起されては困ると考えたのである。

そこで、最初の縛りは例によってホテルの浴衣の紐を使い、両手を捻じあげるかわりに縛られることに慣れさせていった。

清美は、まるで強盗に犯されるみたいね、といったが、彼女の心境としてはその通りであつたろう。

その段階では、清美はまだSMプレイというものを知らなかったのである。私もまた「強姦ごっこ」と称して、なかば冗談めかしていた。

本格的な緊縛プレイを始めたの



は、やはりロープを使うようになったからで、清美は最初は驚いたようであつたが、別に抵抗はしなかった。多分「強姦ごっこ」の延長ぐらいにしか考えていなかったのだろう。そういうえば、私は清美に対して、SMという言葉葉を一度も口にしたことがなかった。

人妻の味

清美との緊縛プレイをするかたわら、私は別の女ともSMプレイに耽っていた。

その女は靖江といい三十三歳になる人妻で清美を知る一年前からのつきあいであつた。

靖江はデパートをブ

ラついているところをハントした女である。因みに、デパートの中にある飲食店や屋上の遊び場などは人妻ハントにはうってつけであることを書き添えておく。私はこれまでに五人の人妻をハントしている。

靖江は小柄だが、六〇キロぐらいはある太った女で、膝へ乗られると、ヤセた私などは押しつぶされそうになる。

この靖江に対して、最初は普通のセックスで済ませ、二度目からいきなり縛りを始めていた。最初は例によってホテルの浴衣の紐だが、すぐにロープで縛り始めている。

というのも、靖江はひどく好色で、変った刺激に飢えてる女だったからである。SMプレイをする上で、好色な女ほど扱い易いものはない。私はSM雑誌に限らず、春画や春本も見せて、靖江をますます好色な女に飼育していった。

都合がよいことに、靖江の夫は仕事の都合で、地方へ一カ月出かけては一週間帰宅するという生活を繰り返していたので、夫のいない一カ月はますますSMプレイに耽けることができた。それを知らずにいた頃は、縄目のあとのついた肌を夫に見られてはまずいのに、と思ったのだが、靖江の話聞いてからは遠慮なくギリギリと縛りあげたものである。

靖江は太っているもので、あぐら縛りなどは苦しがって長くは続けられないが、開脚縛りや片足吊りなどの恥部を晒す責めはむしろ喜んで享受する。その上、パイプ責めでも

しようものなら、呆れるほど愛液をあふらせて悶え狂うのである。

私は、太った女を見ると無性にその尻を叩きたくなるのだが、靖江もその例外ではなかった。

両手を後手に、体を二ツ折りに縛った靖江のひと抱えもありそうな巨大な尻を高く突きださせて、ビシビシと鞭で叩くときの快感はかなりのものである。当然、靖江は悲鳴とも喜悅ともつかぬ叫び声をあげるが、それがあまりひどい時には猿ぐつわがわりに私のものを口に含ませておいた。

私は、昨今はやりの浣腸プレイは好まないほうであるが



靖江のアヌスを開発して、アナル・セックスをやってみようと考え、さっそくその準備にとりかかった。いきなり私のものを収めさせるのは無理なようなので、ワセリンを塗ってアヌスの拡張にかかったのである。

靖江は、きつと痛いに違いないから指だけにして、と哀願したが、私は無視して、指の次には、大人のオモチャ屋で手に入れた少し細身の「ゴム人形」を収めさせた。

私の強引さに靖江もあきらめて協力するようになり、ウンウン唸りながらゴム人形に慣れていった。

いよいよホンモノを収める段になり、靖江はまたしきりに哀訴しはじめたが、そこまでいってやめるわけにはいかない、とばかりにとうとう目的を果してしまった。

靖江はアヌスを奪われたことでますますマゾっけを増し、私の命令には絶対服従しなければならぬと思い始めたようだった。

あるとき、すっ裸の上にコート一枚を着せただけで、人通りの絶えた深夜の住宅街へ連れだし、コートを脱がせて犬の放尿をさせたことがあった。片足を挙げて放尿する靖江に私はひどく興奮し、怒張したものを口に含ませてそのまま終えたのであった。

靖江がこれほどまでにマゾへのめりこんで

いったのは、子供を産めない体であるため、夫に疎んじられていたせいもあったようだ。

靖江とのSMプレイがエスカレートする一方だったのに比べて、清美とは遂に緊縛プレイ以上のものではなかった。私との年令の差がありすぎて、思いきったプレイをするのをためらったせいかもしれない。

その清美が不意に姿を消してからもう半年たつ。最初にしたとおりに、彼女にはSMは向いてなかったのだろう。



譚樂悦房閨

本篇は昭和初期新感覚派の旗手として活躍したR氏の秘密文庫の代表作。

人間の心情の暗黒部を掘り下げて本格的エロス小説を完成させたものである。華麗な文体の裏にひそむ情熱と、人間の恥部をくり返したりあげる執念といったものが読者の肌に伝わってくる。

新妻の初々しい媚態

土方作業をやるようになって、僕の人相はすっかり変わってしまった。

鏡の前に立つと、眼だけがギョロリと白く光り、ひげだらけの顔は山男か船頭のように渋色に化し、胸も股も異様に骨ばってきた。

日が暮れるとへとへとになって戻った。みづ子はいそいそと四つ辻のところに来て迎えてくれた。

いつも湯上がりだった。僕が垢と土でどろんこになって、腹がけにわずかな出づら（日給）をチャラつかせて帰ってくるまでに、みづ子は銭湯へ行って念入りにお化粧をし、眼

がさめるような和服に、エプロンをかけて出迎えるのだった。

そして、僕の日にやけて、埃と泥で毛穴まで垢黒くなった手や、汗が乾いて白い粉がふいている腕を、ふっくらとした柔らかな指でおそろおそろさわりながら「お疲れでしたでしょう……」ととてもおいしいもの買っている



のよ。さア、早くかえりましょう」と、いそいそと肩をならべるのだった。

食事中、僕の手が彼女の掌にふれる……とそのたびに媚びをふくんだあでやかな微笑をうかべて「まア……」羞らいとともに、いそいでそのしなやかな手を引っこめるのだ。

夜は、疲れているので早く寝る。ときには

あまりの疲れに終日の垢や泥や汗を洗い落とすのもおっくうで、そのまま横になる。みつ子はそんなとき、いっそうやさしくしてくれた。いつまでも眼をあけており、香水の匂いのするタオルねまきの胸をわざときつくしめて「フッフッフ……」と忍び笑いをする。僕は

木の根っこみたいに硬化し、豆だらけになったこの黒い手で、白いゴムのようなみつ子の肌にさわるのが可哀そうなので、じっとがま

んしていた。

みつ子は、となりの部屋との境の襖のすき間からもれてくる灯にうっとりとして、自分の手をかざして、かわいい顎を夜具の襟になかば埋めながら、じっと眺めていることもあった。「あなたの手で、さわってごらんささい……」

ときには惜しげもなく、小さな桜色の爪を僕の岩のような手からめてくる。

じんわりと汗ばんだその両手は、僕の片方の掌にゆっくり包含されてしまう。

「その豆だらけな掌で、もっときつくにぎって……」

「こうかい？」

「そう……オモチャにして……」

「いいのかい？ 痛いぞ」

「平気だわ……あなたの掌よ……この掌……」

「かわいがってね……」

僕は気もそぞろにな

る。

その正体はあとにな

ってつかめた。が、毎

日汚ならしくなって戻

る男は、反比例して美

しくなってゆく若い妻

を、夜ごとに神聖なも

のを冒すような残酷性のまじる興味でさまざまに弄んだのだった。

しかも抱擁のさなか、彼女は興奮に息はずませながら、くりかえしくりかえし、「このお仕事やめないでね……あたしたちの生活、これで充分なんですもの……」

などとささやく。

「いや、もう少し気のきいたインテリ向きの口をさがすつもりなんだが……」

というと、その白蠟のような両手で僕の指をいとしむようにやさしく撫でながら、

「いいのよ、このままが。もっと汚なくなつて真っ黒になって……ザラザラになっていいのよ。そうして、あたしを……どんなにしてもいいのよ……ぶつても……いじめても……」

幸福なんですもの……」

胸をあえがせつつ口走るのだった。

妻の柔肌忍び込む指

僕はみつ子に、このような刺激的な性癖があるとは夢想もしなかった。

この親方の家に厄介になるようになってから、急に、つましい上品な彼女のなかに、何か隠微なものが影響したらしい。それが何

だか、まだわからなかった。

登場人物紹介

ぼく——主人公。大学を出たインテリだが、不況のため土方人夫をやりながら、その日ぐらしをしている。みつ子——ぼくの妻。初々しい美しさに満ちた、まだ少女の面影の残る、世間知

らずの若妻。親方——ぼくたち夫婦が間借りしている家の主人。おゆきさん——親方の奥さん。三十すこしすぎの艶っぽい女ざかり。多分にMの気がある。

ある雨の日――みつ子は昼さがりに風呂へ行った。湯上がりの肌は雨の滴にも脆くそこなわれそうに柔らかい。

「今日はサービスよ」汗でいっそうしなやかな指がまたしても僕の指にからむ。

「サービスって何だい？」

「恋人ごっこよ……ね、いいでしょ。久しぶりのお休みなんですもの」

というわけで、二人は一本しかない傘をさし、抱き合うようにして近くの便所臭い映画館へ行った。

ところが、日暮れにどしや降りの雨のなかを戻る道々、「こわかったわ」と、みつ子が肩をすぼめてささやいた。

「どうしたのさ」

「映画館のなかで……」

「恋人ごっこやったじゃないか？」

「ええ……でも、あなたはあたしの左の手ばかりいじってらしたでしょう？ あのととき、何かお気づきにならなかった？」

「いや、僕は君の体と映画ばかりに気をとられていたからね」

「あたし、ときどきあなたの反対側……右のほうへ体をぐいぐい引っぱられたの……」

「どうしたんだ、いったい？ 痴漢でもいた

のか？」

「ゴリラよ……うちのゴリ公なのよ……」

「え？ ゴリラって……うちの親方のことかい。奴もきていたのか」

「そうなの。明るくなる前にそっと帰って行ったわ」

「あれが、どうしたんだね」

「……こわいわ。口にするのも。あなたお怒りになる？」

「だからさ、いったい何があったんだ」

「あたしたちが入ったとき、ちょうど画面が暗かったので、となりにどんな人がいたか、知らずにあいている席にいらんだでしょう」

「うん、右も左もまっくらだったね」

「そうしたら、間もなく、だれか太った人が途中であたしの右のほうへ坐ったの……やがてモゾモゾ体を動かしはじめ、あたしの手をそつとにぎったり、ギュッと握ったり……とてもゴツイ指だったわ」

「へえ、知らなかったよ。なぜ、僕にいわなかったんだ」

「だって、あなたはきつと、大きな声でなるでしょう……こまるわ」

「こまるって……ヘンだぞ……ヘンじゃないか」

「だって、親方だとわかったのよ。おかげであたしの手、汗でクチャクチャになってしまったわ。そのうえ親方ったら、ぐんぐん自分の体のほうへあたしの手を引っぱるんですもの……奥さん、旦那にや内緒だぜ」って耳こすりまでしながら……」

「で、どうした？ さわられたのか？」

「だって、あんまり強い力なので、あたし……指がもげそうだったのよ……親方の体、本当にゴリラみたいに、熱くって、凄かったわ……」

襖の向うで秘事が

僕は気が狂いそうになった。息ばかり烈しくなり、胸がつまりそうでもある。

その夜、いつものようにみつ子の柔らかな下半身を松葉形に、僕の脚できつく締めつけているのだが、すこしもやさしい欲望はわいてこない。むしろどす黒い特異な感情に胸が焼けてくるだけだ。

畜生！ と歯ぎしりしても、相手は家主であり逞しい仕事師だ。どうにもならない。

体じゅうがふるえてくる。ふと、みつ子の肌にふれた指の先が、熱い沼のなかにおかれたようだった。

かわいい僕の人形は、事前に、しかも何の

愛技もちいないのに、早くも亢ぶっているのだ。

どうもヘンだ……僕はこの頃、急にある種の媚態がこまやかにようになってきた彼女の体内の衝動的变化を見のがすことができない。だがそれを口にすることは恐ろしかった。

やがて、みつ子はすやすやと微かな寝息をたてて眠りはじめた。が、僕は眠るどころではない。

すると、いままでぜんぜん気にもしないでいた隣室の、ヒソヒソときさやく気配が、やたらに耳へ入ってきたのである。

「いやよッてば……また、浮気がはじまったんですもの……」

おゆきさんのなまめかしい低声だ。鮎入道親方が要求しているらしい。

「くすぐったいじゃないの。親方、しつこいわ……こんなこと今日、おとなりの奥さんにしたんでしょ」

「うそこけ……映画を見てただけさ」

源親方のだみ声が妙に鼻にかかって、それに答える。

「よくあんたなんかにはさわらせたのね……お人形みたいな顔して……案外なのね」
「よせったら。きこえるじゃねえか」



「あつ、いたいわ。ねエ、もう今夜はおそいから……ねむいのよ……いやったら、今夜は……ペッペッ、くさい！ お酒のんだのね……」に気がねするのか、間の襖のほうへ顔を向け「じゃ、いつてやろうか……こう……こうや……」

僕はほとんど無意識に床の上に坐り、襖のすき間からのぞいていた。
「よし……そんな乱暴なこと！」

源親方はガバッと起き上がり、毛むくじやらの厚い胸に、ゴム人形のようにたわたわし

たおゆきさんを抱き上げている。
おゆきさんはもがきながらもこちらの二人

「こうしてやったんだぞ、ホラ、どうだい……」

親方は片手でやすやすとおゆきさんを膝の上へ抱き上げ、片手をめちやくちやに動かしている。どうやらくすぐったり、揉みしだいたり、つねったりしているらしい。

おゆきさんはせつなそうに白い手でふせごうとしたが、

「どっこい、そうはさせねえよ」と、親方は枕もとにあったヨレヨレの帯を口でくわえ、か弱い両手首をにぎったと思うと、うしろへねじり、きりきりと縛ってしまった。

縛られる隣室の婦人

「静かにしてちょうだい……もう手むかいしませんから……おとなりに関こえちやいけないでしょ」

おゆきさんはうしろ手に縛られ、浴衣をすっかり剥がれた裸のまま、ゴロリところがされた。

「やっぱり、それ……ここんところをこうして……イタズラしてやったのよ。そうしたらネチヨネチヨ、あったけえ汗があふれてなア……どうでえ、くやしいか……」

源さんは、ますます執念ぶかくなってゆく。おゆきさんの白い肢体はこうして長い間、アザのつくほどつねられたり、くわえさせられたり、さざえのような拳骨で所きらわず叩かれどおしだった。

しまいには、毛だらけのまっ黒な尻を、ヒヤシンスの花弁のような顔の上にのせられる

しまつてある。

「どうだい、往生したろう……え？……おゆき。かわいいなア手前は……なんてかわいい面アしてやがるんだ……さ、こうしてやろうか……痛えか？ うん？」

親方はふたたびおゆきさんを抱き上げ、むつちりと大きめな乳房を指でグイグイ押している。それから熊手のような掌をひろげ、その肉のかたまりを強くつかむ。大きな掌なので、乳房がそのまま溶けてしまうようだ。

「アノ……もう……わかったわ……あたし、つかれたの……もう……寝ましようね……」

「よしよし、じゃ、その前に」

おゆきさんは何かいおうとしたが、髭にうずまった親方の唇にしつかりとふたをされて声が出ない。

「さア、そのちっちゃなお手手で少しかわいがってくん」

おゆきさんの白い手が、親方にがっちりつかまれて誘導されてゆく。

やがて、彼女はうしろ手のまま、夜具のなかへ荒ら荒らしく引きずり込まれた。

「ああ……ゆるして……もう……ゆるして……ああ……ああ……」

おゆきさんのたえ入るよううめきが澄ん

できこえる。

あとは、ただチュッチュツと吸う親方の唇の音だけだった。

M性の芽を育てる妻

——夜は白々と明けていた。

この恐ろしい場面に圧倒されつつも、僕はこのとき、何かたいへんなものを忘れていたことに気がついたのである。

「人は女に生まれない、女になるのだ」パワーはいつているが、マゾヒストにしても、決して生まれながらのものではなく、個人的な嗜好が自己陶酔の体験にまで高められそれが性愛技術の上で選択権を持つようになる——このプロセスを、僕は忘れていたのだ。

みつ子は毎日、親方夫婦の乱暴な行為を見聞きするうち、そのマゾヒストの芽を育てていったのにちがいない。第一、僕たちの場合みつ子は正常な性行動の単調さに堪えられないナルシズムの徴候をはっきり持っていた。

彼女はいつも鏡の前で、うっとりとして自己の肢体に魅せられていた。指の股を開いたりつぼめたり、小さなお腕を伏せたような乳房のほのかな汗ばみを楽しんだり……それはもう自分で自分の美しさが充分に愛撫しつくせな

いもどかしさを見せるのである。

そして、いつも僕に「あなたの垢と汗で不潔になった手で、あたしをいじって……どこでもいいの……いつまでもさわって」と要求したものだ。

こうたどつてくると、だんだん何かしらがわかっていくように思われた。

翌日は現場の作業に出た。初夏のガラガラした太陽で終日、裸の背中がヒリヒリと痛かった。

コンクリートと砂と砂利をかきまわしながらも、僕はまだ考えつづけていた。この頃のみつ子はたしかに少し前とちがっている。急にはしゃいだかと思うと沈んでしまう。そしてとなりの間の襖ばかり気にしている。

額からタラタラ流れる汗をぬぐいながら、そのとき僕は「あッ、そうだ!」とわれにもなく大声を出していた。

「おれの留守中、みつ子はひとりで源親方と同じ屋根の下にいるのだ……」

そう思うとじつとしていられず、僕は自転車のハンドルをにぎると、力いっぱいペダルを踏んでいた。

家に戻ると、頬をまっ赤にしたみつ子が、足音を忍ばせて出てきた。そして、ふるえ声

でささやいた。

「音のしないように入ってよ……すごいところなの……こんなシーン、毎日なのよ……」

すぐ、たえ入るように泣きじやくるおゆきさんの声が耳に伝わってきた。

思わず襖の破れ目からのぞいて見る。

一条まとわぬおゆきさんのまっ白な肉体にまず眼がくらむようだった。

すんなりと伸びた両腕はしっかり親方につかまれ、誇らかに突き出された美しい乳房には、洗濯ばさみが痛々しいまできつく食い入っていた。

親方は仰向けになったおゆきさんの腹の上にびったりと大きな体をすりつけ、禿げ頭をふりふり、

「おい、おゆき、となりの奥さんがのぞいているぜ。はずかしいかよ……」

舌なめずりしながら、彼女の顔へからかっている。

「いや……いや……いやよ……」

うわずった声でおゆきさんはくりかえす。

そのうち親方は彼女の手首をわしずかみにして、ぐるぐる部屋じゅうを引きずりまわしはじめた。「痛いかな? どうだい……」とうめくようにつぶやきながら、ときどき真つ

黒に汚れた足のかかとでおゆきさんの口をこじあげ、太い足指を無理に押し込んだり、美しい顔全体を踏みつけたりしている。

「毎日、二時間も三時間も、こんなことをしているのよ」

「お前、それを、しじゅう見ていたのか?」

「だって……見ろっていうのよ……」

「親方がかい? おゆきさんも知っているのかな」

「ええ……銭湯に行くといつも体を流しっこするのよ。そうして歯の痕や抓ったアザや、棒でぶたれた傷を見せられるの……あたし、なぜ逃げないのってきいたら、おゆきさん、逃げられないのよって、さびしそうに笑っていたわ……」

☆ ☆ ☆

みつ子は、マゾとサドの世界を、終日、僕の留守中に見せつけられていたのだった。それでまたひとつ、謎がとけたような気がした。僕たちは、どんなに愛し合っているにも、何か大切なものがひとつ不足していたのだ。

生来、弱いもの、もてあそばされるものにきまっている女性が、その意味を自覚するときもう、普通の対等の愛撫ではあきたらなくなるのだということと、恋愛においても、夫婦



親方は、タバコと焼酎の匂いのまじった臭い息を吐きながら、カラカラと笑った——
こうして男女四人の、妖しい情痴の一夜が幕をあげてゆく……

午後九時すこし前に、おゆきさんとみつ子が化粧クリームとはなやかなシャボンの匂いを、肌から発散させながら帰ってきた。

二人の若い女性のソプラノは、露路の向こうからすでに、なまめかしい雰囲気をはびかせてくる。

「おッ、ご帰還のようですぜ……」

夕めしの膳をそのまま、ずーっと飲みつづける源助親方は、あい変わらずポリポリとたくあんをかじりながら、唇元へはこんだ焼酎のコップをふっととめて、ニヤリとこちらに笑って見せた。ふだんでも陽に焼けきった渋紙色の顔が、酔いのため、いっそうどす黒くテラテラ光っている。

「親方、今夜は、ほんとに楽しそうだね」

と、僕が少し冷かす口調でいってやると、煮しめたような手ぬぐいで、おでこの汗をふきふき、

「ウッフッフ……まアね、これと、アレさえありゃア極楽だよ」

かすれた笑い声をあげ、コップの焼酎をグ

えぐられるような異様な嫉妬と性感情がわいてきて、狂おしい興奮状態がくるのだった。それがまた、彼女自身の情念をせき立てる因ともなった。

二組の夫婦の提案

生活においても、満足しきることとは、永つづきしないものだということ……つまり男がサディスチックなジャームに欠けている場合、しのびよる不満と味気なさが、ついには大きな溝となって、思いもかけぬ破綻を招来するという事実……満足しきることの危険……そんなことを、僕は痛切に考えさせられたのである。

ことに毎晩、みつ子とからみ合いながらも映画館でのが頭に浮かんでくると、胸を

親方夫婦のすさまじいSM生活に触発された、妻のマゾヒズムに気づいた僕は、とうとう思いきって、非常に冒険的なことを源助親方に相談したのである。

イと喉に流し込むのだ。ここでまた、僕の頭のなかに、今夜の計画に対する絶望的な妄念がチロチロとくすぶりはじめた。

僕が今日親方に提案したのはその夜、二組の夫婦が床を並べてザコ寝をすることである。そうすることによって、どんな事態が起こるのか、僕にもくわしい見とおしはなかったけれども、とにかく僕はみつ子をライオンの檻へ追い込んでやろうと決心していたのだ。

親方はさすがにテレテ、なかなかウンといわなかった。しかし、こっちがあれだけ強く熱心にたのみ込んだのだから、おそろくいまはその気になって、異様な性的興奮を感じながら時刻のくるのを待っているにちがいない。今さら「やっぱり、やめておこう」などと切り出せるものではなかった。

むろん、自分の愛する妻を、他人に味わわせる……なんて、とうてい常識ではゆるせないことだ。しかもまだみつ子は、僕の乱暴な計画がよくわかっていないらしい。

「これは、僕のえげつない性愛のエゴイズムにすぎないのだろうか？ みつ子はその場面を、生命的に拒むだろうか？ だが、となりの部屋での、親方夫婦の修羅をのぞき見していた彼女のことだ……ぜんぜん興味がないわ

けではあるまい。おれ一人に対してだけの愛情が、たとえ不作為の誘発によって性的興奮に転化することがあっても、それは僕たち二人の、さらに高められ深められてゆく性愛——その次への飛躍の身振りと考えてはいけな

だろうか？」
僕の頭のなかには、終わることのない『疑懼』にキリキリ舞いをするばかりなのだ。

と同時に、ゴリラのあだ名をもつ親方からさんざん凌辱されるみつ子の白い裸身を想像して、逆比例的に、破裂するような欲情がのたうちまわるのである。そして、剔りつけるような快感がぐんぐん盛り上がってくる……。『親方、じゃア、今夜はあのとおりやってくれるね？』

僕は飲めもせぬ焼酎を舌先に舐めながら、もう一度源さんに念を押した。

「万事、呑みこんでまさら。どんなことになるか、ま、これからのお楽しみってわけだ……」

親方は眼をギラギラさせ、ワイセツそのものの表情でニヤリと笑う。そして、このとき二人の女性は玄關をあけたのである。

寝化粧した妻ふたり

「あんた、汗を流してくるといいのに……お酒なんかよしてさ、ね そうしなさいよ」

「いいんだ。これで汗は引かアな。それよりオレたちは眠くなったぜ……」

おゆきさんは親方としやべりながら、鏡台の前で、卵の白味のようにつやつやとした肌をぬぎ、ペタペタ、クレンジングでマッサージしている。みつ子も同じことをしていた。

親方は焼酎をすっかり飲みほして、赤鬼のようになった顔を僕に向け、ジロリと意味ありげな目くばせをする。

「かまわねエ、おれたちの手で布団を敷いてしまおうや」

の目ことばである。

そして実際に、僕たちは二人で夜具を取り出し、のべはじめた。

「アラ、めずらしいこと……殿方にお布団を敷いてもらうなんて」

おゆきさんは鏡台にうつる僕たち二人の、ぶきような床のべ作業をツヤッぽく笑いながら眺めている。

予定どおり夜具が並んだ。

八畳の部屋の一窓がわがおゆきさん、次が親方、そのとなりがみつ子、僕の順である。僕たちの部屋は仕切りの襖が閉めきってあつ

た。

親方は「暑い暑い」といってよごれた襦ひとつの裸になり、染めのはげたセンペイ布団へどしんと寝ころんだ。

寝化粧をおえたおゆきさんは台所の戸じまに立ち、みつ子も夕食のあと片づけをやっているうしろ姿が見える。いずれも、眺めていると何か、こう、汚ないガマガエルのような身に身をのまれる直前のような、いたましさを感じられた。

「電気はつけておこうか」と僕は親方にささやいてみる。

「いや、今夜は月が出ているから、よく見えますよ。大丈夫……」

源さんはニヤリと片眼をつぶって答えた。やがて、四人は横になった。

みつ子のやわらかい脚が、いつものようにすぐ伸びてきて、からんでくる。

おゆきさんは親方の向こうに、薄いかけ布団を、むっちりしたかわいいアゴのところまで引っぱって、あお向けに寝ている。うっすらと目をつぶって……。

目が闇に馴れてくるにしたがって、四人の動きが手にとるように感じられてくる。親方の酔っぱらった、気ぜわしい呼吸まではつき

り耳につく。

「ねエ、臭いのよ……こっちへ顔を寄せてくるの……」

間もなく、みつ子が体をかたくして、ちぢまるように僕の胸へ顔を押しつけてきた。

彼女の乳首は、もう、かたくなっていた。

指文字のラブサイン

「よし……いや……よし……まだ……

まだ早いわよ」

おゆきさんの声が、布団の下からわななく。親方の食欲はまず、若妻のほうへと向けられたいらしい。

「あなた……あなた……こわいわ……かわつてちようだい……ね、あたしを、そっち側に寝かして……」

みつ子が、ぐんぐん体を押しつけてくる。

そこで僕は、いよいよ、本番に入る前の宣言にかかった。

「みつ子、今夜はこれから、すごいことがはじまるんだよ。……キミの美しい手や脚は、きつとかわいそうなことになると思うけど、

僕が承知なのだから、我慢しなけりゃいけない。そうして、これから始まるいちいちの事がらを、そーっとささやいて、知らせるん

だ……もし、それができなかつたら、僕の掌

に字を書くんだ。指先で片カナを書くこと……わかったね」

こういいながら、ためしにみつ子の体を撫でさすり、内股へさわってみると、もうべつとり、興奮があふれていた。

何も知らないような顔をしていながら、早くもみつ子は、何か、妖しい快感を迎えていたらしい。

僕はその手首をにぎって、むりに小さな掌をひらかせ、右の指で「ワカタネ」と書いてみた。くすぐったいのか骨の感じられぬやわらかな掌が、金魚のようにムズムズと泳いでいる。が、観念したように、

「エエ、デモ、コワイノヨ」と応答してきた。

「デハ、スコシ、オレハ、ムコウヲ、ムイテイルカラ、キミハ、オヤカタノ、ホウニ、ムイテ、オイデ」

指文字でそう伝達すると、僕はクルリと彼女に背を向けてしまい、じっと耳をすましていた。

みつ子は必死になって、僕にしがみついた。背中を押し当て、何かを求めるようにグイグイこすりつけてくるのだ。

「アナタ……コッチ……コッチムイテヨ……
オヤカタノアシガ……アシガ……コワイワ」
「ウルサイ……ムコウヲムイテロ……ウルサ
イ……」

じゃけんに僕が彼女の顔を脇ではらってや
ると、みつ子はあきらめたのか、それなりじ
つと静かになった。

暗闇でうぐめく柔肌

「そんなこと……わるいわ……わるいわ」

不意に、おゆきさんの訴えるような声が、
おさえられた唇の間から洩れる調子で聞こえ
てきた。

「奥さんは、承知なんだよ……静かにしろい
！」

と親方の低い叱り声。（以下、耳に入った
そのままを記し、いちいちの説明をばく）

み「ヒドイコト、シテルワ」

僕「クワシク、シラセロ」

み「イエナイワ、ソーット、アタマヲアゲテ
ミテゴランナサイ」

みつ子の指はふるえていた。彼女の心臓の
激しい羽ばたきが背中にドキンドキンと伝わ
ってくる。

静かに頭を上げて、親方のほうを覗いてみ

ると、親方はおゆきさんのまっ白な顔の上に
馬乗りになたがって、その小さい唇をむりや
りこじ開けている最中だった。

おゆきさんは苦しそうに目をつぶり、首を
左右に振りつづけているが、逞しい掌にガッ
チリ頬を押えつけられ、間もなく親方の思い
通りにされるのはわかりきっていた。

み「ヒドイコト……カアイソウダワ……ニゲ
ラレナイノカシラ」

僕「アアサレルノ、キット、イインダロー」

親「うーん、こてえられねえ……おい……お
ゆき……どうでえ……」

ゆ「プ……プッ……ゲエ……プッ……」

親「ふん、おらっちのが、少しでかすぎたか
な……よしよし……さア、こんどはどうだい
……うん？」

ゆ「親方……待って……待って……ノドがし
びれるわ……痛いわ……」

親「わるかったな……さア、こんどは……う
ん、そうだ……お前は少し休んでいな……い
いもの見せてやつからな」

親方が立ち上がり、自分の床へ移る気配が
した。どうやら彼は、いよいよみつ子の体に
イタズラをしかける気を起こしたらしい。

み「クルワ……コッチへ、クルワ……ドウシ

マシヨウ」

みつ子の半裸の全身が、小さきみに、電気
にかかったような震えをおびてきた。僕はわ
ざと、背を向けたまま放っておいた。

と、突然、そうだ、文次通り突然だった。
……みつ子の上半身が、すーと音もなく、親
方のほうへすべっていった。

もう、手文字の便宜はなくなってしまった。
完全にみつ子の体は親方のほうへ向きかえ
られ、おそらく両手をつかまれた形で、ゲン
グンとあの毛むくじやらの胸もとに手ぐり寄
せられているのだろう。

手文字による通信が途絶えてしまったので
僕はもうすべてを奪われたよううそ寒い思
いにひたり、煩悶をつづけなければならなか
った。だから、全身の注意を耳に集中し、ど
んなにかすかな物音をも聞きのがすまいとつ
とめていた。

そこへ、親方の低いささやきが、ボソボソ
と伝わってきたのである。

「奥さん、いい匂いだね……いい化粧品を使
っているんだから、たまらないよ。……なに
も……それ……そんなに、ちちこまるこたア
ないよ……だんなは、寝てるんだろう？……
わかりやしないさ……どれどれ……おっぺえ

のところを、あけてみなよ……」

モソモソと体を動かす気配が伝わって来る。

妻と親方のあらそい

僕は目の前が、まっ赤に灼けただれてゆくような、錯倒する、悲痛な感覚におちいつていた。

サラサラと、かすかな音がする。布団にもぐって、耳をすます……と、親方の、むせるような、醬油のこげたみたいな体臭が、みつ子の肌にしみこんだ甘い香料の匂いとまじって鼻をつく。

サラサラ、サラサラ……という音が激しくなった。この音は、ガツチリとみつ子を抱き寄せた親方が、わざと彼女のやわらかな内腿の肉に自分の毛脛をこすりつけているのにちがいない。

「いけません……おじさん……はなして……そんなこと……」

親方とみつ子が揉み合っているすきに、僕は彼女のうしろから、そーっと手を伸ばして腰のあたりへさわってみた。すると、ああ、いつの間にか僕のかわいい妻は、一糸もまともぬ全裸にむかれているではないか！

僕はカーッと全身の血が逆流する思いで、

親方に気どられぬようみつ子の背中をたたき連絡用の片手をこっちへよこせと合図した。

みつ子はうしろを向いたまま、右の手だけをそーっと僕の掌のなかにまかせた。くちやくちやに濡れている。ふかし芋のように湯毛立って、やわらかくなっているのだ。

そのうえ鼻を押しつけてみると、ひどく青くさい。腋臭のような悪臭が立ちのぼってくるのである。ああ！彼女のスベスベした可憐な指を、親方は早くも、垢と汗にまみれた自分の不潔な体じゅうになすくりつけたのにちがいない。

僕「イマ、ナニシテル？」

み「イヤ」

僕「オシエロヨ」

み「イヤ」

僕「タノム……」

み「オッパイ、ナメテルワ……カムノヨ……フトイユビ……イタイノヨ……コンドハミミノナカニ、ユビヲツツコンデルノ……ミミガコワレルワ……」

（とたんに彼女は手をひっこめてしまった。何か、ひどいことをされ、それをその手でふせいでいるのだろう……）

親「おゆき、寝たのかい……おい、寝たのか

よ……」

（親方は右の腕にみつ子を抱き、左手をおゆきさんに伸ばしているようだった）

ゆ「また、はじまったのね……しつこいわ……奥さんが、お気の毒だわ……」

僕「イマ、ナニシテル？」

み「カタカラ、テヲマワシテフタリノ、チチクビヲ、イジツテル」

僕「キミノテハドウシテル」

み「キタナイトコロニモツテイカレテ、ギョットアシデハサンデ、ウゴケナイ……」

全身を貫く痺悦

そこで、僕はふたたび、うしろからソーツと妻の体に手をのぼしてみた。と、どうしたことだろう！その辺は親方のごつい両脚によって、蟻の這うスキもないほど完全に占領されているのだった。

僕はギョツとなり、いそいで手を引っこめて、みつ子の肩ごしに様子をうかがった。

み「オヤカタ、ヒドイコトヲシテルノ……タスケテ……ツネルノヨ……イタイワ……アラ……コンドハ、オユキサンヲ……イジメテル……」

じっと耳をすますと、みつ子の切れ切れな



ウワ言も伝わってくる。

「オヤカタ……イヤヨ……モウ、イヤデス……アア……ユビ……ユビヲカンデ……コノテカワイイデショ……オヤカタニアゲルワ……ア……アッ……」

（どうやら、みつ子の手首を親方は口のなかにほうばって、くちやくちやと噛みしめているらしい）

僕はもう、我慢できなくなってしまった。いま、みつ子のマゾヒズムは源助親方のすさまじい暴虐に火をつけられ、メラメラと燃え上がっているのだ。もう一刻の猶予もならない！僕は狂おしい衝動から突き飛ばされるように、みつ子の体へにじり寄って、しっかりと抱きしめていた。――

だが、この夜のドラマはそれだけで終わりにならず、時間を追って殺気立ってきたのである。

きっかけは親方の、なかば脅迫的な呼びかけだった。

「旦那、おとなりの旦那！早く、今のうちにおゆきのところへ行ってやってくだせえ！奥さんは大丈夫……旦那があっしの頼みを聞いてくだされば、奥さんは放してあげますよ」

僕はみつ子が悲鳴をあげて止めるのも聞かず、フラフラと立ち上がり、おゆきさんの床へ移動する始末であった。

おゆきさんも、全裸だった。

みつ子の常用しているクリームやおしろいとはちがう、また、一種なんともいえない化粧品の香りが、まっ白なおゆきさんの全肢体から発散していた。

思わず、僕の両手はおゆきさんの胸を抱いていた。親方はニヤニヤ笑って、それをのぞき込んだ。

「旦那、どうです、ひとつ、とっかえっこをしてみましかうか」

すると、みつ子が悲痛な声でさげんだ。

「それだけは、ゆるして……それだけは……ね……あなた……承知しちやだめよ……」

「奥さんは、黙ってな……」

親方はみつ子を膝に抱き上げて、いきなりその唇に自分の口を押しつけてしまった。

僕はもう、どうしていいか、わからなくなってきた。

するとこのとき初めて、おゆきさんの目がパッチリと開いた。

あまりの弄びに疲れはて、ぐっすりと眠っていたらしい。

一変した四囲の状態に、おゆきさんは、げんな面持ちだった。

が、自分の肌にびつたりと、僕の胸がくっついてるのを、このとき初めて感じたのか

「まア……いけませんわ……奥さまに……」

そういいながら、おゆきさんは半身のり出して、親方のほうをみた。

親方は、片手でみつ子の胸のあたりをイタズラしながら、彼女のかわいい体を膝の上で揺り動かしている。

そのとき、みつ子の悲鳴がふたたび部屋を切り裂いていた。

「たすけて……たすけて……あなた……たすけて……ひどいわ……こんな……」

ふくれ上がった血管の中を音をたてて血が走った。もうなにも考えられなかった。

「あひるの会」(東京)

全裸開脚縛りで昇天

リポーター・岩下京助

一月十日、私たちは、新年のプレイをするために、神田のスナック・蘭へ集まりました。

家具会社の営業マンをしている田宮さん、建設会社の岡村さん、そして私の三人です。

酒好きの田宮さんたちも、その日はプレイに備えて神妙にビールを飲みながら私を待っていました。当日のプレイメイトは佐々木カオルさんといい、友人の紹介で知りあったのですが、一緒に酒を飲みながらの私のSM談義にすっかり興味を持ってくれたのでした。

もちろん、カオルさんにとってSMプレイは初めての経験になるわけですが、彼女の様子から、もともとMつけのある女性と私は知らんでいたのです。

初対面の田宮さん、岡村さんを紹介したあと、プレイの成功を祈って幹盃し、さっそく岡村さんが借りている両国のマンションへ私が運転するクルマで向いました。どんなプレ

イにするかは、カオル

さんが未経験というこ

とや、リーダーも決めていなかったので、そ

れぞれ自分の得意なプ

レイをすることにしま

した。カオルさんのほ

うからは、あまり痛くしないで、アソコへは手を触れないで、などという要望がありました。が、いざプレイが始まってしまうと、そんなことはケロリと忘れてしまうのが女性だということ。私は経験から知っていました。

岡村さんのマンションは、プレイ用に借りているようなもので、邪魔な家具もなく、誠に便利です。暖房で部屋を温めると、私たちはさっそくプレイにとりかかりました。私と田宮さんとは何度か一緒にプレイをしているのですが、岡村さんは初参加です。そこで、岡村さんに敬意を表して口火を切ってもら

ことにしました。尻込みする岡村さんも、プレイに見栄や外聞はありませんよ、と励まされて、持参のロープをボストンバッグから取りだしました。

一方、当日のヒロインであるカオルさんのほうもSMプレイ初体験とあって緊張している様子です。そこで、リラックスさせてやろうと、ヌード写真の撮影から始めました。なんと、いっても、彼女はまだ二十二才のOLです。大の男三人に取り囲まれては緊張するのも無理はありません。とはいえ、彼女も覚悟して来ているのでしよう、私が、裸になって





というと、素直に脱いでくれました。スラリとした肢体を惜しげもなく晒すカオルさんのヌードを数枚撮っているうちに彼女もリラックサしてきたので、いよいよ岡村さんの緊縛プレイに入りました。

独特なロープさばきで後手縛りにすると、椅子に坐らせて更に両足を開脚縛りにしました。ドキッとするほど鮮やかなピンク色の秘

奥が黒い茂みと共にクローズアップされ、私たちの視線がその中心へ集中します。カオルさんはその羞しさに耐えきれず、小さな悲鳴をあげて体を揺すのですが、その顔は興奮のせいか、薄赤く染まっていました。若い女性が秘部を曝けだされて羞しさに身も世もなく身悶える姿くらい刺激的なものはありません。それまで岡村さんのプレイを見物していた田宮さんも私も我慢できずにカオルさんの体へ手を伸ばしていました。

両側から乳房を撫ぜまわし、揉みたてポツチリと固くなった乳首を摘まんてこねまわすと、カオルさんは、アア、アアと声をあげて悶えます。男たちの指が先を争うように濡れた秘肉をまさぐりました。私が思った通りでした。ソコだけは触らないで、といったカオルさんは



むしろ、男たちの愛撫を期待するかのようウネウネと腰を突きあげてくるのでした。

結局、3時間ほど堪能し、カオルさんにも満足して貰えたのでまずまずのプレイだったと思います。私たちは現在、「あひるの会」というSMプレイ同好会を作り、月一回程度のプレイを楽しんでいます。私たち同様の初心者でプレイに参加してみたいという方は編集部気付け「あひるの会」へご一報下さい。

する縄妾志願の美女達

女性は調教次第で一〇〇人中九九人までがマソヒストになり得る——とはベテランのSMマニアの弁であるが、確かに心理学的にみても、女性は本来Mの気があって、これを実らせるか否かはパートナーの腕次第であろう。

ここに登場した五人の女性は、程度の差こそあれ、皆一様に縄の体験を持っており、さほど好きでないにしても、拒絶反応は示さない。つまり相手次第で如何様にも変貌する可能性を秘めているのだ。交際希望の方は相手の写真を切り取って編集室宛郵送されれば本人に回送する。

女の賭け・性的な冒険



(NO. 1 林 京子 25才)

♡あたしは親友の女の子とその彼氏に、SMっていうのはこんな風なのよ、と半ば暴力的にやられ、最初は痛いばかりで、Mっていうのはつまらないものだと思っていました。

でもさいきんすこし考えが変わってきたの。優しくソフトにやっていただけなら、プレイを楽しめるようになるんじゃないかしら。

だからあたしが交際を希望する相手は、テクニクにすぐれたロマン派の方に限ります。どうかあたしを優しくリードして、すばらしいSMの世界に導いて下さい。

(No. 1 林京子 25才)

♡あたしの夫はとても真面目で優しい人なのですが、恥ずかしがり屋のうえパワー不足で、いつも満たされぬ思いに悩んでいます。

あたしは暴力的に犯され、耳元で恥ずかしい言葉を囁かれるとどうしようもなく燃えるのです。そんなことのできる男性と、こっそりおつき合いしたいと思っています。



(NO. 2 前野嘉子 28才)

筋肉質でたくましく、できればあたしより若い方が希望です。あたしのチャームポイントは、ほっそりしたアンヨだと皆いっています。このアンヨを強引に割り裂く男性の出現を待っている人妻なのです。

(No. 2 前野嘉子 28才)

サディストの彼を募集



(NO. 4 本山美佐子 25才)



(NO. 3 山川みゆき 22才)

♡細で痛く縛られるのはイヤ。でもあたしって、革の衣裳を着せられたり、箱口具なんか噛まされて、女奴隷みたいにあつかわれると、スゴク興奮しちゃいそう。

でもあたしは、愛してる男性とでなきゃ燃えそうにもないわ。精神的に愛せる男性の出現をお待ちしております。

(No. 3 山川みゆき 22才)

♡学生時代におつき合いしていた人がSMマニアでしたので、三年間の愛人関係のうちに、すっかりこの道のトリコになっちゃったんです。社会人となったのを機会に、その方ともお別れし、SMも卒業したつもりだったのですが、なぜか忘れられず淋しい思いをする事がときどきあるのです。

ご年配の方と時々プレイをすることができ



(NO. 5 田村ちえ子 21才)

たらと願っています。どうかよろしくご指導ください。

(No. 4 本山美佐子 25才)

♡秋田より集団就職で上京し、現在会社の寮に住んでいます。

以前、縛られたり吊られたりした経験がありますが、SMはよく分かりません。ただこういう事が好きなのは社会的地位のある紳士が多いと思いますので、友達もいない私の相談相手になっていただきたいのです。

(No. 5 田村ちえ子 21才)



ハードな吊り責めに拍手



SMクラブ「SAMM」のビッグなイベント

日本一のサロンを目指す

いれずみの女

奴隷競り市

本邦初のSMサロンと銘打ってオープンした「SAMM」は大勢のマニアの支援を得て順調なすべり出しを見せている。

「かみしもを脱いでSMを語れる店」のイメージで本格的サロンを目指し、奴隷の衣裳をまとわせたウェイトレスを充分訓練して、好評を拍している。

こんごはショーに重点をおき、ユニーク

昭和三六年頃、奇譚クラブのグラビアペー
ジをにぎわしたイレズミ女、小原清子の二代
目として、「まい子」クンが登場した。

彼女は真性のM女で、サム的主要なエンタ
ーティナーとしてショーで大活躍している。
まず太腿にバラを一輪、次に右肩、左肩に
もスミが入り、その若々しい美肌とあいまっ
て彫物界でも貴重な存在になりつつある。

・とき 2月29日(日)PM5・00より
・ところ 港区六本木・メンバーズ「サム」
・参加人員 20名まで

楽しい宴の最中、ファンファーレとともに、
奴隷商人が数人の女奴隷を引きつれて
登場。スーツに着飾った貴婦人、あどけな
いハイティーンなど各地から集められた奴
隷たちが泣き叫び、ひれ伏して許しを乞う

| 日 | 旺 | 演 | し | 物 |
|----|---|----------------|--------------|---|
| 1 | 月 | ハードSM | 家出娘はSMが好き | |
| 2 | 火 | 責めて愛して | | |
| 3 | 水 | 裏切り女やくざの運命 | | |
| 4 | 木 | ヤングのSMはリズムに乗って | | |
| 5 | 金 | ハードSM | 家出娘はSMが好き | |
| 6 | 土 | マニアのSM | お客様の出演どうぞ | |
| 8 | 月 | 悪い私をいじめて下さい | | |
| 9 | 火 | 自縛ショー | 縄の悦びを知った人妻 | |
| 10 | 水 | ハードSM | 鞭で力いっぱい責める | |
| 12 | 金 | いれずみの女 | 私のイレズミご披露します | |
| 13 | 土 | マニアのSM | お客様の出演どうぞ | |
| 15 | 月 | M女性を責める | | |
| 16 | 火 | 続・いれずみの女 | | |
| 17 | 水 | レスピアンSM | 愛するが故に嫉妬する | |
| 18 | 木 | ハードSM | 吊りのあれこれ | |
| 19 | 金 | 縛り方教室 | | |
| 20 | 土 | マニアのSM | お客様の出演どうぞ | |
| 22 | 月 | お医者さまゴッコ | | |
| 23 | 火 | 拷問 | | |
| 24 | 水 | 続々・いれずみの女 | | |
| 25 | 木 | 私を責めて下さい | 小泉みさ子 | |
| 26 | 金 | 浣腸して下さい | | |
| 27 | 土 | 縛り方教室 | | |

な企画とストーリー性のある演し物でお客様に満足して頂く方針だ。セリフも多くし、内容を充分吟味するという。

二月中のスケジュールは左の別表の通りであるが、二十八日(日)には始めて奴隷競り市を催すこととなった。

最初は無理矢理ステージに上げられ、縛られ、吊るされ、涙を浮かべていたまい子クンも、いまではすっかりマニアの一員となつてしまひ、どんなハードな責めでも受け入れるようになった。彼女のイレズミの披露にこの期

のも構わず一人ずつ競り台に登られ、裸にされる。セリ落した客は彼女とのプレイを存分に満喫できる趣向である。

参加希望者は左記に申し込まれたし。

東京都港区麻布台一の四の三フェニックスビルB1「サム」電03-五八七-二三六六。

本格派SMビデオ

撮影見学記

矢城一魔(神奈川)



地下牢は女の悲鳴で充滿：

ビデオの普及に伴い、SMプレイも影像化時代に突入したようだ。SM小説やSM写真だけでなく、ビデオでじっくり楽しみたいという要望も多いが、そんな期待に添えるSMビデオテープを制作するK氏と知りあい、さっそく撮影現場を見学させてもらった。

撮影に使われた主な場所は、会員制クラブで有名な東京・六本木のSMクラブ「サム」である。毎夜、趣向を凝らしたSMショーを

やるので、店内全体が地下牢の如き妖しげな雰囲気を持っており、十字架、木馬、鉄の檻滑車などSMプレイ用の大道具、小道具はすべて揃っているのだから撮影場所には絶好だ。その上、K氏を始め、スタッフや登場する男性、女性のすべてが本格的なSMマニアなのだから、いわゆる「作りモノ」のSMビデオとは自ずから違ってくる。

ストーリーは、アパート探しの女子大生がスナックの客に騙されて秘密組織のアジトへ連れ込まれた上、奴隷女として調教されると

いうものだが、ストーリーよりも、「SMプレイの見せ場である責めに重点を置く」のがK氏の目的だそうである。

撮影開始が午後1時、出演する女性は三人で、十八才、二〇才、二十一才と若い。男性はこの日を待ちかねた、いずれもサドっけ充分の面々ばかりだ。

正直なところ、男性陣はともかく、美人揃いで、しかもこんなに若い女性たちが、SMプレイを理解できるのかと疑問に思っていたのだが、撮影が始まってそんな考えは吹っ飛

んでしまった。

裸身をギリギリと縛りあげられ、男たちの苛酷なリンチを受ける女性たちの哀願や悲鳴にはマゾ女特有の、あの妖しげな喜悅さえ感じられるのだ。

宙に吊られた女たちの裸身に、乳房といわ

ず尻といわず容赦ない鞭が、ビシッ、ビシッと唸りを生じて炸裂する。見学者の私などはあまりのすごさに下胆を抜かれる思いだ。

だが、泣き叫ぶ女性たちの表情をよく観察してみると、明らかに被虐の法悦に浸りきっており、地下牢に充満する悲鳴は肉奥からあふれる悦声であった。

ホンモノを作るのが使命……

午後六時、撮影は今や最高潮に達していた。男たちの苛責なリンチに女性たちの白い肌は薄紅色に燃え、一月の寒い最中だというのに汗をビッシヨリかいている。突然、それだけは許してッ、という悲鳴が聞えた。一番若い女性が放尿を強制されているのだ。だが、拒み通せるはずもなく、やがて羞恥の悲鳴と共にこらえにこらえた放水音が聞えてくる。



責め地獄の地下牢から必死の逃亡を企った女性が捕まった。泣いて許しを請うその女性は、見せしめのために最も苛酷なリンチが加えられるのだ。逆さ吊りにされた裸身が空を切り裂く鞭でクルクルとコマのように回り、遂に気を失ってしまう。

「私自身、三十数年ものマニア、ホンモノを愛好者に提供するのが私の務めでもあるんです」と語るK氏は、今後、次々と本格派SMビデオを制作するという。今回、撮影現場を見学させて貰ったビデオは、「紫痕」という題名で間もなく発売されるそうだ。

倒錯愛のメッセージ

当欄は探美舎発行探奇倶楽部が主宰する探美会会員の方々のメッセージを掲載しました。当欄への投稿及び探美会入会を希望される方は145Pをご参照下さい。

♡SMプレイ歴十年余り、未だ初步の段階を出ない三〇代後半の夫婦です。縛り、羞恥責め、野外プレイ等を研究している同年代、又は四〇代半ばのSMプレイを実行しているご夫婦の方、一五三センチ、四十八キロ、バスト八十五センチ、ウエスト五十八センチ、ヒップ八十八センチの妻ですが、調教飼育、ご指導して下さいませんか。又そのような愛好会がありましたら、入会させて下さい。都下、近県の誠実でプライバシーの守れる方(会)を望みます。野外でのプレイ経験は、深夜の全裸股間縛り、乳房縛りでのドライブ散歩等を行っております。

No 1 都内

晒し人

♡私は現在三〇才、離婚後一人暮らしをしています。身長一六〇センチ、体重

六〇キロ、バスト八十八センチ、ヒップ九十二センチ、スタイルはいい方だと思います。趣味はドライブや旅行ですけれど、男のお友達がいない淋しさをまぎらわすため、ポルノ映画をこっそり見に行く事もあります。女盛りの体をもてあましているような私でよかったら、お友達になって下さい。希望としては月一、二回のデートができるテクニックばっぐんの中年男性を望んでいます。お手紙にあなたのテクニックをくわしく書いてねッ。ではお便り心からお待ちしています。

No 2 宮城

みちのく

♡私達共に三〇代の夫婦です。二回目のメッセージですが前回S女性を求めましたが、今回は露出に興味のある方々と交際をいたしたくペンを取りまし

た。私達の露出はSMを合わせた露出責めで、私達二人はMですが、室内で妻は短いミニスカート(パンティはつけず)上はスケスケのブラウス等をつけ、私は妻の下着等をつけ、二人で外から見える所でセックス及びオナニー等を行ないます。又近くの公園及び映画館でもします。妻はレズも好きなようです。このような私達と交際を下さるご夫婦及び独身の女性(男性の単独はおことわりします)。独身の女性の場合、旅費ぐらい出します。連絡方法をお書きの上、お手紙かTELをお知らせ下さい。

No 3 徳島

すだち

♡私は三十八才、主人に色々とセックスをおしえてもらっておりますが、何かものたりず、SMにあこがれていま

すので、テクニシャンの方私をすばらしいSMの世界へと導いて下さい。その前にSMについて、お便りや写真などで快樂のすばらしさを教えて下さる方も大歓迎します。私は今主人に要求して居るのですが、主人はまだ日が浅いので良くわかりませんので、SMのセックスをおしえて下さい。写真同封TELも一緒にお願いします。

No 4 山口

太めの人妻

♡私達、三〇代のオシドリSM夫婦。夫は一六五センチ、七十二キロ、S七〇パーセントにM三〇パーセント。妻は一五二センチ四十四キロ、S五〇パーセントにM五〇パーセント。本格的な縄使いができるSM夫婦と、スワップ並びにオージィを望みます。一緒に素晴らしい緊縛フォトを写しませんか。当方、ポラロイド三台とビデオカメラ一台を所有しています。私も妻も、一応のカメラ技術を持っています。もちろん、秘密厳守ですから、撮った写真が外に流れるようなことは決してしません。その辺は、良く話し合い、互いの人間性を信頼し合った上で、プレイ

に入りました。ですから、最初は文通から始めて、じっくり交際できる方を望みます。私達は神奈川在住なので近所の方がいいですね。年令も、同じ三〇代前後の方がよいです。なお、夫の私はM気もありますので、奥様の方も縄使いができる方を希望します。

No 5 神奈川

N生

♡わたくし、夫に命じられて、このマゾの告白の文を書かされています。正直に何もかも書かないと、お仕置の答を受けなければならぬのです。わたくし、三十五才。七才になる一児の母親です。昼は貞淑な主婦として生活しておりますが、夜になると大変身、淫らなマゾ妻となってしまう。わたくしの特技は、温泉芸者等がやるという「花芸」です。夫の厳しい特訓よろしきを経て、現在のところ、ゆで卵なら呑み込み吐き出し自由自在です。うまくいけば、つぶすこともできます。お尻の方も使えます。たつぷりとアナル、マッサージをしたあとなら、ヴァギナ用のパイプでも簡単に入ります。こちらは、入れるのは出来ませんが、

出すのは自力で何なくやってみせられます。エネマにも、かなり耐えられます。八〇〇Cまで石鹼水を入れられたことがあります。十分以上がまんできました。アルコール浣腸も、ビールを水で薄めたものなら平気です。お尻から飲んで、立派にホロ酔い加減になつてみせられます。

ああ、恥ずかしい事を沢山書いてしまいました。どうして、夫がこんな恥ずかしい事を書かせるかというと、夫はわたくしの花芸やエネマ狂いを自分だけで楽しむのは勿体ないと言うのです。誰か自分と同じような性癖の方に見せてやりたいと申すのです。それで、わたくしに特技の事を書かせて、同好の人を集めようと考えているのです。わたくしは、こんな恥ずかしい芸を夫以外の人にお見せすることなど、とても出来ません。が、どんなにわたくしが嫌がっても、最後は自分の言う通りにしてしまう夫のこと。逆らったところで、縛られて答で打たれて、お客様の目の前で芸をさせられるのは間違いありません。ですから、せめても、そのお客様になる方は、身許確実に秘密を

厳守される方を選んでくれるように夫に頼んでおります。

〔夫から一言〕

というわけで、妻の花芸をご覧に入れます。ただし、これは初めての試みなので、お一人だけに限らせていただきます。条件は妻帯者であること。

そして、その奥さんにも私ども夫婦の前で、妻と同じ芸をやってもらおうこと

（出来る出来ないは問題にしません。

とにかく同じことを試していただければ結構です）。近県在住で、土曜の夜に一泊で来られる方。この三つの条件を満たす方、まずはお手紙下さい。

№6 山梨

夕顔夫婦

♡私共、夫四十二才一六七センチ七十二キロ、会社員、S八M二。妻三十七歳一五七センチ四十八キロ、専業主婦M十。

妻は、私の目の前で他の男性とすると、狂ったように燃えます。縛られてそうされた時には、なお一層欲情します。感度も良好すぎるので、失神することよくあります。これまで東京に住んでいたので、何度かスワップ、パ

ーティやオージイの会には参加しました。が、今秋から大阪支社に転勤となったため、近くに同好の仲間がいません。誠意のあるご夫婦からのお誘いをお待ちしています。なお、妻はラビア・ピアシングをしています。私は、P C済みです。

№7 大阪

S I生

♡私達三十八才、四〇才の夫婦です。

自営業。SMに理解のあるご夫婦、私達をご指導ください。私はいつも主人に調教されて居りますが、今すこしものたりません。私にSMのすばらしさを教えてほしいのです。身動きできない体にいろいろされたいの。ご夫婦の方で私にSMのすばらしさを思いきり教えてください。

№8 下関

M好きな妻

♡遠近にかかわらず、妊娠されている方、ご一報下さい。高額謝礼します。

№9 都内

前田八郎

♡わたしは、小さい頃から病弱で、よく母から浣腸をされました。三日もお

通じがないと、すぐ浣腸、熱が出たと言ってはまた浣腸。いやだと言って暴れても、母と父に押さえつけられて、何度でも浣腸されました。

小学校高等科ぐらいになると、さすがに浣腸されることは少なくなりまして。それでも、月に一度ぐらいはされていたようです。もっとも、父と母に二人がかりで押さえつけられてということはありませんでした。わたしも少しは大人になって、素直にお尻を出して浣腸を受けるようになったからです。それに、その頃すでにわたしは初潮があつて一人前の女でした。ですから父も遠慮して、わたしが浣腸される時は部屋にいないようにしたのでしよう。わたしには、五つ違いの妹がいました。その妹も、よく浣腸されました。母は、妹の浣腸の時は、わたしに手伝いをさせるのでした。妹も恥ずかしかったでしょうが、わたしも自分が浣腸されるようで、たまらなく恥ずかしかった覚えがあります。

こんな子供時代が、わたしに浣腸への不思議な恋慕を抱かせているのでしょうか。そして、わたしをこれほど悩

み苦しませているのでしょうか。

いま、わたしは二十四才のOLです。人並みに恋人もいますし、彼とは夜の関係もあります。お仕事も順調です。平凡で幸せな生活を送っていると思います。でも、浣腸への熱い思いだけがわたしをアブノーマルな世界に誘い込んで、苦しめるのです。浣腸されたい。誰かにとっても恥ずかしいことを言われながら浣腸されたい……。夜ひとりになると、いつもそんなことを思ってしまうのです。もちろん、こんなことが裂けても彼には言えません。もし自分の性癖を彼に知られたら、自殺してしまうかもしれません。彼に浣腸されたい気持ちは、ないとは言いません。でも、それより羞恥心の方がはるかに強いのです。わたしが浣腸のことをご相談したい相手は、わたしの身許をご存知ない方で、またご自身も浣腸マニアの方です。そんな方と、いろいろな浣腸の体験談など語り合いたいです。そして、この性癖が治るものなのか一緒に研究していききたいのです。もし治らないのなら、時々、闇に隠れるようにしてそういう方と浣腸しあって、少

しは欲求を満たしたい。そんなことを思ってしまうのです。わたし、そういう方とすぐに直接お会いする勇気がありません。できましたら、しばらくは誌上交際として浣腸談議などしてみたいと思います。こんなわたしのようなお願ひでも、お手紙いただけるでしょうか。

No 10 名古屋

ひなげし

♡スワップ希望です。夫三十七才妻三十二才。仲良し夫婦です。まだ未経験ですが今度思いきって呼びかけます。私達を上手くりードして頂けるベテランのご夫婦を望みます。お二人の写真TEL、住所同封願います。なお、妻は少し緊張していますので気持ちを柔らげるために刺激的なお便りをお待ちしております。返事、返送、秘密厳守です。

No 11 名古屋

初心者

♡私は浣腸とアヌス責めに興味のある二〇才の大学生です。プレイ経験のないM女性の方、同じくプレイ経験のない私と一緒にSMプレイを楽しみたいです。

よう。また経験のあるM女性の方、ご夫婦、カップルの方、私にSMプレイを教えていただけませんか。年令不問秘密は守りますし返事は必ずいたしますのでよろしく。

No 12 都内

友の会

♡小生の愛妻U子は、若干レズッ気のあるM女性。U子の年令は二十八才。身長一五八、体重四十八。BWHは、八十五―五十八―九十。中肉中背で、夫の小生が言うのも何だが、伊藤ゆかりに似た可愛い顔だ。

小生は、人一倍嫉妬心の強い男だがU子のレズ願望に関しては、ヤキモチも感じぬ。むしろ、U子にレズプレイをさせて、それを見て楽しみたい気持ちだ。U子が、同性のサディストに責められて悶えている姿を想像すると、つい興奮してしまう。

U子にレズッ気があると気づいたのは、はじめてのオーギーの時だ。オーギーと言っても同好の友人夫婦と同室で同時進行セックスをしたただだが、その時、試みに友人の奥さんとU子にレズ行為をさせたとこU子は激しく

興奮してしまったのだ。友人の奥さんは、それほど燃えなかった。少し嫌がっていたぐらいだ。しかし、U子は内股までビッシヨリ愛液で濡らしていた。U子は、中・高・大学と女子校だった。だから、レズには拒否反応がないのだそう。だ。もつとも、学生時代にそういうレズ経験があったかという、そうではない。やはり、同性よりは異性に興味があったと言う。しかし、あの時のように無理やりそういう状況を設定されると、進んでレズ戯れの中に入ってしまうそう。そして、変な具合に倒錯的な破廉恥な雰囲気になってしまふのだとU子は言う。小生は、本物のレスボスでエスッ気のある人にU子を責めさせたくてたまらない。そんな女性で、小生がプレイに参加してもかまわないという方がいたら、是非お手紙下さい。なお、U子の好みのプレイを次に列挙しておく。クンニリングスバギナ責め、スパンク責め（鞭は駄目平手打ちだけ）、跡のつかない程度の縛り、言葉による羞恥責め、そして一番好きなのがバイブ責め。嫌いなのはろうそく責め、顔責め、アヌスや尿道

に関する汚ない責め。それから、針や炙などの痛いSMも嫌いだ。だから、責めてくれる女性には、U子の嗜好を尊重してもらえようお願いしたい。それに、U子にも責め役をやらせてほしいのだ。彼女はそれも望んでいるし、小生も両方見てみたい。勝手なことばかり言って申し訳ないが、我々夫婦は、真面目にSMに取り組むもの。そのところを推察していただいて、お手紙いただきたい。

No 13 都内

T生

♡まじめなSMマニアの若いカップルよ。僕たちと一緒に甘いBDプレイの一夜を持ちましょう。四人でのプレイなら、別室スワップでも同室でも結構。当方は、僕は二十八才、一六八センチ。六十五キロ。緊縛とA責めとエネマが好み。妻は二十九才、一五九センチ、四十七キロ。オーラルSEX大好きなM女。二人とも未知のプレイをいろいろ試してみたいと思っています。身元確定で、秘密厳守の方、僕達夫婦にお手紙下さい。ただし、男性の方はPC済みの方に限ります。写真同封（でき

ればヌード）でお願いしますね。
No 14 都内 さそり座

♡初めてのメッセージ致します。現在婚約中の彼がいます。彼一六五センチ五十四キロ、私一五三センチ、四十八キロ、二人共二十二の同じ年です。

とても明るくさわやかなカップルだと思っています。私にとって彼が始めての人なのです。何から何まで教えて頂いても感謝しております。近ごろSMに興味を感じここに勇氣をもつて投書しました。最初はとても恥ずかしくていやだったのですが、今ではとりこになっています。SMやスワッピングに興味のある方私達といっしょにプレイしてみませんか。なお交際には割り切った交際にと考えております。プライバシーを守り、秘密厳守、返事は絶対です。年令は問いません。お便り下さい
No 15 埼玉 三浦友恵

♡今日は！私は三〇才前半の男性です。アナル、浣腸プレイをしてみませんか。（女性にかぎります）年令は五十才までの方とお願いします。

№16 京都

ナンバー・ツー

♡私は探奇倶楽部の愛読者です。しかしそれを実行する勇氣はありません。ただ日本のポルノ規制の頑固な保守性に怒っている一人です。私はすでに五〇才を過ぎましたが、私が生きているうちは、日本国民の感情からいって、「全面解禁」にはならないと考えあきらめております。私が欲しいのはSMのノーカット写真です。売買は刑法にふれるとは思いますが、愛好者が個人的に交換するのならいいのではないかと考えております。そこでどなたか「その種の写真」とくに「局部いじめ」系統の写真をお持ちになっていたらお知らせ下さい。私は外国ポルノなら写真のネガで相当持っております。そのネガ（見本が必要ならマスプリして差し上げます）自体が必要ならそれと交換できないでしょうか。

№17 都内

YY生

♡私、三〇才を過ぎたばかりの美人妻です。野を渡る初夏の風のようなさわやかな貴女との出逢いを夢んでいます。

緑鮮かな連山のふもとの私宅へ旅行をかねてお出かけ下さい。やさしい主人のすすめで、夢のようなレズの世界へ旅立ちたいと思います。車好きな私と近くの溪流などたずねたいと思います。学生、OLの方、人妻、同年代までの方の素敵なお便りを待っています。写真、住所、電話もよろしくね。

№18 岐阜

白ゆり

♡小生、二十八才、妻二十六才です。SMという言葉を知って、かれこれ三年位になりました。色々な雑誌を読んできたのですが、マンネリ化して最近面白くないものが少ないようです。妻とのプレイはSMという程の事はありません。そこで女性からのお手紙でもお待ちしております。Mの女性で身許確実な方、又はご夫婦の方でも構いません。小生色んな器具を持っていますが、完全に使っておりません。又、写真等も持っています。写真交換も希望します。

№19 長崎

H・S

♡①ぼくの年令は五十一才。身長一六七センチ、体重六十五キロ、シガない

サラリーマン、顔は加山雄三と（故）田宮二郎に似ていると人はいいます。（自信はない、年も年だし、ぼくはそんなに似ているとは思わない）交際したい人はやはり年配の人がいい（三十才より五〇才ぐらい）。若い人は少しこわいし扱いにくい。経験は全くない。局所いじめなどのプレイを楽しみたいがぼくの一方的な楽しみでは相手に失礼何かをやって差し上げたい。ぼくは何時でも放射抑制可能。その上P・C済。（医師の証明あり）②局所いじめなどの写真が欲しい。その交換に外国ポルノ写真のネガを差し上げます。（デンマークに約一年滞在の経験で収集、持参）SMのいい写真がありましたら約五〇枚のネガを全部差し上げます。（交換）

№20 東京

国分洋

♡私は初老のスリムな指圧院の経営者ですが今は殆んど助手にさせて女性の肉体を指技により開花させることに執念を燃やしています。クスグリも腹部切傷も咬傷技も、皮膚刺激による秘め

られた過去への復しゅうの変形で、指技によりこれらの欲求を加味し満たしながら、肉魂から生命あるヴィナスを創造出来たとき限りない喜びを感じます。より多くの女性との機会を得て反省と修練をつみたいと思いますので、ご協力頂ける方はご連絡下さい。出来る限りのことはご希望にそいます。また、快美帯や指技による新テクニクの情報交換もお願いします。

No 21 尼崎

美樹

♡私、二十八才、一七一センチ、五十六キロの独身男性です。今まで数回プレイ経験あります。その内容は露出プレイが主で、あなたを羞恥の世界へお送りします。露出プレイに興味のある女性の方、僕と二人でスリルを味わってみませんか。又、写真撮影にも興味があり、あなたのヌード写真及びSMプレイ写真も撮らせて下さい。(DP Eもできますが未現像のままお返しします。希望者のみ現像可)趣味の合う女性の方で健康でマジメでお互いのプライベートを厳守できる方、お手紙お待ちしております。デートの時は、必ず

ノーパンで待って下さい。あなたの町まで愛車に乗って行きます。ミニスカートならば尚結構なのですが！

No 22 兵庫

スカイライン

♡三十八才で個人で広告関係の仕事を経営しております。身長一七五センチでどちらかといえば筋肉質で学生の頃はいろいろなスポーツをしておりました。三〇代から五〇才位までの女性の方とおつき合い出きたらと思います。二〇代でもいいのですが出きたら三〇代より上の方が好きです。容姿は特に問いません。やさしくて、おとなしい性格の方で、時間は貴方さまの方に合わせられます。SMなどにも興味がありますが、強要は好きではありません。男として思いやりのある、ロマンチックなおつき合いが出来たら、それが一番だと思っています。お手紙をいただけたら必ず返事を書きます。いろいろな考えを持った女性の方がいると思います。そんな話など話しあえたら、一層いつき合いが出来ると思っております。ぜひお手紙を下さい。愛のある人生を期待します。

No 23 東京

美記郎

♡私は三十二才、一七〇センチ、六十キロの身元確実な独身男子です。自由業ですので平日の昼間に時間があります。社会的信用を重んじる職業ですので、秘密は絶対に守ります。まだ未経験ですので、いろいろ教えて下さるマゾの女性の方。又は、マゾ的傾向のある女性の方。始めは、ソフトからになるとと思いますが、交際して下さい。近くにお住まいの方を希望します。お待ちしております。

No 24 埼玉

ドロ

♡私、一年前に妻と離婚致しました。理由は性の不一致です。私がSMに強い関心を持ち実行までした事が、潔ぺきな妻には我慢できなく、私すべてを不潔だと言って飛び出してしまいました。仕方のない事です。ですが、独身になった今は、誰にも遠慮なくSMプレイを楽しむ事ができます。もしよろしかったら、私とお付き合して下さい。私四十一才。外見並の男です。

No 25 東京

S・H

探美会通信……

K会員の体験記

私たちはSMを始めて七年目になります。SM雑誌で得た知識だけで縄の縛り方も知らず、ぎこちないプレイで毎回、SMプレイのパターンも同じになってしまい、他人のプレイを見たくてしょうがなくなっていました。

そこで、妻と相談し、通信欄でベテランの人を選び、連絡を取りあいました。会ってみると、SM歴二〇年、とても紳士的で、妻の賛成を得て、プレイを拝見することにしました。始めて見る他人のプレイのことが気になり、当日が待ちどおしくて、想像するだけで心がわくわくしました。

後で聞きましたが、交際誌の中にはインチキな人や不良がかった者も利用しているとのこと、始めての人が良い人であったのは幸運でした。

当日、M氏が予約したPホテルに妻と二人で待合せの時間に伺いました。

そして、指定の部屋に入ってびっくりしました。初体面の奥さまは全裸で首に犬の首輪をつけられ、床にひざまずいていたのです。

「若い人に見られているのだから、ハ

ッスルしなさい！」

M氏の命令で、奥さまはM氏の立派な男性自身を口に含み、四つん這いになりました。

「妻の可愛い女性自身をよくのぞいて見てやってください」

びっくりしている私たちにM氏は声をかけてきました。妻と私は、M氏の言葉につられて、奥さまのそばへ行きました。





「両足を大きく開いて、お見せしなさい！」

M氏の命令で、奥さまの素晴らしい秘部が私たちの目の前にあらわれました。「こんなに濡らして、はしたないッ」

M氏は更に両手で奥さまの秘部を開き、指を入れたり、つまんだりして内股が私たちに見えるようにしてください。

いました。次に、M氏は首輪のクサリを引っ張り、奥さまを私の方へ向けました。奥さまは私のズボンのファスナーを下げて、私のものを引出し、可愛い口を含みました。私はただびっくりしているだけでしたが、奥さまの巧みな舌の動きで、妻が見ているのにもかかわらず、いきり立ってしまいました。

その部屋へ入ってまだ一〇分もたっていないのに、もう私たちは興奮してしまいました。ベテランM氏の初心者の扱いのうまさに関心してしまいました。そして、プレイの流れの運び方がうまく、私たちもぎこちなさがいつのまにかとれて、プレイに参加できたのです。

その後のプレイも私たちの目の前で行われましたが、言葉の重要さ、縛り方のうまさなど、感心するばかりでした。M氏ご夫婦も私たちに見られていつもよりハッスルしたそうです。フィニッシュには私も参加するように誘われましたが、始めてですので、妻にも気がねして参加しませんでした。

そして、私たちは興奮したままM氏ご夫妻に別れを告げ、すぐ近くのラブホテルへ直行してしまいました。でもプレイ用の道具を用意してなかったのがプレイはできなかったのですが、妻のパンティに手を入れてみると、もう愛液ですっかり濡れていました。妻に問うと、M氏ご夫妻のプレイを見て濡れてきたというのです。

「お前も参加したかったのだろう？」

と聞くと、コックリうなずきました。
M氏のプレイを見せた私としては、妻の態度に安心し、いとおしくなつて何度も愛してやりました。

次の日、M氏に報告しましたら、奥さまも私たちを気に入ったそうです。そして、次のプレイを約束してくださいました。

一週間後、待合せの駅でM氏とおちあい、あるマンションへ連れていかれました。そのマンションの一室で、お茶を飲みながらM氏のお話を聞いたのですが、その部屋はSMマニアの仲間が集つてプレイを楽しむために借りてあるのだそうです。そして、プレイの様子を記録したアルバムを見せてくれたのです。

そのアルバムには、ラビアのリング責め、アヌス責め、野外での逆さ吊りなどの写真があり、その貴重な記録に私たちはあつけにとられてしまいました。私たちは羞恥責めしかできない段階なので、仲間に参加するのは無理かどうか質問したら、

「SMはメンタルなセックスだから、貴方たちの気持を無視した、無理なプ



レイはしませんから安心して参加してください」

との事でした。体に傷をつけたりしないソフトな責めが主で、初心者のカップルもいるとの話でしたので、妻も安心して、さっそくM氏をまじえてSMプレイを実行したのでした。

その後、M氏ご夫妻と私たちは何度もプレイをし、今では安心してM氏に

妻を調教してもらい、私は私でM氏の奥さまを存分に責められるようになり四人の絆は深まりました。今では、お仲間の集まりや撮影会、記録写真の見せあいなどが楽しくて、例会の日が待ちどおしい今日この頃です。

「探美会」入会案内書を希望する方は60円切手3枚を同封してください。

禁断の美肉

雲海寺 竜



姉への横恋慕

シャワーの音がとまった。ドアの開く音がして姉が出てきた。からだにバスタオルを巻きつけただけのかっこうだ。姉はそのまま鏡台の前へ座った。まだ、俺がいるのに気づいていない。

だが、鏡の中を見たたん、姉は驚ろいて俺をふり返った。

「冷二ちゃん……いつの間に来てたの。姉さん、ちっとも気がつかなかったわ」

「姉さん、俺……」

俺はベビーベッドの赤ん坊を抱きあげて、飛び出しナイフの刃をかざして見せた。ピカピカに輝きあげたナイフだ。

「ああ、あぶないわッ、ナイフを、ナイフをどけなさいッ」

「姉さん、これは冗談じゃないんだ。俺の気持ちはわかってるだろ」

姉の顔が、驚ろきにひきつった。その顔が妙に色っぽく見えるのは湯上がりのせいだろうか。

姉の名は愛、結婚して二年の若妻だ。子供のころから、この美しい姉が好きだった。姉

以外に女なんて考えられなかった。美しいからだを俺だけのものにしたい、そう思い続けてきた。なのに姉は、この俺以外の男と結婚してしまった。とうとう我慢しきれなくなつて、俺は姉を襲うことにしたのだ。

「姉さん、さわいでも無駄だぜ。どうしても俺のものになつてもらうよ」

「冷二ちゃん……バ、バカなまねはやめなさい。私とあなたは姉弟なのよ。そんなことが出来るわけないでしょう」

「これも、姉さんがあんな男といっしょになるからいけないんだ」

そう言うなり、俺は姉のからだからバスタオルをはぎとった。

ひいっ……小さな悲鳴をあげて、姉はからだをかくすようにその場にうずくまった。

「自分が何をしているか、わかっているの。落ちつくのよ、冷二ちゃん」

愛は弟の冷二がこんなまねをする事が信じられない。少し不良っぽいところはあるが、自分にはいい弟なのだ。それに、まだ高校生である。

「せっかくのからだをかくすなんて、もったいないぜ。立って俺に見せてくれよ」

俺はニヤッと笑って見せた。血が昂ぶり、

顔がひきつっているのが自分でもわかった。俺はナイフの刃を赤ん坊の頬に、そっと這わせた。俺には甥にあたる赤ん坊だが、義兄の子かと思うと憎しみすらわく。

単なる冗談ではなく、俺が本気だという事がわかったらしく、姉は驚ろきと恐怖に顔をこわばらせた。

「や、やめてッ、赤ちゃんに何もしないでッ」
ひきつった声で叫んだ姉は、我を忘れて立ちあがった。

俺は思わずゴクリとのを鳴らした。ムッチリと女ざかりの、あまりにも色っぽく、美しい姉の全裸だった。予想していたよりも、はるかに脂がのって、ムチムチと白い肉づきである。よだれが出るとは、こういう女体を言うのだろう。とくに腰から太腿へかけての肉づきは、人妻らしい熟しうで、俺は眼を吸い寄せられずにはいられなかった。

「いいからだをしてるね、姉さん。そそれるぜ……フッフ、××××まで剥き出して見てやるよ」

「いや……」

姉はあわてて両手で前をおおった。愛は冷二の姉から、ひとりの女に変わっていた。

成熟した女体は、両手でかくしきれもの

ではない。むせかえるような女の匂いが、ムンムンとたちこめるようである。

毎晩、義兄に抱かれて眠るにちがいない。どんな風に抱かれて濡らし、身悶えて泣くのか……想像するだけでも怒りがこみあげてくる。

俺はゆっくりと姉のうしろへまわった。姉の双臀を探索する為である。

「尻の方も申し分ないや、フッフ、姉さんはたまらね尻をしてるぜ」

見事なまでに悩ましい姉の双臀だった。ムッチリと張りきり、想像以上の美しさで、まるで食べられるのを待っているかの様に熟しきっている。

「いやッ、冷二。やめて、こんなバカなことはやめるのよッ」

愛は手で臀丘の割れ目をかくして、下唇をかみしめながら俺をにらんだ。にらんではみても、成熟した女体はふるえている。

「姉さん、よっん這いになれよ。うしろから犯ってやるからよう」

このからだからあいつの匂いを消してやる……俺はそう自分の心に言いきかせていた。この俺の精を徹底してぶち込むことで、姉のからだから義兄の面影を消し去ってやるのだ。

「こ、こんなこと、いけないわ。冷二ちゃんやめて、やめてちょうだい」

「てまをとらせんなよ、姉さん」

「バシッ、バシッ……」

俺は思いきり姉の頬を張り飛ばした。姉は悲鳴をあげてのけぞると、床の上に崩れ落ちた。

愛の顔が恐怖にひきつる。眼の前にいるのは弟の冷二ではなく、もはや獣と化した男の冷二なのだ。だが、愛の瞳はすぐに、冷二の腕の中の赤ん坊に向いた。赤ん坊が、驚ろいたのか激しく泣き出したのだ。

「ああ、赤ちゃんを……冷二ちゃん、赤ちゃんを……」

「よっん這いになる方が先だぜ、姉さん」

俺はナイフの先で、赤ん坊の足の裏を軽くつついて見せた。赤ん坊の泣き声が一層激しくなる。

「や、やめてッ」

愛は夢中でよっん這いになった。

俺は足で姉の膝を大きくひらかせた。

「このまま動くなよ、姉さん。少しでも手足をずらしたら赤ん坊を、本当に切り裂くぜ」

俺は念を押してから、赤ん坊を姉の乳房の下に横たえた。床の上にはナイフを突き刺す。

姉はあわてて赤ん坊を抱こうとしたが、

「手を動かすんじゃないわッ」

俺のどなり声に、上体を低くして乳房を赤ん坊にあてがった。たちまち赤ん坊の泣き声がやみ、赤ん坊は乳房に吸いつく。

よっん這いのまま上体を低くして乳房をあてがっている為、双腎はどうしてもうしろへ高く突き出す姿勢になってしまう。俺はその双腎の前へかがみこんだ。うしろからのぞきこむ。

「こんな……いや、いやあッ」

姉は悲鳴をあげて赤ん坊を抱きあげると、逃げようとした。

「バシッ、バシッ……バシッ……」

俺は続けざまに姉の頬をはりとばした。暴力の効果はてきめんだった。急速に姉のからだから力が抜けた。あとはもう、すすり泣きながらよっん這いの姿勢をとるだけだった。

「姉さんがどんな構造をしているか、じっくりと見せてもらうぜ」

俺は思わず生唾を飲みこんだ。女の肉の合わせ目がはっきりと見える。姉の肛門までがあらわだった。

「ああ、こんなこと、いけないわ……見ないで、見てはいや……」

愛の声はもう、泣いている。痛いまでに弟の視線を感じるのだろうか、激しく顔をふって哀願する。

「い、いけないわッ、わたし達は姉弟なのよ……ああ、見てはだめッ」

「フッフ、姉弟でも男と女には変わりがないぜ、姉さん。イカスぜ、まったくいい××××してやがる」

俺は乳首に吸いついている赤ん坊にナイフをつきつけてから、柔肉の合わせ目にそって指をすべりこませた。

「あ、ああッ、いやッ」

「動くなよ、今度はナイフがモノを言うぜ、フッフ……毎晩、あいつにさわらせてるのかい、姉さん。いい感じだぜ」

指をすべり込ませながら、肉の合わせ目を押しひらく。まだサーモンピンクの肉壁が剥き出た。俺はのぞきこみながら、ヌルヌルとした肉の感触を味わい楽しんだ。

木の芽をさぐりあててやると、姉はひどく狼狽して

「ひっ、いや、いやあッ……だめ、さわらないでッ」

と、おおげさなまでに悲鳴をあげた。

「姉さん、弟にさわられるのもいいもんだろ」

あぶちすと激白

へへへ、あいつの事なんか忘れさせてやるからよう」

「だ、だめッ……冷二、いけないわッ」

愛はひきつった悲鳴をあげた。思った通りかなり敏感である。木の芽を刺激してやっている内に、ヌラヌラとした感触が更にしつとりとうるおってきた。姉の悲鳴もどこか弱々しく、すすり泣きに消えそうだ。しかし、俺が赤ん坊にナイフを突きつけている以上、姉は逃げることは出来ないのだ。

悲鳴と狂気

俺はズボンを脱いで固くなったのをひっぱ

り出した。天を突かんばかりにそそりたち、姉を犯す背徳の快感に、脈さえうっていた。

「どうだい、姉さん。あいつのより立派だろ。こいつで犯してやるぜ」

俺は自慢気に姉に見せつけた。

泣き濡れた瞳で俺を見た瞬間、姉は悲鳴をあげて顔をそむけた。無理もない、そのグロテスクな形は亭主の比ではない。

「姉さんにぶち入れてやる為、二年もかかって少しずつ真珠を埋めこんできたんだぜ、フフ、こいつで俺から離れられないからだにしておるよ、姉さん」

真珠を埋めこんだ肉は、自分で見てもいやになる程のグロテスクな形である。だが、そ

のおかげで黒人並みのたくましさだった。俺は姉の腰をかかえこんで、背中の上へお

「ひいッ、いけない、そんなこと、いけないわッ……いや、いやあッ」

姉は悲鳴をあげて顔をふった。血の結ながつた弟に犯される恐ろしさに、生きた心地がしない風情である。

俺の先が姉の肉の合わせ目に触れた。グイと更に押しつける。

「いや、いやあッ」

「じっとしてろよ、姉さん。あいつなんか比べものにならない太いのをに入れてやるんだからよ」

Wウェイでプレイを

わが愛奴は27才。かなりの美人でMっ気も充分。そして彼女は絶頂状態に達するとオシッコを洩らす特長があります。

彼女のオシッコと一緒に飲みながら責めるような真剣な方と3Pプレイをするのが夢です。

彼女とのプレイ歴は3年。彼女が24才の時から私が手塩にかけて調教してきました。

従順な性格の彼女は、どんな責めにもよく耐え、頑張りました。

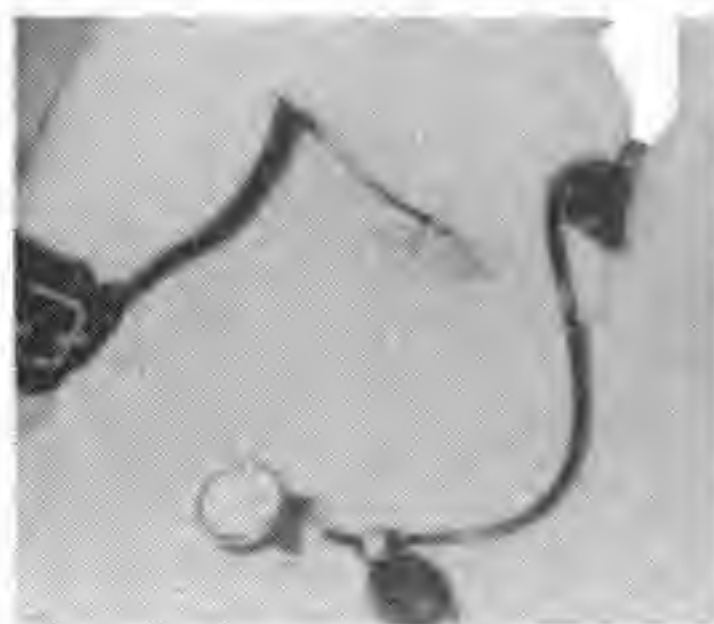
いまでは縄を見ただけでも濡れてくるほどです。口唇愛戯も並みのトルコ嬢よりずっと上手です。

V感覚は最上級で、一晚のプレ

イで10回以上昇りつめることもザラです。

特に私が自慢できるのはアヌスの拡張度です。何の苦もなく私をバックから呑みこみ、こっちの方の感度もまたすばらしいのです。

だから私は、彼女とダブルウェイSEXを楽しめるSの相棒がほしいのです。(アンドレ)



姉が激しく腰をひねって俺をそらせようと

するので、なかなか穴がさがしあてられない。

だが、俺はあせらなかつた。むしろ、俺は楽

しみながら這わせて穴をさがした。俺の先端
に感じるヌラヌラとした感触が心地よい。

やがて、俺はゆっくりと姉の中へ押し入っ
た。

「いや、冷二……いや、ひ、ひいッ」

悲痛な声をあげて、愛は顔をのけぞらせた。

「姉さん……」

俺も思わず叫んでいた。ジワジワと沈めて

いくに従って、とろけるような姉の肉が、俺

を熱く、包み込んでくる。それだけで俺は、

思わずもらしそうになって、あわててふんば

った。俺は出来るだけ深く入れた。

「姉さん、とうとう結ながつたぜ。太い俺の

がわかるだろう」

そう言っても、姉は顔をふりたてて泣いて

いるだけだった。俺は姉の黒髪をつかんで、

顔をのぞきこんだ。

「姉さん、この日の為にたっぷりと精液を溜

めておいたんだ。たっぷり注ぎこんでやるよ、

フッフ……姉さんを妊娠させるには、このか

つこうで犯るのが一番だからよ。孕ませてや
るぜ」

ひいッと姉は泣き声をあげた。

どうやら俺が妊娠させる氣でいるのに氣づ

いたのだ。

「いや、いやアッ、そんなこと……人間のす
ることじゃないわッ」

「姉さんをあいつと別れさせて、俺のものに
するには妊娠させるのが一番なんだよ、姉さ
ん」

「いやアッ、冷二、いや、いやようッ、ひ、

ひッ、ひいッ」

声をふるわせて泣くのもかまわず、俺はゆ

っくりと腰をゆすり始めた。始めはゆっくり

と、しだいに荒々しくこねくりまわすように

腰をゆする。妊娠の恐怖をおおるように、俺

は子宮まで突きあげてやった。

「いや、いやアッ、ああ……ひ、ひッ」

姉は子供のように泣きじゃくった。この美

しい姉が、姉ではなくて愛という一人の女に

変わるのには時間の問題だ。俺には自信がある。

その為にトルコがよいをしてきたえあげ、真

珠まで埋めこんだのだ。

「姉さん……孕んでもらうぜ、それ孕め、孕

むんだ」

俺は姉の腰に手をやって、自分の好むまま
に動かし、容赦なく体奥を突いた。腰をゆす

りながら、俺は子供のころの事を頭に思い浮

べていた。女子大生だった愛の入浴を、こっ

そりのぞいた事、姉の下着を洗濯物から宝物

のように持ち出した事、夜中に寝ている姉の
乳房にそっと触れてみた事、それらが走馬燈
のように頭の中を駆けめぐる。

だが同時に、今俺が押し入っている姉の穴

に、義兄のあいつが押し入っていたかと思う

と、無性に腹が立つ。俺は怒りをぶちまける

かの様に、容赦なく責めたてた。

いつの間にか、姉の肉が体の奥で俺の動き

に応え始めていた。

「こ、こんなことって……ああ……」

狼狽した姉の泣き声が、悲しい女の性を物

語っている。姉のからだは、敏感なまでに反

応を見せ始めた。俺は喜こんだ。だが、俺は

容赦しなかつた。荒々しく突きあげ、埋めこ

まれた真珠で肉壁をこすりあげてやる。

「姉さん、あいつよりずっといいだろ……ほ

れ、もっと腰を使いなよ、気分出さなきゃだ

めじゃねえか」

「あ、ああ……い、いや……あうッ」
湯上がり肌は熱く火照り、もう、汗が噴
き出て、ヌラヌラと油でもぬったように光っ
ている。熱い息とすすり泣きが入り混じり、

愛の身悶えが一段とあらわになってきた。

「フッフ、もうそろそろなんだろう、姉さん。

いつも、なんと行って教えるんだい」

「あ、ああ……」

姉は激しく顔をふるだけで、こたえようとはしない。まあいいだろう、もう限界に近く、必死に自分の肉体とたたかっているのがわかる。

「遠慮なくいいんだぜ、姉さん。俺も姉さんが孕むようにたっぷりと浴びせてやるからよ」

「いやッ、それだけは、だめ、だめよッ」

姉はのけぞりながら、狼狽して声をふるわせた。

「だめよッ、冷二……それだけは、かんにんしてえ……」

愛は、いやおうなしに追いあげられていく自分を知った。もう、とめることはできない。

俺は猛烈に腰をゆすって、姉をこねくりまわし、突きあげた。

「あ、ああ……だめッ」

顔を真赤にしてうわごとのように口走る姉の肉は、ドロドロにとけ出し、おびただしい愛液と肉襞のからみつきを見せてくる。

俺のがんばりもそこまでだった。俺はもう

我慢出来ずに、思いきって最後のひと突きを与えた。押えにおさえていたものが、一気にほとばしり、俺は多量に姉の中へ浴びせた。

その瞬間、姉は大きくからだをそり返して

ガクガクと腰をゆすったかと思うと、

「ああッ……あ、あ、ひッ、ひッ」

絶叫を噴きあげて、二度、三度と肉襞を痙攣させながら、この俺に収縮を伝えてきたのだった。

何も知らぬ赤ん坊だけが、まだ愛の乳房に吸いついていた。

収縮する肉

すやすやと眠りについた赤ん坊を、姉から取りあげてベビーベッドに横たえようと、俺は姉をベッドの上へ追いたてた。ダブルベッドである。いつも義兄に抱かれていたベッドの上で、もう一度、姉を犯す為である。

「ああ、こんなことになって……ひどい、ひどいわ」

姉はそう言ってすすり泣く。犯された女が見せる、悲しげで弱々しい泣き声だ。

俺は姉をベッドの上で、あお向けに横にすると、膝を立てさせて大きく開いた。だが、

姉は両手で顔をおおってすすり泣くだけで、さからおうとはしない。弟の俺に犯されたことが、かなりショックとみえる。

俺は勝ち誇ったようにのぞきこんだ。あと始末を許していないので、姉の柔肉はおびただしい愛液と、俺の濁液でしどろに濡れそぼっている。まだヒクヒクと収縮を見せているのが生々しい限りだ。

「へへへ、これで姉さんと俺は、男と女の関係になったわけだ。これからはもう、姉さんは俺のモノだぜ」

「ああ、言わないで……こんな、こんな恐ろしいことって……」

姉の泣き声が高くなる。

俺は姉の柔肉を指でつまむと、左右へくつろげて、更に奥を剥き出しにした。ティッシュ・ペーパーでゆっくりと清めてやる。

「あ、ああん……や、やめてッ」

「じっとしてるんだ。きれいにしてやるからよ、フッフ……それにしても、いい×××××してるぜ、姉さん」

俺は丹念にぬぐった。木の芽、尿道口と、ひとつひとつ味わうように清めていく。今まで俺が押し入っていた所に指を挿入してやると、姉は「ううッ」と呻いて顔をのけぞらせ

た。

「ああ、かんにんして……もう、いや……」

「何言ってるんだよ、姉さん。今までのはいさつがわりで、本番はこれからさ。姉さんが俺から離れられないからだに作りかえるんだぜ」

俺は、元気をとりもどした肉を見せつけて言った。姉の顔が、おびえて哀しみをあらわにした。

「ああ、冷二ちゃん、やめて……も、もう、こんなあさましいまねはやめて……姉さんをこんな目にあわせるなんて……」

「姉さんのせいだぜ。弟をおいてあんな奴と結婚なんかするからさ」

「そんな……私はあの人を愛しているのよ。そ、それに、あなたとは姉弟なのよ。わかってちょうだい」

「わからねえな。とにかく、このムッチリした姉さんのからだは俺のモノだ。もう誰れにもわたさねえぜ」

姉の唇がワナワナとふるえた。

弟は狂っている……愛はそう思った。ギラギラと眼を血走らせ、獣のような顔にはいつもの弟の面影はない。

「姉さん、足を俺の肩の上に乗せろ。こつて

りとかわいがってやるからよう」

俺は冷たく命じた。自分でも信じられないくらい、姉に冷酷に対応できる。可愛いさあまって憎さが百倍……俺は姉をめちやくちやにふみにじってやりたい衝動にかられた。そうすることだけが、姉のからだから亭主の想いを追い出す道であるような気がしてきたのだ。

「早いとこ両足をあげるんだよ、姉さん」

「いやッ……そんなこと、いやよッ」

姉がこぼむや、俺はいきなり姉の頬をはりとばした。

「ひいッ、やめて、乱暴はやめてッ」

姉は悲鳴をあげてのけぞった。泣く泣く足をあげると、俺の肩の上に乗せた。ふくらはぎのあたりを、それぞれ俺の肩でかつぎあげられているかっこうである。

俺はそのまま、姉の太腿を乳房へ押しつけるようにして、一気に押し入れた。出来るだけ深く入れてから、両手で乳房をわしづかみにした。

「う、ううッ……いや……」

押し入ってくる俺に、姉はシーツを握りしめて顔をのけぞらせた。だが、もう観念したのか、泣くだけで逃げようとはしない。

「気分出すんだぜ、姉さん。二回目なんだからよ」

俺は最初から荒々しく姉を責めた。姉の腰の骨がきしむと思うまでに突きあげ、こねくりまわす。

「ひ、ひッ……た、たすけて……ひいッ、ひいッ」

たすけて……そう言って姉は泣いた。ペツドがギシギシなり、姉はシーツをかきむしった。

「こんなこと……あんまりだわ、ひどい……やめて、やめてッ」

「どうした、姉さん。自分から腰を使えというのがわからねえのか。気分出すんだよ」

姉はあくまでも受け身で、自分から積極的に入るまおうとはしない。犯される身で協力しろというのが無理な話である。だが、それでは俺が不満だった。いら立ちもした。

俺はいったん腰の動きをとめた。

「姉さんの方が俺をリードしろというのが、わからねえのかよ。これだけのからだをしてりや、リードできるはずだぜ」

「い、いやッ、冷二ちゃん、やめて、も、もう、やめてッ」

「そうかい、姉さんがその気なら、もう、遠

慮はしねえ。いやでも
ヒイヒイ泣かせてやる
ぜ、姉さん」

俺は結ながつたまま
姉を抱き起こすと、膝
の上へ抱きあげた。腰
に手をあてて、好き勝
手に姉のからだをゆさ
ぶった。

「あ、ああッ……やめ
て、ひ、ひいッ」

たちまち火のような
悲鳴が噴きあがる。俺
の膝の上でのけぞり、
はねあがるたびにかえ
って深々と俺に貫かれ
る。

俺は姉の気分の出し
方がたりないと、のの
しりながら責め続けた。
「姉さん、それでも人
妻かい。毎晩、あいつ
に抱かれてたんだろ。
ほれ、もっとうまく腰
を使わねえか」



「ひ、ひどいわ……あ
ああお、ひ、ひいッ、
もう、いやあッ」

「いやでも気分出させ
てやるぜ、姉さん」

俺は姉の腰をあやつ
りながら、ゆっくりと
横になった。あお向け
になった俺の上に、姉
をまたがらせたのだ。
そうやっててもあそん
でから、再びからだを
起こして、姉を倒すと
両足を肩にかつきあげ
姉を二つ折りの姿勢に
する。

次々と変わる体位に
姉は狂ったように泣き
悶えた。相手が夫であ
ったとしても、こうも
様々な体位を強いられ
ることはない。それで
なくとも、義兄はおと
なしい方である。

やがて、姉のからだ

に変化があらわれ始めた。

「あ、あああ……あう、ああん……」

姉の泣き声が、どこか艶めいている。最初に犯した時には見られない変化だ。知らず知らずの内に、姉の双臀がうねり出している。理性も、恐怖と悲しさも、そしておぞましさも崩れ去る兆候である。

「へへへ、姉さん、やっと気分が出てきたようだな。それ、それ……」

「言わないで……あ、ああ、あおおッ」

そう叫ぶと、まるで堰を切ったように、声もあらわに泣き始めた。明らかに歎き声である。

そのすすり泣く歎き声に応じるかのように俺が荒々しく突きあげる肉襞は、淫らな音色をかなでる。俺を熱く包みこむ肉も、ドロドロにとろけきり、からみついてきた。

（ああ、これが姉さんなんだ……）

俺はからだの一点に全身の神経を集中して姉の感触を味わった。天にも昇るような快感である。

俺は果てたいのを必死に耐えた。姉を一匹の牝と化し、肉という肉をすべて俺のものにする為には、もっと姉をもてあそぶ必要がある。

「姉さん、遠慮なく泣いていいんだぜ。もつといい気持ちにしてやるからよ」

俺は肩にかつぎ上げた姉の両脚を、ゆっくりと左へまわした。姉のからだは、俺の前で横向きに変わった。今度は姉の足首をつかんで右側へまわす。姉のからだは反対側へひっくりかえった。そのたびに、深々と貫いた俺の肉が、姉の中で変化する。真珠を埋めこんであるので、姉はたまらないはずだ。

「あわわ……ひ、ひッ、ひいッ……そ、そんな……きいッ」

「へへへ、あいつじやこんなマネは出来ねえだろ、姉さん」

「あ、ああッ、あ、あッ……ひいッ」

姉のからだを左へ右へとまわすたびに、姉の歎き声が途切れ、途切れるたびに歎きが高くなった。

俺は次々と大胆な体位の変化を、姉に強いた。姉はもう、悲鳴に近い声をあげて、泣き悶える。こんなにまで激しく女を責めたことはない。それでも俺は、まだ何かもの足りない気がした。

俺は横向きで結ながっている姉の腰を抱きあげると、膝で立った。ムッチリとした双臀が俺の腹ではずみ、背後位の体位になる。

そのまま姉の腰をかかえこんで、俺は鏡台の前へ座った。

「ひいッ、いや、いやあッ」

俺の意図を知って、姉は激しく顔をふった。鏡台のイスに腰をおろした俺の上に、愛は鏡の方を向いてまたがっているのだ。その為、羞かしい自分の姿を正面に見ることになる。

「姉さん、鏡を見るんだ。どんな風に俺と結ながっているか、はつきり見えるぜ。フッフあんなに生々しくおっぴろげてよう」

姉は必死に顔をそむけ、両手でおおっている。たとえ愛する夫との行為でも、あさましい姿を見る勇氣はない。

「見るんだ。見ないといつまでもこのままだぜ、姉さん。その内、あいつが帰ってくることになる」

「そ、そんな……」

姉は狼狽して、両眼をあげた。俺に犯されている姿を亭主に見られる方が、もっと恐ろしいようだ。

「ああ、羞かしいわ……あんまりだわ」

「へへへ、俺が姉さんの中へ入ってるのが、はつきり見えるだろ」

俺はわざと腰をゆすって見せた。グロテス

クな俺の肉が、姉の中でしりぞき、前進するの
のわかる。

「い、いや……あ、ああんッ」

「いやじゃねえよ。よく見るんだ」

俺を抜き取りたいという気持がそうさせる
のだろうか、キュッと俺をしめつけてくる。
ブルッと胴ぶるいがきて、俺は思わずうめい
た。

両手で乳房を握りしめてもみこんでやると
母乳がしたたった。

「姉さんがどんな風に登りつめるか、鏡で見
ながら楽しもうじゃねえか。いくぜ、姉さん。
もう妊娠する気になっただろ」

「や、やめて……だめッ……」

俺は鏡の中の姉の姿を見つめながら、ゆっ
くりと腰を動かし始めた。姉の腰から乳房に
手を這わせて、からだをあやつりながら、し
だいに動きを早くしていく。

姉は金切り声をあげて、狂ったように腰を
ゆすりながら、両手で自分の黒髪をかきむし
った。俺はもう、残酷なまでに姉を荒々しく
あつかった。その荒々しさに、玉のような汗
が飛び散り、ムンムンとした熱気に鏡がくも
る程だった。

「ゆるして……あ、あうッ、ひいッ……」

そう叫びながらも、その声はめくるめく官
能の歓喜に満ちているようだ。実際、愛のか
らだは、今自分を犯している相手が弟である
ことも忘れかけていた。もはや押しとどめる
ことの出来ない歓声があがる。

「姉さん、たいした喜びようじゃないか。
これでわかっただろ、フッフ、俺のモノにな
るな」

「そ、そんなこと……」

ズキンズキンとこみあげてくる官能のうず
きに、もう、はつきりと拒めない愛である。

「俺の女になるな、姉さん」

俺は鏡の中の姉の顔をのぞきこんで、もう
一度きいた。返事を求めるように容赦なく、
姉をもてあそんだ。

「あ、あああ……あう、ううッ」

「はつきり言うんだよ、姉さん。もう、俺か
らは逃げられやしねえんだからな」

「ああうッ……冷二、冷二ちゃんの……女に
なるわ……」

姉はうわ言のように言った。自分でも何を
言っているのかわからない風情である。言い
終ると愛は、ひととき生々しい声をあげて、
身悶え始めた。ドロドロにとろけた肉が、収
縮を見せて俺をしめつけてくる。その柔肉の

うごめきが、姉の屈服を示していた。

俺は有頂点になった。だが、本当に姉を屈
服させ、俺の匂いを姉の肉のひとつひとつに
しみこませるのはこれからである。これはま
だ、ほんの始まりにすぎないのだ。

「それじゃ、これが終わったら次は、尻の穴で
俺の相手をするな。わかるだろ、俺は姉さん
の尻の穴まで俺のものにしたいんだよ」

俺は姉を激しく追いたてながら言った。今
俺が貫いている穴だけでなく、姉の唇やまだ
誰れも押し入ったことのない肛門も、すべて
俺の精をぶち込んでやるつもりだ。

「あああ……もう……ひッ、ひいッ……」

姉の身悶えが一段とあらわになり、二度目
の絶頂に近いことを示している。

「いいな、尻の穴に俺を受け入れるんだぜ、
姉さん」

姉はガクガクとうなずいた。

鏡の中に見た姉の姿は、もう、しとやかさ
も優雅さもなくなりすてて、俺の膝の上での
たうつ牝の女肉であった。

読者サロン

SM情報ルーム

このサロンは、読者の皆様からプレイの情報を寄せていただくページです。創刊号に限っては、編集部のご知恵の原稿を寄せ集めました。次回からは皆様の情報を、どしどしお寄せ下さい!!

最近のSMイベントってどんなかな?

SM演劇は、この数年の間に随分と盛んになってきた。質的にも向上してきた。陳腐なピンクショーまがいのものは少なくなり、真面目にSMに取り組んだものが増えてきている。

現在、SM演劇を観せるグループとして、代表的なものを4つ紹介しよう。

まずは、老舗の「シアター・スキヤンダル」から。御存知、玉井啓友氏の主宰する劇団である。

玉井氏は、エンターテインメントに徹する演出家だ。だから、ここのSM劇は、肩の凝らぬ芝居として楽しめるように構成されている。むしろハードな責めはあるが、そのハードさは適度な娯楽性に裏打ちされているものだ。

「スキヤンダル」の強みは、まず同劇団の規模の大きさ。それから、百花繚乱、金城エイコなどのスターを抱えている点だ。特に、都立高校生からSM女優に転身した新人・高杉かほりは人気が高く、大きな観客動員力になっている。

ただ、この「スキヤンダル」にとって、SMは性表現の手段にしかすぎない。目的ではない。したがって、どんなにハードに責めても大味になってしまう。本格派マニアには、ちよっぴり喰い足りないだろう。

なお、「スキヤンダル」では演劇の他に緊縛撮影会を毎月一回開催している。会場は、六本木の同劇団事務所。料金は入会金プラス会費一万円だ。(スキヤンダル—東京港区六本木7の18の8 岸田ビル 301 TEL 03-403-8271)

ついで紹介するのは、「オサダゼミナール」。このグループは、単なる演劇集団ではない。もっと広範に、マニア同士が各種の楽しみを共有するような、言わばSM同好会的なものだ。その同好会の活動の一環としてSM演劇の公開があるわけだ。

そんな「オサダゼミナール」には、スター女優はいない。売り物になっているのは、主宰者・長田英吉氏の見事な早縄術と、責められ役に本物のM女性がいるということだ。

お酒とともSMを!!

一杯飲みながらSMを楽しめるという店は、意外と少い。たしか、都内には4軒ぐらいしかないと思う。今月は、そのうちの2軒を見てみよう。

まずは、六本木の「SAMM」。会員制クラブだけあって、ゴージャスな造りの店だ。店内には、木馬や碟台や檻が置かれていて、中世ヨーロッパの拷問室っていう感じ。時には、ここでSMショーの実演も観られる。なにより嬉しいのは、オーナーの賀山さん自身がマニアであること。客の心理がよくわかるから、サービスが行き届いている。(TEL 03 587 2366)

もう一軒は、大塚の「マイ・ウェイ」。ここは、もとSM喫茶だった店で、現在はSMバブとなっている。簡単なMプレイなら、Sのウェイトレス嬢と店内で行える。しかも、それだけのサービスがあって飲み物が一律3千円とは有難い限りだ。(TEL 03 5940 4625)

「オサダゼミナール」は、SM演劇は会員

外にも公開しているが、その他の活動は完全な会員制だ。会員になると、M女性をモデルにしての実演や8ミリ上映会に参加できたり、S女性M女性の紹介や長田氏の緊縛指導を受けたりすることができる。現在、会員数は200名。うち男性会員が90%、女性会員が10%。全会員の70%がSで、残りがMだそう。女性会員は、M傾向が中心だとのこと。会員になるには、入会金一万円が必要だが、運営費以外の仲介料・プレイ料は一切徴収しないと、会則にある。(オサダゼミナール——都内港区新橋6の20の8和光社 03 4434 2519)

三番めに紹介するのは、「日本悪魔クラブ」だ。

ここは、劇団事務所のマンションの一室でSM演劇を観せてくれる。当然、狭い。そこに50人ぐらいの観客が入ると、身動きもできなくなってくる。が、狭いが故の利点もある。なにしろ観客と数10センチしか離れていない場所で裸女が弄虐されているのだから、臨場感が凄いのだ。まさに、M役の女性の淫液が客席に飛び散ってくると

いう雰囲気。

この「悪魔クラブ」の母体は、実は名のある新劇グループ。だから、S役の演技が非常にうまい。構成もしっかりしている。ただ、惜しむらくは責めがパターン化しすぎている。蠟を垂らして鞭で打つという具合に、ありきたりなのだ。ハツと思わせるような斬新なアイデアがない。この辺が、マニア集団ではないがための哀しさだろう。なお、「悪魔クラブ」は、毎週土曜日の6時半に開演。場所は代田橋、料金は2500円。電話予約が必要だ。(日本悪魔クラブ——世田谷区大原2の22の15代田橋ハム501 03 325 7403)

最後にあげるのが「GSG企画」。このスタッフはみな若い。若いだけに研究熱心で、体当たりの演技を見せてくれる。また黒川真由美という女優が、実に美しい。この会の特長は、上演中に観客が写真を撮れるということ。撮影会も兼ねている訳だ。ただ、残念なことに近頃は公演会数が少くなっている。入場料1万円。会場は西荻南口。(GSG企画——杉並区西荻南2の19の10 03 333 3405)

いま話題のSMクラブ、その実体は?!

近頃、スポーツ新聞の3行広告に、「私とSMプレイしませんか」などという文面をよく見かける。が、この種の広告、どこまでアテになるかわからない。中には、プレイ後に恐いヤーサンが出てきて法外な金を取られた、などという話もある。

そこで記者は、一応この世界で信用があるとされているSMクラブを紹介してみることにした。ただし誌面に紹介したからといって、記者がそのクラブでのプレイを推薦しているわけではない。SMプレイは、あくまでも自分の愛奴とするべきもの、というのが記者の持論。SMを職業としている人とプレイしても興味半減と、本当は進言したいところなのだ。とは言っても、現実は、ままたらぬもの。「俺には、愛奴などいない。妻もSMに無理解だ。そんな俺がプレイできる場所となれば、SMクラブしかないじゃないか」と言われれば、なるほどその通りですと答えざるを得ない。

無駄口が長くなった。急いで、4軒のSMクラブをまわってみよう。

最初は、11PMなどに出演してSMクラブ・ブームの火付け役となった「ブルーシャトー」と「SMの館」から御紹介。この2つのクラブは、ともにABS企画が経営している姉妹店だ。プレイ内容も所属女性も同一。「ブルーシャトー」がABS企画の赤坂店、「SMの館」が六本木店というわけだ。

このABS企画のママの経歴が面白い。もと東映のボルノ女優なのだ。で、引退後に一念発起してSMの世界に飛び込んだとのこと。と書くと、いかにも営業目的で皮相的にSMに関わっている女性のようなだが、さにあらず。彼女は、かつて或るサディストのパトロンに調教されていたことがあり、SMプレイというものを熟知している。だからこそ、彼女の許から何人ものプレイ女性が育ってきたのだろう。あとに紹介する「ナイト赤坂」のママも、実はここのママの教え子なのである。

というわけで、このABS企画では、新人のプレイ女性は、ママ自らが密着調教す

危険なSMプレイとは

マニア誌などの体験記を読んでいると、人体に害を与えるプレイをしている方がいる。小生は、同じマニアとして、また一医学生として、声を大にして言いたい。危険なSMプレイはやめよう!! と……。

まず、妊婦責めは絶対に避けてほしい。母体にとっても胎児にとっても悪影響を及ぼす。空想の世界にとどめておいてほしいプレイだ。

アルコール浣腸も、危険なプレイだ。アルコールは肛門から注入しても、当然吸収されるが、問題はそのスピードだ。口から飲んだ時とは比較にならぬ速さで吸収される。したがって、酒に強いからと言ってそのペースで浣腸すると、急性アルコール中毒になってしまう。どうしてもやりたい人は、ビールなど度数の低いアルコール飲料を、さらに希釈して、なおかつ少量を時間をかけて浣腸するように。――病気になるってはSMプレイもできない。慎重に慎重に……。 (一記)

お酒とともにSMを!!

一杯飲みながらSMを楽しめるという店は、意外と少い。たしか、都内には4軒ぐらいしかないと思う。今月は、そのうちの2軒を見てみよう。

まずは、六本木の「SAMM」。会員制クラブだけあって、ゴージャスな造りの店だ。店内には、木馬や礫台や檻が置かれていて、中世ヨーロッパの拷問室っていう感じ。時には、ここでSMショーの実演も観られる。なにより嬉しいのは、オーナーの賀山さん自身がマニアであること。客の心理がよくわかるから、サービスが行き届いている。(TEL 03 587 2366)

もう一軒は、大塚の「マイ・ウェイ」。ここは、もとSM喫茶だった店で、現在はSMパブとなっている。簡単なMプレイなら、Sのウェイトレス嬢と店内で行える。しかも、それだけのサービスがあるって飲み物が一律3千円とは有難い限りだ。(TEL 03 5940 4625)

「オサダゼミナール」は、SM演劇は会員外にも公開しているが、その他の活動は完全な会員制だ。会員になると、M女性をモデルにしたの実演や8ミリ上映会に参加できたり、S女性M女性の紹介や長田氏の緊縛指導を受けたりすることができる。現在、会員数は200名。うち男性会員が90%、女性会員が10%。全会員の70%がSで、残りがMだそう。女性会員は、M傾向が中心だとのこと。会員になるには、入会金一万円が必要だが、運営費以外の仲介料・プレイ料は一切徴収しないと、会則にある。(オサダゼミナール——都内港区新橋6の20の8和光社 03 434 2519)

三番めに紹介するのは、「日本悪魔クラブ」だ。

ここは、劇団事務所のマンションの一室でSM演劇を観せてくれる。当然、狭い。そこに50人ぐらいの観客が入ると、身動きもできなくなってくる。が、狭いが故の利点もある。なにしろ観客と数10センチしか離れていない場所で裸女が弄虐されているのだから、臨場感が凄いのだ。まさに、M役の女性の淫液が客席に飛び散ってくると

いう雰囲気。

この「悪魔クラブ」の母体は、実は名のある新劇グループ。だから、S役の演技が非常にうまい。構成もしっかりしている。ただ、惜しむらくは責めがパターン化しすぎている。蠟を垂らして鞭で打つという具合に、ありきたりなのだ。ハッと思わせるような斬新なアイデアがない。この辺が、マニア集団ではないがための哀しさだろう。なお、「悪魔クラブ」は、毎週土曜日の6時半に開演。場所は代田橋、料金は2500円。電話予約が必要だ。(日本悪魔クラブ——世田谷区大原2の22の15代田橋ハイム501 03 325 7403)

最後にあげるのが「GSG企画」。このスタッフはみな若い。若いだけに研究熱心で、体当たりの演技を見せてくれる。また黒川真由美という女優が、実に美しい。

この会の特長は、上演中に観客が写真を撮れるということ。撮影会も兼ねている訳だ。ただ、残念なことに近頃は公演会数が少くなっている。入場料1万円。会場は西荻南口。(GSG企画——杉並区西荻南2の19の10 03 333 3405)

いま話題のSMクラブ、その実体は?!

近頃、スポーツ新聞の3行広告に、「私とSMプレイしませんか」などという文面をよく見かける。が、この種の広告、どこまでアテになるかわからない。中には、プレイ後に恐いヤーサンが出てきて法外な金を取られた、などという話もある。

そこで記者は、一応この世界で信用があるとされているSMクラブを紹介してみることにした。ただし誌面に紹介したからといって、記者がそのクラブでのプレイを推薦しているわけではない。SMプレイは、あくまでも自分の愛奴とするべきもの、というのが記者の持論。SMを職業としている人とプレイしても興味半減と、本当は進言したいところなのだ。とは言っても、現実には、ままならぬもの。「俺には、愛奴などいない。妻もSMに無理解だ。そんな俺がプレイできる場所となれば、SMクラブしかないじゃないか」と言われれば、なるほどその通りですと答えざるを得ない。

無駄口が長くなった。急いで、4軒のSMクラブをまわってみよう。

最初は、11PMなどに出演してSMクラブ・ブームの火付け役となった「ブルーシャトー」と「SMの館」から御紹介。この2つのクラブは、ともにABS企画が経営している姉妹店だ。プレイ内容も所属女性も同一。「ブルーシャトー」がABS企画の赤坂店、「SMの館」が六本木店というわけだ。

このABS企画のママの経歴が面白い。もと東映のポルノ女優なのだ。で、引退後に一念発起してSMの世界に飛び込んだとのこと。と書くと、いかにも営業目的で皮相的にSMに関わっている女性のような感じが、さにあらず。彼女は、かつて或るサディストのパトロンに調教されていたことがあり、SMプレイというものを熟知している。だからこそ、彼女の許から何人ものプレイ女性が育ってきたのだろう。あとに紹介する「ナイト赤坂」のママも、実はここのママの教え子なのである。

というわけで、このABS企画では、新人のプレイ女性は、ママ自らが密着調教す

危険なSMプレイとは

マニア誌などの体験記を読んでいると、人体に害を与えるプレイをしている方がいる。小生は、同じマニアとして、また一医学生として、声を大にして言いたい。危険なSMプレイはやめよう!! と……。

まず、妊婦責めは絶対に避けてほしい。母体にとっても胎児にとっても悪影響を及ぼす。空想の世界にとどめておいてほしいプレイだ。

アルコール浣腸も、危険なプレイだ。アルコールは肛門から注入しても、当然吸収されるが、問題はそのスピードだ。口から飲んだ時とは比較にならぬ速さで吸収される。したがって、酒に強いからと言ってそのペースで浣腸すると、急性アルコール中毒になってしまう。どうしてもやりたい人は、ビールなど度数の低いアルコール飲料を、さらに希釈して、なおかつ少量を時間をかけて浣腸するように。――病気になるってはSMプレイもできない。慎重に慎重に……。 (一記)

る。だから、17人はいるという女のコたちは皆、プレイの仕方を心得ている。ちよつときつく縛っただけで、「痛いわよ、このヘンタイッ!!」などと怒鳴る不心得者はいないのだ。(記者は、某SMクラブでそういう不良M女とプレイして、大枚5万円を払わされたことがある。読者諸氏よ、お氣をつけあそばせ)

さて、このABS企画では、プレイ内容を初級・中級・上級に分けている。それぞれ、値段と時間と内容が異なる。

Sのお客様の場合だと、初級コースが、縛り・奉仕・首輪・羽毛責め・バイブ。プレイ時間が1時間半、お値段は4万円也。中級は、初級のプレイ内容に、A責め・浣腸200CC/500CC・鞭またはロー責めがプラスされる。2時間、6万円だ。上級は、浣腸の量が1000CC/2000CCに増え、クリップ責め・放尿または吊るし責めが加えられる。3時間、8万円也だ。もちろん、各コースに定められたプレイ内容は、何を選んでも自由。ただし、選択したコースにないプレイはできないし、当然SEXに類する行為は厳禁。

Mの客の場合は、このコース別に準じたプレイ内容で、値段が少し安い。初級が3万円、中級が4万円、上級が5万円だ。

ただ、このABS企画、独自のプレイルームを持たないので、右の値段にホテル代が加算される。ホテルは、たいていの場合、六本木のSMホテル「アルファ・イン」が使われるようだ。

さて、この二店の連絡先は、次の通り。

「ブルーシャトー」03/5833/2600

0 受付時間は昼12時/夜11時。

「SMの館」03/5866/2451 受付時間は昼1時/夜10時。

次に紹介するのは、「ルーム夢」だ。こ

こは、クラブの中にプレイルームが準備されている。ただし、一室だけなので、常に1人の客しかプレイできないことになる。

したがって、前日までにプレイ時間を電話予約するよう決められている。それに、入会時には面接があつて、SEXを望む人は入会できない。この厳格さは、安心できる。

プレイルームの設備は、檯台、木馬、縛り用滑車、檻、手枷、足枷。もちろん、バイブ、縄、鞭、浣腸器なども準備してある。

が、同クラブは現在のところM女性がおらず、女王様ばかり。したがって、これら責め具は、貴男に向けて使われることになる。

「ルーム夢」の場所は新宿の厚生年金ホール近く。料金は、プレイルーム使用料を含めて、客がMの場合は2万2千円。(6時以前は2千円安)ただし、これは1時間半の料金、延長時間は30分単位で加算される。——同クラブの連絡先は、03/3544/4573。昼1時から夜12時まで受付。

最後に紹介するのは、「ナイト赤坂」。

ここのシステムは、おおむねABS企画と大差ない。ただ、初級・中級・上級コースとも、こちらの方が1万円ずつ安い。

もちろん、このクラブもSEXは厳禁。

プレイ前に、その旨の誓約書を書かされる。

この「ナイト赤坂」の特色は、雰囲気

がとても若々しいことだ。ママさんからして、なんと23歳。ヤングな感じが好感が持てるが、その反面、キャッキヤと騒がしすぎてSMムードに欠ける。もっとも、そういう

感じが好みの人もいるだろうが……同クラブの電話受付は、午後1時から11時まで。

03/5833/4526です。(N記)

標的は牝犬

連載第一回

火夏 圭介

一

気味の悪い、ゾツとするような眼だった。血管が浮き出て、瞳は死んだ魚のように濁っている。明らかに幻覚症状を呈し、覚醒剤が何かをうっている眼だ。

その狂ったような眼が、公園の木影からじっと一人の女を見つめている。子供を公園に遊ばせに来ている人妻は何人もいたが、その内の一人だけを見つめている。女はいかにも若妻らしく幸福に満ちた笑顔で、三才くらいの女の子を芝生の上で遊ばせている。女は美しかった。いや、美しすぎた。男なら、まず見とれずにはいられない。

スカートにつつまれた腰のあたりが、成熟した肉づきを思わせる。ムッチリと張った双臀は、スカートを裂か

んばかりだ。その双臀のあたりを、狂った眼がなめるように這った。今にも飛び出して、襲いかからんばかりの眼だ。

「ちくしょう。たまらねえ尻をしてやがる……夏子か、いい女だぜ。それにしてもあの美しさと色気……ゆきすぎだぜ」

狂った眼の男は、うなるようにつぶやいた。口はだらしなく開き、唾液がたれている。

女は名を夏子と言った。結婚して三年、三才になる由加という娘がいる女ざかりだ。夏子は本能的に異様な視線を感じるのか、時々あたりを見まわすが、まだ狂った眼の存在には気づいていない。

狂ったような眼は、かれこれ一時間近くもただじっと夏子を見つめている。何かを待っているようでもあり、夏子のからだを見つめて楽しんでいるようでもあった。



他の子供に混じってはしゃいでいる由加をにこやかに見つめていた夏子が、突然歩き出した。まっすぐ公園の隅にある公衆トイレへ向っている。

狂ったような眼が、淫らな輝やきを増してキラリと光った。その時を待っていたかのように、木影の中を公衆トイレへ向って動き出した。

夏子は公衆トイレへ入った。だが、どの戸も鍵がこわれている。夏子はとまどった様子だったが、我慢できないのであろう、あたりに人気がないのを確かめると、思いきって中へ入った。

木影から狂ったような眼が姿をあらわした。まだ若い男だ。どう見ても二十才前である。しのび寄るように夏子の入ったトイレの戸の前へ近づく。戸と床の間が十センチ位あいている。そのすき間へ男は顔をくっつけて、中をのぞき始めた。

夏子の足首からふくらはぎが見える。ガサガサと音がして、スカートがまくりあげられる気配がした。すぐにずり下げられたパンティが入ってきた。薄いブルーのパンティである。それがからまったまま膝がまがり、真白な双臀が沈んできた。

男のどがゴクリと鳴った。ムッチリと白く、剥き玉子のような豊艶さだ。男を挑発せずにはおかぬ肉づきである。

だが、夏子は横向きの姿勢でしゃがんでいる為、肝心の所は足がじゃまでよくは見えなかった。男はけんめいにかがんでのぞこうとするが駄目だった。その内、チョロツと清水がわき出たかと思うと、やがて清流がほとばしり始めた。

男はあせった。清流は眼に入るのだが、それがほとばしる源が見えないのだ。

強引に戸がこじあけられた。

「あ、ああッ、何をするんですッ」

たちまち夏子の唇に悲鳴がほとばしった。秘められた行為の最中に見知らぬ男が押し入ってきたのだから、驚ろくのも当り前だ。驚ろきは恐怖と羞恥に変わった。

「何を、何をするんですッ。来ないで、来ないで下さいッ」

「さわぐなよ、奥さん。おしっこの途中なんだから、続くなよ」

男はトイレの戸を閉めると、夏子に抱きついた。

「ああッ、やめて、やめてッ……誰れか、たすけてッ」

「さわぐなつてのがわからねえのか。いいことをしてやろうって言うんじゃないやねえかよ、奥さん」

「い、いやあッ、誰れか、誰れか……ああ、あッ、いやあッ」

夏子は夢中で抵抗した。だが狭いトイレの中である。

その上、一度ほとぼしった尿意は簡単に途中でとめる事は出来ない。夏子は思いきった動きをとることが出来なかった。それをいい事に、男は夏子の手を強引に背中へねじりあげた。

夏子は夢中で腰を左右へよじった。男の手が裸の双臀にすべりおりてきたのだ。

「いい尻してるじゃんか、奥さん。こたえられねえ感触だぜ」

「いや、いやあッ……たすけてッ」

ゆるゆると双臀を撫でまわされるおぞましさに、夏子は思わず腰をゆすって逃げようとする。そのたびに、ほとぼしる清流が左右へ飛び散った。

「あ、あッ……いやあッ」

夏子は激しくかぶりをふった。男の手で撫でまわされる臀丘が硬直する。その臀丘を、男は強引に割りひらきにかかったのだ。

「いやあッ、そ、そんなことはやめて、やめてッ……あ

ああ、誰れか……」

「あばれるんじゃねえよ、奥さん。おしっこがとび散ってるぜ」

男の指先が、臀丘の谷間へもぐりこむ。うしろからの侵入には、こばむすべはなかった。

夏子は狼狽した。からだ中がカアッと灼けつくような

羞恥だった。臀丘の谷間に深くわけ入った男の指は、夏子が思いもよらぬ所をとらえていた。

「ひいッ、いやあッ……そ、そんなところをさわらないでッ」

「そんなにいやがられると、余計にさわりたくなるぜ、フフフ……奥さんの尻の穴、いい感じだぜ」

男の指先が、ゆっくりと夏子のアヌスをもみこみ始める。

「この感触だと、奥さんの尻の穴は亭主にもさわらせた事がないようだな。この俺がじっくりとしこんでやるぜ」

「あ、あッ、いやあッ……誰れか、誰れか……ああッ、やめてッ」

男に言われるまでもなく、そんなおぞましい箇所は愛する夫にさえ、ふれさせた事はない。からだ中の神経がもみこまれる排泄器官に集中した。キュッ、キュッとすぼめて必死に男の指をこばもうとする。

「いい感じだろ。奥さんのようにいい尻をした女は、尻の穴をかわいがってやらなくちゃよう」

「ああッ、いや、いやあッ、手をとってッ……手をはなしてッ」

「手をはなせだと、冗談言うなよ、奥さん。それどころか指をねじ込んでやるぜ、へへへ、わかるだろ、奥さんの尻の穴に俺の指を根元まで入れてやると言ってるんだぜ」

ひいッ……と夏子は悲鳴をあげた。狂ったように腰をふりたてて抵抗し始めた。だが、男の指先は夏子のアヌスにジワジワと押しつけてきた。指先でぬうように貫いてくる。

夏子はたまらずのけぞった。のけぞりながら唇が開く。「あ、あッ、いやあッ……さ、さわらないで、ひ、ひいッ……」

夏子は真赤に灼けた。灼けたからだをのけぞらせ、泣き出す。

「うれし泣きかい、奥さん。この味を知ったら病みつきになるぜ。とくに奥さんのようないい尻した女はよう、フッフ……ほうれ、指はすっぽりもぐり込んじまった」「いやあ……」

悲鳴をふりまいてもがく夏子の腰を押えつけて、男は埋めこんだ指で中をまさぐった。

「誰れか……いや、いやあッ」

男はおぞましい排泄器管だけを狙っているのだ。

（こ、このひとは狂ってる……狂った変態なんだわ）

男の狂ったような眼を見て、気の遠くなるような恐怖がふくれあがった。

「誰れか……たすけて、たすけてッ」

夏子は必死に腰をふり、手足をバタつかせて抵抗した。そのはずみでトイレの戸が開いた。

夏子のけたたましい悲鳴に、公衆トイレの前には人だかりが出来ていた。恐る恐るトイレの中をのぞくのだが平日で男性がいない事もあって、たすけようとする者はいない。それでなくとも、夏子を襲っている男は狂人をおわせる形相だ。

誰れかが連絡したのだろう。パトカーのサイレンが聞えてきた。その時である。黒いスーツに身をつつみ、サングラスをかけた男が二人、突然トイレの中へかけこむと、男を夏子から引き離れた。二人とも二メートル近くプロレスラーみたいな大男だ。たちまち男を両わきを取ってかかえると、停めてあった車で立ち去ってしまった。一瞬の出来事だった。いずれにしろ、夏子は危く難を逃れたのだ。

二

結局、犯人の男はわからないまま、通り魔事件としてかたづけられた。黒いスーツの男達は何者なのか、いかなる理由で男を連れ去ったのか、疑惑は何ひとつ解き明かされなかった。男に犯されなかった事が、夏子にとっては不幸中の幸いである。警察での事情聴取を終えて、夏子が娘の由加と共に家へ帰ったのは、七時過ぎだった。いそいで由加に食事を与え、寝かしつけると、夏子は

シャワーをあびた。犯されなかったとはいえ、男にまきぐられた肌を清めておきたかった。くやし涙が流れた。愛する夫にしか見せた事のない肌を、いや、夫にさえ触れさせた事のない箇所を、どこの誰れとも知れない変質者に触られた事がくやしい。おぞましい指の感触を洗い流すように、夏子は何度も清めた。

バスタオルをからだに巻いて、鏡台へ向おうとした夏子は、いきなり手首をつかまれて悲鳴をあげた。

「ひいッ……な、なんです、あなた達はッ」

男が二人、物影にかくれていた。公園で夏子を襲った男を連れ去った黒いスーツの二人だ。夜だというのにまだ、サングラスをかけている。

「あなた達は誰れなの、人の家に勝手に上がりこむなんて……帰って、帰ってください」

夏子は夢中で叫んだ。よく見ると顔に傷跡があり、いかにも暴力団風の男達だ。二メートル近い大男だけに、ドスがきいてすごみがある。その二人が何故ここに……。すごい力だった。夏子の両手はたちまち背中へねじりあげられてしまう。そのまま強引に応接間の方へ引きずられた。

「何を、何をするんですッ、やめて、やめないと人を呼ぶわよッ」

引きずられながら、夏子は叫んだ。だが、いくら叫ん

でも、夫は十一時過ぎでないと帰ってこない。それにとりの家は新築で、まだ入居者がいないのだ。まるでその事を知っているように、男達はせせら笑っている。

「やめてえッ……こ、こんなまねをして、タダですむと思っっているのッ」

「強がっても無駄だぜ、奥さん。いやでも、うちの英次坊っちゃんのおもちゃになってもらうからな」

「フッフ、英次坊っちゃんに眼をつけられたのが不運と思っ、あきらめるんだな。こつてりとかわいがってもらいな、奥さん」

二人は夏子を引きずりながら言った。年のころは四十前後だろうか、女のあつかい方になれている様子で、落ちついてる。

「バ、バカなこと言わないでッ……そ、そんな人、知らないわッ」

「知らねえわけねえぜ、奥さん。まあ、すぐにわかるってことよ」

英次とは誰れなのか……しかも、男達は坊っちゃんと言った。夏子には、英次という名の知人はいない。

だが、その疑惑は応接間へ引きずりこまれた時、解き明かされた。

「ひいッ……」

夏子の唇に悲鳴がほとばしった。

英次とは、公園の公衆トイレで夏子を襲った男だったのだ。その英次が、ゾツとするような狂った眼で、夏子をむかえたのである。

「英次坊っちゃん。奥さんを連れてきましたぜ。ここならゆっくり楽しめるはずですよ」

「もう公園で襲うなんて無鉄砲なまねはやめて下さいよ。英次坊っちゃんに何かあったら、組長にどやされるのはあつしからですからねえ」

二人は英次に言いかけせるように言った。二人は会田と堂島と言って暴力団組長の一人息子である英次のおも

り役なのだ。

うなずいた英次の眼が、キラリと光った。ゆっくりと夏子に近づいていく。

「ああ……来ないで、こっちへ来ないでッ」

夏子がひきつった悲鳴をあげた。公衆トイレでのおぞましい出来事がよみがえってきたのだ。

「この俺から逃げられるとでも思ってたのかよ、奥さんふざけんなよ」

「あッ、あ……」

夏子の悲鳴がとぎれた。



英次はいきなり、夏子の頬を一発、二発と手の平で張りとばしたのだ。夏子が公衆トイレの中で抵抗したことに腹を立てている様子だった。

「ああ、ぶたないでッ……乱暴はやめてッ」

「女ってのは男のおもちやになつてりゃいいんだよ。それをいやがりやがって……たっぷりヤキを入れてやるぜ」

バシッ、バシッ……英次はもう一度、夏子の頬をはたい

た。

どう見ても英次は普通ではない。女を物か肉としか見ず、自分の言いなりになると思っっているのだ。それを夏子が抵抗したと怒っているのだから、狂っているとした言いようがない。それだからこそ、会田と堂島というおもり役がついているのであろう。

「奥さんは牝でしかないって事を、よく教えてやるぜ。二度とこの俺に逆らわねえようによ」

英次は狂った眼でニヤニヤと笑いながら、一束の縄を取り出した。何人の女の涙と汗を吸ったのだろうか、黒光りして、よく使いこんである縄だった。

夏子の顔色から血の気が去った。

「な、なにをしようというの」

夏子はこみあげるおびえを押し殺して、英次をにらんだ。あとずさりしたくとも、会田と堂島に両手を背中へねじりあげられては、逃げる事もかなわない。

「フッフ、この縄で奥さんを縛りあげてやるぜ。尻の穴にいたずらしても、逃げられねえようによ」

「変態ッ……縛らなきゃ、何も出来ないの！」

夏子は精一杯強がってみせた。だが、その声はふるえている。この英次は、縛りあげておぞましい排泄器官をいたぶる気である。気の遠くなるような恐怖がこみあげてきた。

会田と堂島によってねじりあげられている手首に、ざらざらとした縄が巻きついてきた。

「いや、いやよッ、縛られるなんていやッ」

冷たい縄が巻きつくおぞましさに、夏子の声がうわずった。

力まかせの縄目だった。手首だけでなく、腕、乳房の上下と、縄は容赦なくくい込んできた。

「あ、あッ……いやッ、痛いッ、痛いッ」

夏子は背中をまるくして喘いだ。縛られる屈辱感が、縄目の苦痛と共に夏子を襲う。

「フッフ、思った通り縄がよく似合うぜ、奥さん。こうなりや、バスタオルがじゃまだな、フッフ、女はスッ裸にしてくちやよ」

「いや、いやよッ、さわらないでッ……」

バスタオルの端が引っぱられた。縄目から引きずり出すように引くのだ。

「ひいッ……いや、いやあッ」

バスタオルがはぎ取られた瞬間、夏子は顔をのけぞらせて悲鳴をあげた。

英次の顔がだらしくずれた。だが、その眼だけはギラギラと光り、狂気と淫らな輝やきを一層色濃くただよわせる。

ムッチリと女ざかりの、あまりにも美しい夏子の裸身

だった。シミひとつない白い肌は、人妻らしい熟しようで、形のいい乳房の張りや腰から太腿へかけての曲線は英次の狂った眼を吸い寄せずにはおかない。

むせかえるような女の色香が発散し、その色香に酔ったように英次はしばし見とれた。

「いやッ、見ないで、見てはいやッ」

夏子は激しくかぶりをふった。いくらもがいても、会田と堂島に押えられていては、肌をかくす術もない。たえず悪寒が背筋を走るのであろう。ブルブルとふるえている。膝もガクガクとふるえ、白い肌に強烈な黒を見せている。艶やかな女の茂みまでもが、フルフルとふるえている。

「どうしました。英次坊っちゃん」

堂島が言った。いつもなら、がむしやりに女にむしやぶりついていく英次が、今は夏子に見とれているのだ。英次の命令で、数多くの女をかどわしてきた堂島と会田にとって、英次のこんな反応を見るのは始めてなのだ。よほど夏子が気に入ったに違いない。

「どうだ、いい女だろ……まったくいいからだをしてやる」

英次はうなるように言った。

「まったく……さすがに英次坊っちゃんが狙っただけの事はありませんぜ、へへへ、今までの女の中で最高の上

玉ですぜ」

「英次坊っちゃんが奥さんを欲しくなるのも無理ありませんや、フッフ、この美しさと色気、ゆきすぎですぜ。これじゃ男を挑発するようなもんだ」

堂島と会田も、なめるように夏子の裸身を見つめながら言った。この二人、英次のおもい役をまかされているだけに、組長の信頼も厚く、暴力団の中でも有数のつわ者である。その二人でさえ、ズボンの前が固くならざるを得ない程の、夏子の色香だった。

「フッフ、女に生まれた事を後悔させてやるぜ、奥さん」
英次の声がうわづっている。

眼の前の美しい女体を思う存分いたぶってやる。こんな女体を亭主に一人占させておくことは許せない。英次はそう思っていた。

「いい肉づきをしてやる。こういうからだは、この俺を楽しませる為にあるんだ、フッフ、奥さんは俺のおもちゃにならなきゃいけねんだ。それが奥さんのつとめだぜ」

女はすべて自分の欲望を満す為にいる……英次はそう信じているのだ。

「英次坊っちゃん、どこから始めますか」

堂島が、まだ夏子のからだに茫然となっている英次に向って言った。

「へへへ、きまつてるぜ。奥さんの尻からだぜ」
英次はうれしそうに笑った。

三

堂島と会田は、夏子をうしろ向きにして、双臀を英次の方へ向けた。

ムッチリと白く、剣き玉子のような夏子の双臀だった。人妻らしく豊熟がみなぎっている。英次は両手でゆっくりと撫でまわした。

「へへへ、この尻だぜ……たまらねえ、ムチムチしやがつて」

「いやッ、な、なにをするのッ」

公園の公衆トイレでおぞましい排泄器官をなぶられた強烈なショックがよみがえった。

「い、いやあッ、そ、そこはいや、いやよ、いやあッ」

臀丘を左右へ割り裂かれる自覚に、夏子は腰をよじつてあがらった。英次の手の平が、夏子の双臀をはたいた。

「奥さんはこの俺を楽しませる為にだけあるんだって事が、まだわからねえのか。おとなしく尻の穴を見せるんだよ」

「そ、そんな……」

臀丘の割れ目を引き裂かれるおぞましさに、夏子は激

しくかぶりをふった。

「公園での続きをたっぷりとしてやるぜ、フッフ」

英次はいっぱいに割りひらいてのぞきこんだ。可憐なアヌスだった。そこが排泄器官である事がウソのようなたたずまいである。必死にすぼめているのがわかる。

「かわいいぜ、奥さんの尻の穴……フッフ、そんなにすぼめても無駄だぜ。今にふつくらと開かせてやる。指を入れてやったんだから、わかってんだろ、奥さん」

「いやあッ……そんな所を見ないでッ、見てはいや、いやよッ」

あらためて英次が、おぞましい排泄器官に関心を持つ変質者であるという恐怖が、ふくれあがった。

突然、英次の顔が割り開かれた臀丘の谷間に沈んできた。ヌラヌラした舌先が、ペロリと夏子のアヌスをなめあげた。

夏子は、ひいッと息をのんだ。ヌラヌラしていて、それでザラザラと生温い不気味な感触に、夏子は総毛立った。

「やめてッ……そんな、そんなことって……いや、いやあッ」

夏子はたまらず泣き出した。おぞましい排泄器官をなめられる……想像さえした事のない行為だった。

英次は、もう一度舌をのばすと、ペロリとなめた。

夏子は顔をのけぞらせて、ひいッと泣いた。泣かずにはいられない感触なのだ。英次の舌は異様に熱く、英次の異常な性欲が集中しているようだった。

「へへへ、一度尻の穴をいじられる事を覚えると病みつきになるって、言ったはずだぜ、フッフ……指もいけど、なめられるのもいいもんだろ、奥さん」

うわ眼づかいに夏子の反応をうかがった英次は、再び舌先をのばした。

「ひいッ……いやあッ」

腰をふりたてて泣き叫ぶのをかまわず、英次はペロペロとなめまわした。なめまわすだけではない。唇で吸いつき、チュウチュウと音をたてて吸う。しっかりと夏子の腰をかかえこみ、吸いつき、なめつくすのだ。

その不気味な感触に、夏子は背筋に悪寒が走り、全身がふるえ出すのをどうしようもなかった。

「ひッ、ひいッ……そ、そんな、やめて、やめてえッ」

舌先をアヌスの中心にねじこむように押しつけられて夏子は大きくのけぞった。子供のような泣き声が噴きあがる。

ようやく英次が顔を離れた。

「フッフ、いい味してるぜ、奥さんの尻の穴はよう……亭主だって、こんな真似はしてくれねえだろ」

英次は、夏子の泣き顔を意地悪く見上げながら笑った。

会田と堂島の二人も、さかんに夏子の乳房をいじくりまわしている。指をくいこませるようにもみこんでは、乳首をつまんでころがしている。

「こ、こんなことするなんて……狂っているわッ、やめてッ」

「フッフ、そのいやなのが、今にたまらなくなってくるぜ、奥さん、フッフ……女ってのはいやがるのを無理にやってこそ、味が出るもんだぜ」

英次はうれしそうに言った。

「会田、浣腸の準備をしろよ。いいな、五百CC用のだぜ」

「英次坊っちゃん、いきなり五百CCですかい。そいつはちよつと……」

「いいから準備しろ。この奥さんには、まず浣腸からしこむんだ」

そう言うなり、英次はまた、夏子のアヌスに吸いついた。

カンチョウって？……まさか 腸でいたぶられるなどと夢にも思いつかない夏子だった。何をしようというのか……その疑惑も、おぞましい英次の舌に消しとんだ。

「ひいッ……やめて、もう、かんにんして……あ、あッそんな……」

双臀をプルプルとふるわせて、夏子は泣いた。いくら

腰をよじっても、英次の唇は吸いついたまま離れようとしない。菊の花びらを思わせる肉壁を、ひとつひとつなぞるようになめあげてくる。

「奥さん、あいつを見てみな。あれで奥さんは浣腸されるんだぜ。わかるだろ、尻の穴から薬を入れられるんだ」

夏子の乳房をいじりまわしている堂島が、夏子の顔を会田の方へ向けた。

会田は五百CC用のガラス製浣腸器を手にして、キュウツとグリセリン液を吸いあげていた。夏子の方を見てニヤツと笑う。

夏子の顔がひきつり、おびえをあらわにした。英次のやろうとしている事がわかったのだ。浣腸……夏子がこれまで見たこともない巨大な浣腸器だ。

「そ、そんな……パカなことはやめて、浣腸なんて、いや、絶対にいやよッ」

「フッフ、あきらめるんだな、奥さん。英次坊っちゃん、女に浣腸するのが何よりも好きときてる」

堂島は冷たく言った。

浣腸される恐怖に、夏子がアヌスをキュツと収縮させるのが、英次の舌先にもわかった。

「フッフ、必死にすぼめてやがる。そんなに浣腸がいやとなると、こいつは浣腸のしがいがあるぜ」

顔をあげて、英次はニヤツと笑った。異常に気持ち

昂ぶっている為か、英次の狂った眼が一層不気味さを増している。見つめられるだけで、ゾツとする眼だ。

「そんなことはしないでッ、いや、いやよッ、狂ってるわッ」

夏子は夢中で双臀をふりたてた。うしろからの侵入には無抵抗も同じである。それでも英次の舌で、アヌスの活約筋はほぐれ、今責められたらひとたまりもない。

「パ、パカなことはやめてッ、そんな事して何がおもしろいのッ」

「へへへ、女は浣腸で責めるものと決まってるんだぜ。とくに奥さんのようないい尻した女はよう、へへへ、それにどんな風にひり出すかも見てみたいしよう」

「……………」

夏子はあまりの言葉に絶句した。英次は浣腸するだけでなく、秘められた排泄行為を観察する気にいる。

「そんな……いやあッ、たすけて、誰れか……たすけてッ」

「あばれたって無駄だぜ、奥さん。これを手始めに、浣腸なしではいられないからだにしてやる」

英次はうわずった声で言った。会田からグリセリン液をいっぱいに吸いあげた浣腸器を受け取る。ズッシリと重い。



「さあ、浣腸してやるぜ、奥さん」

「いやあッ、浣腸なんて、いや、いや、いやあッ、たすけてッ」

会田が夏子の臀丘を割りひらいた。必死にこわばらせているのを、強引に割ってアヌスを剥き出した。夏子のアヌスは、英次の唾液で、しっとりとうるおっていた。そこを狙って、英次はゆっくりと嘴管を沈めた。

「ひいッ……いやあッ」

絹を裂くような悲鳴がほとばしった。

「立ったまま浣腸されるのもいいもんだぜ、フッフ、その内、いろんなポーズで浣腸してやるからよ」

「あ、あッ……いや、いやあッ」

英次がゆっくりとポンプを押し始めると、夏子は泣き叫んだ。

チュルッ、チュルルッ……と流れこんでくるグリセリン液の感触は、男の射精を思わせ、夏子はまるで犯されている錯覚に落ち入る。

「あ、ああッ、入れないでッ……入れてはいやッ」

「気持ちいいだろ、奥さん。遠慮なくよがっていいんだぜ、フッフ……いい顔をしてやがる。浣腸されて、そんな色っぽい顔をしやがるとは……奥さんには浣腸が合ってたんだな」

夏子の泣き顔と浣腸器を交互に見つめながら、英次は

ゆっくりとポンプを押していく。

夏子の泣き顔は、犯される女の風情である。英次はゾクゾクした。

「奥さん、こうやって浣腸してやってんだからよ。泣いてばかりいねえで、なんとか言ったらどうだよ、へへへほれ、ほれ、入っていくのがわかるだろ」

「ああッ、入れないでッ……け、けだもの、けだものッ」
夏子は泣きじゃくった。

犯されるのではなく、浣腸でもてあそばれる……夏子は自分がおもちゃにされている事を、いやでも思い知らされた。

流入をこぼもうとする夏子の気持ちにそうさせるのか夏子の臀丘がこわばっている。双臀をくねらせたり、片足をくの字に曲げたりして、なんとか流入をとめようとしている。だが、どんなことをしてもグリセリン液は、容赦なく流れ込んできた。

「あ、あッ……いや、も、もう、入れないでッ……かんにんしてッ」

「そんなに色っぽい顔をして、いやがっても駄目だぜ、奥さん」

ポンプを押している内に、もう、どうしようもないまでに欲情してきたのか、英次の顔がすごい形相を帯びてきた。とりつかれたように、グイグイとポンプを押す。

その顔は、まぎれもなく狂人のそれであった。

「ちくしょう、たまんねえぜ……五百CCじゃものたりねえ。会田、イルリガートル浣腸の準備をしておけ。今度はグリセリン原液で三千CCだ」

英次はひきつった声で叫んだ。

会田は困惑した顔で英次を見た。女を責め始めると、もう、みさかいのなくなる英次なのだ。何度でも浣腸をしようとする。

「英次坊っちゃん……いくらなんでも、最初からそいつはいけませんや」

「うるせえ、俺はもっと浣腸してえんだ。さっさと準備しろ」

「また女を駄目にしちまう気ですか。そいつばかりは組長に言われてますんで、英次坊っちゃんの言いつけでもきけませんぜ」

これまでに英次は何人も女を責め殺すか、廃人同様にしていた。そのたびに組長にどやしつけられるのは会田と堂島である。それだけに会田の声は、あとに引かないすごみがあった。

「ちえ、わかったよ……これで我慢すりゃ、いいんだろ」
英次はそう言うと、一気にポンプを押しきった。

(以下次号)

アナルスワップの ハイレクニツク

私たち夫婦は、ほかのご夫婦とのスワップを楽しんだり、独身の男性をまじえてのトリプルを満喫したりしています。でもそのほかに二人きりのちょっとした楽しみがあるのです。それはカメラ好きの夫が言い出して始まったのですが、二人の結合のポーズを撮影することなのです。

●前から後ろから●

SMプレイが終り、昂まった夫と交際相手のだんなさんのを私の中で鎮静させるのが、いつものパターンです。

まず夫が、だんなさんの見ている前で私のしかかり興奮を鎮めます。次はだんなさんです。

彼が私の中に進入してきますと夫が、「シッカリ啜えるんだよ。気持ちよく放出し

てもらえば、俺の顔が立つんだ」

私はこんな時、自分のオルガを犠牲にしても、お客さんにつくすことを優先させます。

いや、夫の顔をつぶさないようにと全神経を集中させるのです。

「イチ、ニイ、サン」

夫から教わった方法で締めつけました。私の悲痛な努力が功を奏したのか、お客さんは、「奥さん、そんなに締められたら……」

悲鳴を上げかけました。だが私は委細かま



ついに成功したアナル交悦撮影



わず、

「私で気持ちよく、イッて……お願いですから、私ね、一所懸命締めつけますから」

「イチ、ニイ、サン」

と、締めつけます。

「奥さん、駄目だ、そんなにやられたら……」
華々しく私の中で果ててもらおう、とても満足です。

私のアヌスを欲しがる交際相手もいました。
「奥さんのアヌスなら気持ちがいいでしょうね」

と、謎をかけるようないい方をするので、

り、アヌスで放出してもらうことに快楽を覚えていけるのです。

●結合ポーズの撮影●

「今夜は写真を撮るよ」

夕食のあと、夫がこう言いますと、見たいテレビがあっても諦めなくてはなりません。

「カメラの支度を頼むよ」

言われなくても、私もだいたい慣れてきました。三脚をたててカメラを据えつけ、ストロボをセットします。それに長い管のシャッターをつければ準備OKです。

「準備ができたわ」
夫は今夜、アナル・セックスを撮りたいとい

「おい／＼アヌスで放出させてあげなさい」

と、いうのです。

アヌスでの快感を覚えてしまった今では、

「男の人ってどうして、女のアヌスがそんなにいいのかしら」

なんてトボけてみせますが、本当は喜び勇

んで、四つん這いにな

「準備ができたわ」

夫は今夜、アナル・セックスを撮りたいとい

「だったら、一度イカしてからにしてエ」

アナル・セックスはいやではないのです。

好きなくらいですが、でもいきなりでは恥ずかしいので、一度、前のほうでオルガを味わ

わせてもらいたいです。ムードが高まったところで、後ろを愛してもらいたい……。

夫は私の願いを受け入れてくれて、まず入念な前戯。続いて前のほうで愛してくれました。

正常位で、夫の肌と私の肌がこすれ合っ

てひとつになり、私にオルガを与えてくれるのです。

目もくらむほどの陶酔のあと、しばらく休んで、いよいよアナル・セックスの撮影です。

「ワセリン塗るの？」

近ごろ夫はワセリンを塗るのをいやがるようになりまし

「ワセリン塗るの？」

「ワセリンなんかいら

夫は気持ちいいかも知れませんが、私のほうの痛みはかな

「それなら、私のを柔らかくして」

うなずいて夫は、私のアヌスを吸いに來ました。私は、夫の唇と舌でアヌスにタッチされるのが大好きです。特に舌の先をアヌスへぐつと押し込まれると、思わず唸ってしまいうくらいです。

「それ……好きよ」

つい口走ってしまいます。

「お前もだいぶアヌスのよさがわかってきたな」

夫はご機嫌です。あまり気持ちがいいので、指でいじって……

夫は指先に唾をつけ、アヌスに差し込んできます。

「気持ちいい」

夫は指を「く」の字に曲げて、アヌスの中のほうを刺激してきます。

「それも……いいわア」

快感に酔っていると、

「もういいだろう、だいぶ柔らかくなったから」

まず私のアヌスに入れてるところを、パツクから撮るのです。

「四つん這いになるの？」

「いつもの通りだ」

ベットの上で四つん這いになり、アヌスを露出しました。

●女の部分が全開で……●

ところが、私が覚悟して待っているのに、いつまで経っても入って来ません。

「どうしたの？」

四つん這いのまま振り返ってカメラのほうを見ますと、とたんにピカッとストロボが閃きました。これはテストです。

——あなた、早くアヌスに頂戴！

私のそんな顔を、レンズが映し取ったのでしよう。こういうとき、アヌスの菊の花が、とてもきれいに咲いているのだそうです。夫にそう言われると、とても嬉しいんです。

「恥ずかしい、でも、あなたの好きな写真が撮れてよかったわね」

夫の固いのが、私のお尻に当たってきます。たしかに激痛ですが、アヌスの感覚の期待に私はおののいています。

「唾を沢山つけてね」

夫が指を入れてきました。そのあと、またしても夫のものが……

「痛い、痛いわア」

四つん這いの膝と肘がガクガクしてきます。

逃げ腰になると、四つん這いが腹這いになってしまい、もう逃げられません。

夫はすっかりサドっ気を出してきて、私のアヌスに立ち向かってきます。

「あつ、痛い！」

いちばん太いところが入ってしまえば、痛みは半減します。その瞬間、ストロボが閃きました。夫がシャッターを押したのです。

SMモデル募集

あなたのおひまな時に、モデルのアルバイトをしませんか。一時間につき一万円お支払いします。応募の秘密は厳重に守りますので、写真同封のうえ手紙で連絡して下さい。
連絡先 東京都中央区銀座一の22の10、ストークビル501号 風俗資料保存会宛。

夫が体動して三十秒ぐらいすると、またストロボが閃光しました。

夫の好きな作品ができました。

へアーが邪魔になって、結合部がハッキリ写らないと面白くない、という理由で、私は撮影の前にへアーを全部剃って、きれいにしておくように夫に命じられているのです。

「おい、よく写っているな」

夫がニヤニヤしながら、写真を示します。
「アナル・セックスの場面がハッキリ撮れていますが、考えてみると、かなりエゲツない写真です。」

「ひどい写真ね」

「なにがひどいものか。こんないい写真はないよ」

私と夫との感覚の違いです。

アヌスで交っているところをアップでとらえたこの写真は、夫の自慢のタネです。私の秘丘は、きれいに剃毛されているので、女の部分が全開です。

「バッチリだろう、佐知江」

「こんなのが入るんだから、私が痛いはずだわ」

「だからぼくは、気持ちよくて仕方がないわけだ」

もうひとつのポーズは、私が夫を抱きながら、両脚を高く上げて、アヌスで受け入れているところ。さらに、いつも私が前で受け入れるときのポーズで、夫の足に外側から私が足がけする全開のポーズもあります。

写真を見ているうちに、私は面白いことに気づきました。

「あなたの袋の玉が写ってないわ」

「そうだ、もう少しで昇天するところだったんだよ」

へえー、そういうものなのかと、私はうなずくしかありませんでした。

●顔と菊を同時に写す●

「佐知江の顔が写っていないアナル・セックスの写真じゃ物足りないなあ」

夫はこんな注文を出してきました。

通常の交りの写真なら、私の顔が写っていても、だれでもすることですから、他人に見られてもいいけど、私の顔とお尻の穴をつらぬかれているのを同時に、しかも気分の出る顔を見られてしまったら、どんな変態女と思われるだろうと思うと、恐ろしくなってきました。

でも、私が拒むと、夫はどこかの女性とそんな写真を撮るかも知れないし、それは私には耐えられません。

「この写真は、だれにも見せないでね」

夫に約束させてから、撮影にかかりました。ところが、いざ撮影となると、夫はポーズに迷っています。私の顔と結合部を、一枚の写真の中に収めるのは難事です。

「このアングルだと、佐知江の顔は写るんだ

けど、足が邪魔で結合部が入らない」

私は人形みたいに、夫のするがままなのですが、夫が困り果てていますので、

「こんな体位だったら、どうかしら」

アドバイスしました。

「うーん、このポーズでならバッチリだ」

夫は興奮のあまり焦ってたんです。

私はベットのうえで右ひじをついて横になり、左の足を上にあげてアヌスを露出し、バックから夫を受け入れるのです。こうすると、私の顔も乳房も秘丘も、そして結合部も一枚の写真にハッキリ収めることができるのです。

夫はこういふとき、興奮しすぎて失敗が多いのです。私がしっかりして、ちゃんとアドバイスしないとダメなんです。

ピントは私の股間に文字の大きな本を置き、その文字に合わせます。

「フィルムは巻いてあるの？」

夫が私のアヌスに迫ってきます。怖くなるほどです。

「痛いッ！」

そのとき、夫がシャッターを押したのです。「どうしたの、ずいぶん早くシャッターをきったのね」

「佐知江の、激痛を一枚」

「まあ！」

また私のアヌスへ夫のものが出たり入ったり。撮影が続きます。

「佐知江、大成功だ！」

夫が子どものように狂喜しています。

夫は撮影が終わると、すぐに自分の手で現像と焼付けをして、成果をたしかめないと気が済まないのです。

「もう遅いから明日にしたら」

と私が言っても、暗室に入るので。そして私に手伝わせるのです。

「ほーら、佐知江、出てきたぞ。ぼくのが刺さっているところが」

なるほど、私が激痛に耐えているもの、目を細めてアヌスの快感に酔っているものなどの作品が完成したのです。

私は昼間、夫が出勤したあと、ひとりでこれらの写真を見えます。

——私って交っているとき、こんな顔しているのかしら……

恥ずかしくなってきました。

「佐知江、これなら絶対ヨーロッパもののポルノにも負けないよ」

夫の言葉を思い出して見つめています。

私が両手で女の部分をひろげ、アヌスに受

け入れています。飛び出した肉芽が、すごくハレンチな感じです。

「あなた、私のアヌス、いくら使ってもいいけど、ずっと愛してね。あなただけのアヌスなのよ」

そう呟きながら、写真の夫にキスする私なのです。

● 写真を見ながら交悦 ●

私の家にもボロライドカメラがありますが、SMフォートの撮影は、たいてい35ミリの一眼レフを使います。それもカラーではなく、いつもモノクロです。ボロライドはどうも迫力が乏しいようですし、カラーは現像や引伸ばしが家庭でできません。そこでモノクロになるわけです。

寝室の枕元には、こうして引き伸ばしたモノクロの、四つ切りサイズの写真が、いつも五、六枚置いてあります。

私たち夫婦の性行為のノーマルなパターンは、前戯を終えると松葉くずしの体位で交わりながら、これら四つ切りサイズの写真を見てムードを高めるのです。

ときにはトリプル・プレイで招いたほかの男性と交わる私の写真も出て来ます。

「どうだった、佐知江、この彼とのときは」
夫は意地悪く、こんなことを尋ねたりします。

「いやア、知ってるくせに。そんな恥ずかしいこと、私の口から言わせないで」

「どうだ、これとどっちがいい？」

燃えてきている夫は、私を激しく突き上げられます。写真はこういう私たちにとって、重要な愛の脇役なのです。

松葉くずしから、私の女上位に移ります。そして次に私は四つん這いになり、後ろから受け入れる体位です。こんなとき夫はときどき、

「入口を間違えた！」

なんて言って、アヌスを襲ってくるのです。いくつかの体位を楽しんだあとのフィニッシュは、どういうわけか私も夫も正常位を好み、夫は激しく果ててくれます。

私が後背位や正常位で何回かオルガに達したころ、夫の頂上が間近いとわかります。長年の夫婦生活では当然でしょう。そんなとき私は下から、

「もう……なのね」

と聞きます。

「うん」

夫が答えると、私はお尻を浮かして全力を体奥に集中させ、締め上げます。

「私の中で気持ちよくイッてね。全部カラにしてしまっただけ」

私は必ずそう言うのです。全部吸い込んでしまっただけ、浮気ができないようにしたいのです。

「よく締まるねえ……佐知江、しっかり頼むよ、気持ちよくイクから」

「残してはダメよ、きつとよ」

私は命がけで括約筋で締めつけます。

夫はクライマックスを迎えるとき、交わっているところが見えないので、私の頭のところに、例のアナル・セックスの写真を置き、それを見ながら終局に突き進みます。私も夫が満足するように、

「私のアヌスを、あなたがたがらぬいているのよ。私、気持ちいいのよ。ああ、たまらないわよ」

と言っただけです。すると夫は耐えきれなくなっただけ、

「うおーッ、佐知江！そんなこと言ったら我慢できんぞ」

凄叫びと共に果てるのです。

アナル・セックスの写真が、こんなにも役

立ってくれると、つい私も嬉しくなってしまう、撮影を求められると、引き受けてしまうのです。

●向日性の私の性●

私は明るいところでプレイするのが好きですが、スワップ交際をするようになってから、ほかの奥さんの多くが薄暗いところで交わるのが好きと知り、びっくりしました。私が明るいところで浴衣の裾を開いて、下半身をあらわにしているのに、先方の奥さんは、電気を消さなければいやだと言いつづけているのです。

私はその奥さんに「淫らな女」と思われるのがいやで、肢を閉じてしまいました。ご主人が怒って奥さんに、「お前が開かないから、佐知江さんも閉じてしまったじゃないか」

ご主人に叱られて、奥さんもようやく開いたので、私もふたたび開いて露出しました。これに似たことは、よくありました。

どうも交際をいろいろ経験してみますと、男性は明るい照明の下での交わりを好むようです。女性はその反対に、暗いところが好き

というのがふつうのようです。その点、私たち夫婦は、明るいところばかりでプレイしてきましたから、撮影となっても抵抗がありません。

夫が自慢するだけあって、私たちの写真はたしかに優秀な作品ばかりです。交際してる奥さんのアナル・セックス写真も見せてもらいましたし、海外のボルノ・フォトも見ましたが、私たちのそれに及ばないと思います。私たちの作品が優れているということは、言い換えれば、それがハレンチきわまりない写真だということです。それは私たち夫婦にとって、かけがえのない財産でもあるのです。私たちの写真が優秀であるという理由は、

三つあると思います。

第一は、モデルの私も夫も、またときに参加する青年も、素人のみんなが懸命になって、アナル・セックスの快楽を求めている。つまり演技ではないということです。

第二は、写真の全部が全部と断言していいほど、レンズが私のアヌスのつらぬかれています。露骨なシーンをがっちり捕えているものばかりだからです。ほかの奥さんの写真は、体位こそ凝っているものの、結合のシーンは写されていないのです。

第三は、私の顔が画面に入っていることです。前にも述べたように、アヌスの結合部分と私の顔が、ひとつの画面に入るように撮影するのはむずかしいことです。でも夫が頑張る。私も激痛に耐えて、優秀作品の製作に努力したのです。

夫はそういう作品を見ながら、

「佐知江の快感と苦痛の表情が、そのときそのときによって違うだろう。これが優秀だという理由だよ」

と満足そうに言いました。

「あなたがそんなに喜んでくれるなら、もっとアヌスの写真を撮ってもいいのよ」

私はすっかり感激して、夫の膝の上に顔を伏せました。

●SEXに立向う●

アナル・セックスの撮影は、たしかにむずかしいものです。私も夫も、何度も試みては、そのたびにむずかしさを痛感させられます。

初めのうちは、フィルム一本で、夫の納得のいくのが二枚か三枚あれば成功のうちでした。そのうち、結合シーンだけを撮るのなら、五割ぐらいの確率で成功するようになりました。

でも夫は次第にエスカレートして、より高度な作品を求めるようになったので、成功率は十枚にやっと二、三枚というところでした。夫の要求がシビアになってきますと、私が激痛に苦悶する表情やら、快感に陶酔するものやら、いろいろ注文がうるさく、なかなか優秀作品は生まれません。

私も夫が喜ぶようにと、ことさら快感の表情を装うのですが、夫にいつべんで見破られ落着いてね。撮影している夫を、こう言って励ますのがったときは、夫の厳しい姿勢に驚かされたのも私の仕事でもあったのです。こんなに私が協力したからこそ、夫が失敗してガックリして

そういう経験を重ねるにつれて、夫が何を求めているかわかってきます。私はカメラなんか意識せずに、夫とアナル・セックスの快感をむさぼり、目いっぱい満足すればいいのぼくとお前のアナル・セックスを撮影してもだど悟りました。そうになると、カメラのことらおうか」

「あなた、気持ちいい。カメラなんか今度だけでそれを作るのが、本当の夫婦の愛情だして……今日は私のアヌスをもっと気持ちよと思った私は、

とせがんで、アナル・セックスに挑んで行も、二人で優秀な作品を作りましょうよ。そのためには私は、毎晩でもいいのよ」

と夫を力づけたのでした。

終わってみると、そういうときに限って、優秀作品ができています。

がカメラのレンズを忘れ、アヌスの快感を得ることに、精神を集中させられるようになってからです。

最近、夫の考えていることが理解できるようになった私は、夫と二人で作品を評価しているときに、

「あなた、これ優秀作品よ。結合しているとこもハッキリ撮れているし、私だって気持ちよくなっているところだわ」

と言うと、夫は私の意見を一蹴して「ダメだ」と反対するのです。

「どうしてなの？」

「ぼくの力がない。射精までにまだ時間があるんだ」

思いがけない指摘でした。

「そうだったの。むずかしいものね」

と答えたものの内心では、

——そこまでうるさく言ったら、キリがないだろうに。

と思ったものでした。でも夫の気持ちを察して、

「あなた、今晚は我慢して、溜めておいて。

明日、もう一度写しましょうよ」

私の気持ちに通じたのか、夫も機嫌を直してくれるのです。

●ムード作りは妻の役割●

夫婦の寝室のムードづくりは、妻の役目です。私たちの家には「菊の間」と呼ばれる部屋があります。旅館の部屋みたいな名前ですがおおよそかけ離れたイメージです。

そこには、夫の好きなアナル・セックスの写真を額に入れ、夫が私と交わるとき見やすい位置を考えて配置し、部屋の中をアナル・セックスのムード一本に絞ってあります。私の趣味には今のところ合いませんが、夫の好みに合わせないわけにはいきません。

夜、夫とむつまじく合おうときなはいんですが、昼間、掃除したりしているときに、四つ切りサイズの写真が目に入るのは、ゾッとします。私の小さいアヌスを夫がつかみかかっている光景ばかりで、まるで大人のオモチャ屋へ行ったような感じです。

「もし夫が死んだら、またもし離婚でもしたら、この写真やネガはどうなるのかしら」なんて考えることもあります。

交際相手の方が家にお見えになると、ご主人のほうはこの「菊の間」をととても喜ばれて、私のアヌスの中に入って来られます。でも奥さんのほうは、

「まあ、奥さんだったら……」

それだけ言って、あとは言葉がありません。

そんなとき、私は先手を取って、

「男性の方はみなさん、菊の間をとっても喜ばれますのよ」

と言って、

「お宅もこんなふうにされたいかがかしら」
こうつけ加えると、皆さん、口をつぐんでしまします。

この部屋は夏になると「人魚の間」になります。私の海岸でのヌードが、ベタベタ貼られるのです。ヌードといっても、剃毛してあるから、ヘアーは一本も見えませんが、女の部分がすべて赤裸々に映っていて、その接写と、私の顔もうまく納まっているのです。

夫は私に「ドナの間」も作れというのです。ドナとはセパードの名前です。つまり私に猥姦させて、その写真を部屋に貼ろうというつもりなのです。さすがに、私にはまだその勇氣はありません。

「その前にへS Mの間」を作るほうが先じゃないかしら」

と逃げておきましたが、異常な執念を持つ夫のことですから、いずれは作らせられる運命だと、私は覚悟しております。

死を賭した上淫

仏光刀四郎

貴婦人の白い背肌と白い臀に魅せられた下男の劣情が暴発する。凶暴な手ごに奥方は茫然自失し、気づいた時は下男の言いなりになって悶えている。

1 令婦人の崩壊

みぞれ雨の降る冷たい夕暮だった。

駅前にある闇市場で、闇の牛肉を買って民江が邸にもどると、奥さまが泣いていた。石炭ストーブの燃えている洋室で長椅子に突っ伏して、細い背がふるえていた。裸の白い背肌だ。白い臀だった。伊佐子夫人は全裸で長椅子に身を投じている。下男がそばに突っ立ってふるえているような白い尻を眺めている。凌辱の直後であるのが、民江は察せられた。下男が女主人を姦したのだった。山田吉次はぼうぜんとした顔つきをしており、にぶく目がうごいて民江の顔を見た。

「犯った……」

ぼそつと言った。

「吉次、おまえは……なんということを」

民江は下男の顔をにらみつけ、自分の黒いショールを伊佐子夫人のむきだしの臀に掛けた。

「おれは犯った……」

吉次は、またつぶやいた。上淫の快感と畏怖とが内面で交錯しているようだった。

「奥さまは、云うとおりになった」

「うそ」

ひくく、夫人が声を吐いた。そして、はげしく身をふるわせた。そのほそい頸に赤いアザがついているのを、民江は見た。首を絞められた痕だろう。民江はぞっとした。山田吉次が、おそろしくなった。とっぜん襲いかかって夫人の首を絞めあげ、気絶させて裸に剥いて犯したのではな

いか。兇暴に、手ごめにしたのにちがいがなかった。
夕食のとき、県立高校一年生の娘が母親のその首のアザ
に目をとめた。

どうしたの、と訊^きかれて伊佐子は、

「吉次と体のかんけいが出来たわ」
と、笑った顔で言った。哀しい微笑だった。
娘のさゆりは箸を止め、その母親の顔をみつめ、次に末
座に居る下男の顔をみつめた。



信じがたいという目であった。妙に静かに、瞳が澄んだ。

「裸にしてみておどろいた。見かけによらず乳房も大きく尻も肉づきゆたかで、いい体してる。長いあいだ男を知らぬ軀だ。女が熟れきってたっぷり蜜を吐いた」

吉次は言い、ひくく笑った。

「下司」

と、令嬢は言った。刺すような一語だ。

「ふうむ。下司と言ったな」

吉次は笑ったが、眼が底光りした。

「その下司に、吉野伯爵家の未亡人伊佐子はしりのあなまで見せたぜ」

「吉次、もうよして」

伊佐子が顔を赤くして、言った。

「おまえは暴力でわたしを犯して、むりやり肛門まで見たのよ」

「クビだ」

と、中学生の文雄が言った。今まで黙っていた美少年が怒りを爆発させた。

「吉次、おまえはクビだ！出て行け！」

「なんだと。おまえの母親はおれのものになったんだ。今日からはこの山田吉次がこの邸の主人だ。ダンナ様だ」

「出て行け！」

「ガキ。ちよいと痛めてやろうか」

吉次は立上ると、怖ろしい形相になった。

「ぶっ殺してやろうか」

襲いかかった。

熊のような体軀の山田吉次がひ弱い美少年を投げとばして、踏んだり蹴ったり荒れ狂うのを、伊佐子がひっしに抱きついてとめた。

「わたしの体はおまえのものよ」

伊佐子は着物の衿をはだけ、吉次の手をつかんで乳房にさわらせた。色の白い、むっちり張った美しい乳房だ。

「子供にらんぼうしないで」

「もう一度するか」

吉次は片手で裸の乳房をつかみ、片手で尻をなでる。

「ええ、するわ。しましよう」

「どこがいいか」

「どこでもいいわ。お前の部屋でも」

「便所の中で尻をまくるか、伯爵夫人」

「云うとおりにするわ」

「またしりのあなまで見せるか、伯爵夫人」

「云うとおりにすると申しますわ。ですから子供に暴力はよしてよ」

女中の民江がたまりかねたように、

「吉次：おまえ、あんまり無礼ではないか」

「だまれ。婆ア」

吉次は、伊佐子夫人をひき立てて行きながら民江の肩を蹴った。

やがて、肉体をしばかれる音が茶間まで響いてくると、令嬢さゆりは弟の肩をつかんで泣きだした。

「民江、どうしてこんなことになったの」

「分りません。お気の毒に思います」

民江は言った。

文雄は耳をすませた。

「おしりのあなまでちゃんと見せてるじゃないの。いじめないで。叩かないで」

尻をぶたれているらしい響にまじって、悲鳴まじりの夫人の声がきこえてくる。

「吉次、ぶたないで。このままうしろからして」

吉野伯爵家が崩壊する……先代から仕えている五十女の女中の民江には、そうおもわれた。

昭和二十一年一月末の永雨の降るつめたい夜だ。吉野伊佐子の運命が変わった夜であった。

2 卑しい支配者

吉次が、おまえは故郷にもどれと言う。おまえは邪魔だ要らぬ、というのだ。身寄りのない孤独な民江には、この邸を追い出されたら行く処がない。

お前は何者だ、卑しい下男ではないかと胸の底で齒がみしながら、クビにするのはかんべんしてくれと民江は吉次にすがった。おろおろ声になって目には涙がにじむのが、われながらくやしかった。

「おまえの主人は誰だ」

と、下男は言う。

「吉次さんです」

「吉次さまと言え」

「吉次様でございます」

「分ったか」

民江はふかくうなずいた。下男は笑って、大きな杉の下枝を斧で一打ちに打ち落した。

「民江、買物に行け」

「はい」

女中はくびがつながった。

ご主人様の晩酌の酒を忘れるな、と吉次は言い、民江はまたふかくうなずいた。その足で民江は駅前の闇市へ行き密造酒を探し求めた。

この日は、伊佐子夫人も街に出ていた。或るホテルで旧華族会の会合があり、酒肴が出て、夜まで宴会は続くのだが、伊佐子は途中で席をぬけて家路についた。美しい吉野未亡人がいつ消えたのか、人々は気づかなかった。

帰りついて門をくぐると、吉次が庭で娘のさゆりを追い

まわしていた。紺のスカートがひるがえって、若い白い太ももがのぞき、それがいっそう吉次を猛^{まう}らせていた。

「あなた」

と、伊佐子は吉次を呼び、駈け寄って行った。うしろから彼の肩にしがみついた。

「よしてよ！」

吉次は向き直って伊佐子の体を抱いた。

抱きしめられて、伊佐子が口を吸われていると、民江の小柄な姿が門をくぐって来た。

お酒がありましたよ、と民江は酒瓶を揚げて吉次に媚びた。

吉次は目もくれずに、

「おれの好きな場所ですっ裸にさせるぜ、いいな」

伊佐子はうなずいて、傲りたかぶっている下男の目をみつめた。

「心からのお願いよ。さゆりには手を出さないでください」

「おまえの態度しだいだ」

「わたしは云うとおりにするわ」

やがて、夕餐のときとなり、伊佐子夫人は全裸で似臥して両腿を強く締め、素肌の腹に冷酒をそそがれた。女ざかりの脂ののったため白い下腹部が酒を満^みして池となり、ちぢれた柔毛がそよいだ。伊佐子の陰毛はうすめで肉のはざまも愛らしいかたちをしている。その少女的なめしべもた

っぷり酒にひたって陰毛もぬれてそよぐ。ワカメがゆれるさまだ。

吉次は顔を伏せて、ゆっくりと酒を吸いあげると、濡れているめしべを指で開いた。

「文雄。さゆり。よく見ろ。きさまら、逃げたら承知しねえぞ」

「ああ……」

全裸の夫人はうめいて、ひしと双手で顔を覆った。掌の下から、

「あなたはずいぶん残酷よ」

「もう蜜を出してやがる」

とろけるように柔らかな、あたたかい花裂の奥を下男の太い指がいびると、からみつくようにヒクヒクと女肉がうごめく。柔らかなうちにしこしことした感触があつて、天井にはざらつく感触もある。花液に匂いはなく、しとどゆたかだ。

「伊佐子、おまえのはいい」

微妙に粘膜がうごめく。桃色の軟体動物が奥に棲んでいるようだ。吉次の太いゆびは濡れて、ぴちやぴちやと粘膜の音が立つ。

「伊佐子、いいか。いきそうか」

「はい、あなた」

両掌で顔を覆い、伊佐子は臉のうちに恐怖にふるえて逃

げまわるさゆりの姿を、うかべている。さつき目にしたものが、頭から消えないのだ。

下男はすっ裸になった。昂ぶりきっていて^{まがまが}兇々しいばかりだ。長大なそれを彼はさゆりの目に見せつけるようにしごいてみせて、伊佐子夫人のうえにのしかかった。苦痛のうめきが、夫人の口からほとばしった。細いやさしい眉をゆがめて熱い息をつき、わずかに腰をゆすり、白い腕は吉次の背中を抱いた。

「足もだ」

「はい……」

形のいい脚が、下男の肉の厚いたくましい胴にからみついた。

「そりゃ、もっと気を入れろ、伯爵夫人」

「はい」

優美で、豊かな白い腰がはずみだした。

「ハアッ、ハアッ」

と、荒いあえぎをつく。

「いいか」

「ああっ、きつい……」

「いきそうか」

「はい……」

「死んだ主人のとどっちがいい」

「いきそうっ……」

おわると、あさましい……と言って伊佐子夫人は嗚咽し、娘には手を出さないでと吉次に哀願した。吉次は答えず、夫人の首を抱え起して果てたのをふくませた。仕方なく伊佐子はしゃぶった。

3

天使と悪魔

吉次はまじめなよく働く下男だった、それが悪魔になった、急に悪魔になった、なぜだろう？ と中学生の文雄が民江に訊ねた。

「坊ちやま、あいつは」

もともと悪魔なのです、うわべはまじめそうに猫をかぶって悪魔の本性を隠していたのですよ。未亡人となられた奥様のお体を狙っていたのですよ、と民江は答えた。

「信じられないよ、ぼく」

と、美少年は言う。

「でも、現実はどうですか。あなたの美しいお母上は茶間でみんなの見ている前で犯されるじゃありませんか。悪魔の所業ですよ」

「悲しい」

文雄はじっさい悲しげな表情を泛べた。

「あの上品なお美しいあなたのお母上が恥を忍んで、云われるままみだらなことをなさるのは、さゆりお嬢さまをお

守りになっていらっしやるのです。坊ちやまも分っていらっしやるでしょう」

文雄はうなずいて、目に涙を湛えた。

「ぼくは臆病者だ。吉次がおそろしい。殺してやりたいと思うけど、勇気がない」

「坊ちやま、バカな考えを持つてはいけません」

強く、叱るように民江は言った。

しばらくして、文雄が自分の部屋にもどると、伊佐子夫人が机の前に坐っていて学習ノートをひらいて見ていた。

笑って、よく勉強してますねと言い、

「文雄。さからってはいけませんよ」

民江が心配して、ひそかに母親に告げたらしい。文雄はだまって、そばに坐った。



「あなた、短刀を持っていますね。わたしにお渡しなさい」

海軍航空少佐であり、南方戦線の激闘で空に散った父の形見の、室町時代の作・在銘の短刀を、文雄は大切に所蔵している。すなおにそれを取り出して母親の手に渡した。手放すと、淋しくなった。

「持っていたいよ」

「あぶないから」

「バカな気は起さないよ。あんな奴を刺して刑務所に行くのはごめんだよ」

「信じるわ」

夫人は短刀を返した。

「ありがとう」

「みだらなことをするお母様を許してね」

伊佐子の瞳がうるんで、涙が光った。

「さゆりをひっしに守ってるのですよ」

「分ってるよ」

「吉次のものは大きい。パケモノだわ。一晚に二回も三回もされるときは、わたしのからだはただれて赤く腫れるわ」

吉次好みに、長く肩に垂らしているしなやかな黒髪を、伊佐子は指に絡めて、

「こんな髪形もいや！ 切りたいわ！」

「奥さま」

襖の外から声をひそめて、民江が呼んだ。

「吉次が帰りましたよ」

「はい」

「早く来て奥さまがお尻を出さなければ、吉次はまた荒れますよ」

「ええ、分ってるわ。すぐ参りますから」

毎夕、果樹園での作業を終って吉次がもどってくると、まず民江が冷酒を差出す。吉



次は広い台所あがりなまろの上框うかどに坐って冷酒の角打ちをやる。

今もその酒を飲み終って、「おい、伊佐子はどうした」と、吉次はだみ声をはりあげた。

いそいで伊佐子夫人があらわれた。おつかれさま、あなた、とねぎらいの言葉をかけてズボンを脱ぎおろした。下着はつけていない。上はワイン色のジャケットを着、腰から下はいきなり裸をさらけ出して、桜いろに頬が色づく。

「さあ、吉次様、奥さまはお尻をお出しになりましたよ。いいお尻だわ」

美貌の貴婦人の豊満な白い臀を、女中の民江も今はもうはばかりに眺めるのだ。

「奥さまがこうしてお尻を出して見せるたびに女の私も妙に興奮いたしますよ」

「そんなに私のお尻はよいの？」

伊佐子は赧い顔になり、片手をうしろにやって尻のわれめを隠した。しかし、すぐにその手を離した。

「見てください、わたしのお尻を」

「民江、奥方様の尻をしばけ」

吉次が笑って言う。

「いいえ、めっそうもない。罰が当たります」

民江はひるんだ。それだけはかんにんしてくれと、茶間に逃げた。

「あなた、こちらに来て」

伊佐子は、むきだしの尻をゆすって茶間にはいった。立ったまま壁に両手をついて、尻をつきだして吉次を待つ。

「ねえ、あなた」

と、伊佐子は媚びた声を吐いた。

「ねえ、しばいて」

「よし、しばいてやるぜ」

尻打ちの肉の音がひびく中で、民江は食事をしらせる鈴を鳴らし、さゆりと文雄がいっしょにやって来た。二人が坐ると、熊のような掌でぶたれて赤い斑をつけている夫人の熟れた尻の肉を、加虐者はわしづかみにして、

「さゆり」

と、令嬢の顔を瞋た。性的サディズムの鬼火が吉次のつりあがった眼に燃える。

「伊佐子が哀れだと思わぬか。母親を助けて身代りになる気はないか」

美少女は嗚咽し、そしてうなずいた。

「だめだ。いけないよ、姉さん」

と、文雄が言った。

「いいのよ、もうがまんできない。お母さまがかわいそうです。私が代ります。私は若い。どんなにされても堪えるわ」

血の気をなくした、すきとおるような白い貌で娘は立上った。

「裸になるわ」

「さゆり！ だめ！」

伊佐子がさげんだ。裂帛のその母の一声はさゆりの胸を打った。われにかえったような面持で、令嬢はまた坐った。

「伊佐子。てめえ、よけいなことを云いやがって」

吉次は笑った。ゆがんだ、残忍な色の笑いがひろがった。

「して、どんなにでも」

と、伊佐子は言った。

夫人は全裸にされ、両腕に縄を掛けられて前向きに柱に縛りつけられた。

ロウソクの火がさらけだしているめしべをあぶりだすと、火に焦げて煙りが立ち、するどく悲鳴があがった。

火にあぶられて夫人のめしべの媚肉は赤くただれ、吉次

はつぎにワサビをぬりつけた張形でその媚肉を責めだした。高貴な美貌の伯爵夫人は「ひい、ひいっ」と泣き、「アア、アア」とあえいで白い腰をくねらせる。

「つらい…つらい」

みんなの前で、むごく、淫らな張形責めをされるのがつらいと、伯爵夫人は泣く。

「もっと尻を振れ」

と、吉次は煽る。

「ああっ、もうゆるしてえ」

その全裸の女体のもだえる乳房のはずみ、ゆたかな尻がくねくねとのたうつまは、妖しく悩ましく、官能的だ。被虐の凄艶なエロチシズムが漂った。

「民江。おまえは明日街に行つて浣腸器を買つて来い。でかいのを買つてこい。俺はこの伯爵夫人さまにしりのあながどんなにいいかということまで教えてやろう。おうさ、教えてやろうじゃねえか」

「でも吉次様。あんまりやると、あなたの身がもちませんよ」

民江がそう言うと、

「アホ」

と、吉次は嗤つて、

「年は三十になつていてもよう、この俺は並の身体じゃねえよ。精力絶倫だわな。どんなに強い、伊佐子がよく知

つてるぜ」

「た、たまらないわ」

にわかに伊佐子が上がり声を放った。柱を背負つて縛られている裸身がけいれんして、

「い、いきそうっ」

「よしよし、たっぷり蜜を吐け」

吉次は張形責めのピッチをあげる。肉色をしたつけ細工の陽物が凄まじく攻めたてる。

「ああ、い…い…」

「いやよ、お母さま」

さゆりがなじるように言つて、目をそむけた。

「ああ、ワサビがきく…きく…きく…ううムッ、ハアッ、もうだめっ。ああッーだめっ。だめっ。ゆ、ゆるしてっ」
手首の縄をちぎるばかりに伊佐子は悶え狂つて、絶頂に達した。汗をにじませ、桜いろに上氣したその面はうっとりとして、

「アアー」

と、長い息を吐き、腰はまだ小さきさみに前後にゆすつていた。

4

揺れる白桃

二日後、街のどこからか民江が浣腸器を買い求めて来た。

令嬢さゆりはそれを知り、母親にかくれて裏山の果樹園に行つて吉次に逢い、山小屋の中で身を許した。

さゆりの清らかな肉体は、新鮮な果実だった。処女のあかしの鮮血をおびただしく流して苦痛にうめくその軀を、吉次はむさぼった。たてつづけに二度交り、途中でよっぱいにさせて尻から攻めた。

夕方、燈をつけた茶間で、さゆりは全裸にされて伊佐子夫人、文雄、民江の三人の目に若い美しい肢体をさらして見せた。それは吉次のものになったという証明である。全裸をさらすさゆりは瞑目し、頬が青白く冴えてこわばっていた。

「よし。うしろをむいて尻を見せろ」

吉次が言うのと、さゆりはすなおに裸身を廻して尻を見せた。愛らしい白桃のようなまろやかな臀だ。

「しりのあなまで見せるんだ」

吉次は言い、さゆりはうなずいてそのまろやかな白い双丘を割って肛門を披露した。

「悪魔……とうとうさゆりまでも……」

と、夫人は言った。

「つべこべ言うな」

娘のほうから身を投げだしてきたんだと吉次は嗤い、さゆりをよつばいにさせた。竹ムチで四、五回尻を打ち、美しい白い肌を赤く彩ってからアヌスに油をぬり、浣腸器の

嘴管をつきさして液体を注入した。液体は水だ。冷たい水が大量に腸管に侵入し、さゆりは苦しうにうめき、それから肘のあいだに頭を埋めて顔をかくした。

「もっと尻を高くしろ」

「はい……」

浣腸器は医家用二百CC注射器型ガラス浣腸器。

吉次はそれを三回挿入した。

みなで六百CCの水を入れられて、さゆりの腹はふくらみ、額にあぶら汗をにじませてブルブルふるえた。

「可哀想。わたしが代りたい。吉次さん、わたしのしりのあなに……して」

伊佐子が言った。

「お便所に……行かせて」

悶えて、さゆりが哀願した。

吉次はまた竹ムチを振って、さゆりの背中や尻をしばきながら便所へと歩かせた。

そのまま二人は便所の中に籠った。

伊佐子夫人は茶間を出て、自室に籠った。

ぐったりとした、疲労を覚えた。

夜毎の色地獄から母親を救おうとして身を投げだしたさゆりの心情が、哀れだった。伊佐子は心が疲れた。さゆりの犠牲が、心に重い負担になっている。

民江が茶を運んできた。

「奥さま、お茶でも召上って気を落着けてくださいませ。思いがけないことになって、私もお気の毒におもいます」

「さゆりはおろかしいことをしました」

伊佐子は言った。

民江はリングの皮を剥きながら、

「でも、奥様は解放なされました」

「あなたには私の気持は分らないでしょう」

「お体が淋しいですか」

「民江。的はずれのことを云って……」

「虐められないと淋しいでしょう。体が承知しなくなっているでしょう」

そのとき、悲鳴がきこえた。さゆりの部屋から「痛い！」という叫びが、立った。伊佐子は体がこわばった。とんで行って、自分が代りたい気持だ。

「吉次はきつと、お嬢さまのおしりを犯っているでしょう。そんな気がしますわ」

そう言う民江の、しわのふえた顔に卑猥な色が浮び、そして消えた。

「屑のような一人の男のために、吉野伯爵家はめちやくちやにされて……ほんとにお気の毒です」

伊佐子はだまってリングを唇に当てた。

また、民江の目に卑猥な色がうかび、

「奥さま、坊ちゃまのお友だちとなさいませんか。歯科医

の息子の川上くんです。あの坊やは柄も大きく色気づいて、もうりっぱなオトコですよ。奥さまがその気になれば向うはよろこびますよ」

「民江。なんということを言うのです」

「いいじゃありませんか。奥さまはもう体が承知しなくなっているですよ。私にはよく分ります。おまかせくださいませ、奥様」

5 激しい肛虐

山田吉次はさゆりの若い肉体に溺れた。夜ごとあそんで飽きない。伊佐子夫人は全くないがしろに扱われた。解放されたという気持は伊佐子には湧かなかった。見捨てられたという思いが、胸を占めた。

或る夜、吉次は蜜月の巢となっているさゆりの部屋に夫人を呼び入れたが、それは浣腸責めを見せつけるためであった。

さゆりは畳でよつばいになって、セーラー服のスカートをまくって尻をむきだしてむごい浣腸責めに脂汗をながしつつ、瞳が酔っていた。

「おしりはいいの？」

壁に凭れて伊佐子が訊くと、さゆりはうなずき、

「毎晩、おしりをいじめられていたら好きになってしまう

わ

と、言った。その声もうわ
ずって快美がにじんでいる。
「とってもいいのよ、お母さ
ま。浣腸器の嘴管が入っただ
けで、たまらなくなるときが
あるのよ」

「さゆりは本気でそう言うの
ですか」

「いいのよ、お母さま：アア
いい：いい：いいのよ。は
ずかしいけどいいのよウ」

夫人の眼に、娘が妖婦のよ
うに映った。若く、かわいら
しい魅力的な妖婦である。伊
佐子の胸に嫉妬めいた感情が
うずいた。それはみじめな敗
北感へと傾斜していく。

伊佐子はしかし感情を押し
殺し、うわべはひややかにふ
たりが肛交をするのを眺めた。
「痛いのにも馴れたわ」

と、昂ぶった泣声でさゆり



は言う。

「伊佐子、よく見ろ」

と、吉次。

「ええ、見てますわ」

ぶきみなくらい雄渾な吉次を、さゆりは深々とうしろに呑みこんでいるのだった。そして、幼ない、可愛い淫声をあげて尻をのたうたせるのだった。

終ると、さゆりはまだ荒い息づかいで、

「このみだらな尻にムチをください」

と、また尻を高くかかげた。

鞭打ちがはじまると、伊佐子はだまって部屋を出た。廊

下の端に民江が佇んでいて、

「見せつけられましたね、奥さま」

と、小声で言った。

「ええ、見せつけられたわ」

「どんなお気持です」

「おどろいてるわ。りこうでつつしみ深いあのさゆりが変わったのにおどろいてるわ」

「こちらにいらっしゃいよ、奥さま」

民江は、伊佐子の手をつかんで放さず、しゃにむに自分の部屋へ誘って行った。

その粗末な和室には灯りがついていて、金ボタンの制服を着た学生が坐っていた。文雄と仲の良い、齒医者の子

である川上久は、顔をあからめて夫人に頭をさげた。

「いやよ、民江」

と、言った。

「遠慮なさいますな、奥さま」

お体が淋しいくせにと民江は言い、着物姿の伊佐子の腰を抱くと、

「さ、裸になって」

手荒く帯をほどきだした。上等な帯が衣ずれの音を立てて、足もとにくずれていく。

「民江、ちよっと待ってよ。川上くんはどうなの？ わた

しのような年増の女の軀でもいいの？」

「いいですよ。この人はね、前々から奥さまが好きなんですよ。美人の奥さまの熟れた体が好きなんですよ。してみたくってたまらなかったんですよ。ねえ、そうでしょう川上くん？」

言いながら民江は、夫人の体から着物を剥ぎとって一発尻をぶった。次に、白い長じゅばんを剥ぐ。

「川上くん、友だちの母親とするの？」

伊佐子はじかに川上に訊ねた。

「奥さんはいやですか」

と、川上久は言う。興奮して、眼が異様に光っている。

「あなたがしたいのなら、しましう」

だが、伊佐子は全裸に剥かれると強くはじらい、乳房を

抱いてうずくまった。

「どうしたのですか、奥さま」

民江は笑い、麗わしい白い豊臀をぴしゃぴしゃ平手打ちしつつ、

「いい尻してるでしょう」

と、川上久に言う。しかし、その態度は川上を無視して激しく尻打ちに耽るのだ。

「美しくて、色っぽいお尻ね」

「ああ、民江」

伊佐子はのめって、よつばいのかっこうになった。伊佐子は尻を高く差出した。

「いい尻、ほんとにいい尻だわ」

民江はいつそう烈しく打ちしばく。

「ああ、ひさしぶりに尻打ちをされるわ。ああ、いい。よすぎるわ。もっと打ってえ」

伊佐子はみだれはじめた。

「奥さま、しりのあなまでちゃんと見せなさい」

「はい。見せるわ。見てください」

高く高く伊佐子は尻をあげた。

「ああ、すごい」

と、川上久が言う。薄い纖毛にふちどられた淡紅色の柔媚なめしべとちいさいさくすぼまった後門が電光に照らされて、妖しい女体の魅惑だ。

「川上の坊ちゃま、さあ、伊佐子夫人のこの尻を打ちなさい。バンドで打ちなさい」

民江はそそのかした。

「いいわ、ベルトで打ってえ」

と、伊佐子も言う。

しかし、川上久はためらった。ヘンタイ的なことをいやるふうだ。彼にとつては、あまりに猟奇的で刺激が強く却ってうとましい気分だろう。

「さ、伯爵夫人のこの美しい白い尻はあなたの鞭打ちを待っているですよ」

打ちなさい、と民江は叱りつけるようにそそのかす。

「さ、ぐずぐずしないで」

「いやだよ」

そっけなく川上は拒んだ。

民江は苦笑した。

「坊やはのってこないわ」

「鞭打ちはよしでしょう。変態趣味は若いこの人にはまだ無理でしょう」

伊佐子は言い、片手をうしろにまわしてアヌスにゆびをさしいれた。

「アア」

と、ちいさく呻いて、
「ここを姦ってくださいね。ここだったらみもごる心配も

ないし：それにここはまだ男を知らないのよ。処女地なのよ。あなたから仕込んでもらいたいのよ」

「油をぬりましょうね」

と、民江が言い、

「はい。ぬって」

と、伊佐子は女中に尻をゆだねる風情だ。

「かわいいおしりのあなだわ。川上くんもいやじゃないでしょう」

民江は指をさしいれてオリーブ油を塗る。

「はあッ」

と、伊佐子は尻をよじって、

「民江、たっぷり塗って」

「よくしめること、ホホホ」

民江は笑った。油がぬらぬらと光って、伊佐子の肛門は媚めいた。

「さ、川上くん、男らしく裸になってこの美しい熟れた尻を征服するのよ」

と、民江がはげましてむりやり裸にさせると、ピンク色をした肉柱がたくましく反ってすでにうすい液を洩らしていた。

川上が、犬這いに這っている伊佐子のうしろで中腰の姿勢でかがむと、民江が手伝って白い尻の奥へみちびいた。

伊佐子は苦痛にうめき、

「も、もう、そこで止めて」

「まだですよ、奥さま。まだ浅い。まだほんの入口」

川上久は果てそうになり、本能的に荒々しく侵入した。

「痛いー」伊佐子はうめき、額にあぶら汗をうかべながら根元まで迎え入れた。

「できたわ」

と伊佐子は言い、またうめき声をあげた。

「ゆっくり攻めてください。裂かれるように痛いよ。あッ、やめて。そんなにらんぼうにしないで」

余裕もない、技巧もない、ただいちずにたけりたつ若者の強靱な動きは、むごかった。

「あッ、やめて。やめて。ひいーっ」

伊佐子は出血し、ゆすりあげられる白い豊臀を血のりに紅く染め、ひいひいと泣きつづけた。

6

燃える怨念

吉次は、いつもさゆりと二人で風呂にはいるのだが、ちかごろは弟の文雄もむりやりいっしょに入浴させて、全裸の姉弟を浴室の中でもてあそぶ。タイル床にさゆりを這わせて文雄に浣腸責めをやらせたり、逆に、さゆりが文雄に對しておしゃぶりの奉仕をさせられたりする。文雄がさゆりの尻を鞭打ち、次はさゆりが、文雄の尻を鞭打つことも

ある。姉弟は吉次の云うままに服従して、浴室の中で何度か肛交もおこなった。さゆりの若い肉体も夜毎の淫虐に疲労がつもった。病的なすきとおるような青白い顔色をし、朝はいつも体がだるく、しばしば学校を休む。

「もういや。もういや。今夜はもうおしりをゆるしてえ」

夜中に、泣いて哀願するさゆりの声が、となり部屋の文雄の耳によく聴える。そして翌日は、姉は学校を休んだ。

吉次が、果樹園に仕事に出て行くと、さゆりは教科書を開いて自習をはじめめる。勉強の遅れを気にしているのだった。数学の問題が解けずにゆきづまると、母親に助けを求めた。インテリの伊佐子は、数学は大学の理数科四年生のレベルであり、また語学にも長^たけている。ていねいに、そしてきびしく伊佐子は娘を指導した。

「お母さまはわたしよりも綺麗。体もみごとな曲線。そして頭も私よりも何倍もいい。かなうところがありませんわ」「でも」

と、伊佐子は笑って、

「吉次は私に見向きもしないじゃないの。お尻にさわるところもしないわ。若いあなたの魅力には私はかなわないのよ」「川上久がいるじゃないの。あの子、お母さまに首ったけでしょう」

「あの人、年増好きよ」

「吉次は知ってるのよ、彼とお母さまのことを」

伊佐子は立上って、

「でも、吉次は妬^やきもしないでしょう——さゆり、私はいまから街に行つて映画でも見てまいります」

夫人は早々に娘の部屋を出た。吉次と娘の蜜月の巢だ。

この部屋にいと伊佐子は気がみだれる。

台所に行つて、拭掃除をしている民江の働きさまを伊佐子はぼんやり眺めていた。しばらくして民江が見返ると、夫人の姿は消えていた。

伊佐子は街へ出かけ、二、三買物をし、それから映画館にはいった。館内は客が多かった。うしろに立つてスクリーンに目をやっていると、

「奥さん」

と、ささやかれた。目をこらしてみると、川上久だ。場内の暗さに伊佐子はまだ目が馴れず、横に立っている彼に気づかなかった。

「びっくりしたわ」

「出よう」

「学校はサボったの」

「出よう。こんな映画、おもしろくない」

川上は伊佐子の手首をにぎった。伊佐子はわざと拒んだ。甘えたしぐさだ。色気がにじんだ。可愛らしい色気だ。

「しりのぐあいはどうだい、奥さん」

「ふふ。いいわよ」

「出よう」

映画館を出て、二人は街路に佇むと、なんとなく目を見合わせて笑った。川上久の熱い目差しには性欲が燃えていた。

「今日は虐めてやる」

伊佐子はうなずき、その気品のある目もとにこぼれるような色気を湛えて、
「好きにしてよ」

夫の墓がある禅宗の寺に、伊佐子は川上久を案内した。すすんで案内したわけではなかった。川上久が強く墓地を希^{のぞ}み、やむをえず伊佐子は静かな川岸にあるK寺の広い境内に入り、杉木立をぬけて裏山の淋しい墓域に足を入れた。ふいに立ちどまり、「いや、かんにんして」と伊佐子は言ったが、皮ベルトで尻を打たれると、また歩きだした。夫の墓はもう見えていた。

南の空に散華した伯爵吉野雅也の墓の前で女の熱れきつた美貌の未亡人は和服のコートを脱ぎ、羽織を脱ぎ、腰の下着をとり、裾をまくりあげてまろやかな豊かな白い尻をむきだして、ふるえた。寒さにふるえ、心の呵責^{かじやく}におののいた。

「あなたもサディストね」

墓の前でもてあそびたいという川上久の発想は、おどろ

くべき嗜虐性が匂った。

「尻打ち！」

と、川上久は言う。

「良心に責められるわ」

伊佐子は泣声になった。

びしっ！

皮ベルトがむきだしの白い尻を打つ。

「ひーっ」

びしっ！

「ひーっ……ああ、痛いわ」

白磁のような尻肌が熱く灼^やけ、朱の筋をえがいてのたうつ。寒風に吹きさらされながら美しい伊佐子夫人の尻が打ちしばかれて前後にはずみ、左右にくねる。川上久は異様に興奮し、鞭打ちはピッチが上り、はげしくなった。すさまじい尻打責めになった。尻肉をずたずたにされるような火の感覚に伊佐子は包まれ、悲鳴をあげてのたうちまわった。

「さあ、しりのあなをよろこばしてやる」

「……はい、あなた、して」

赤く腫れあがった尻を開いて、伊佐子は若者の熱鉄をアヌスに迎えると、気のとくなるような快美に酔い、妖しくすすり泣いた。

「川上くん、この私のお尻が好き？」

「好きだよ」

「しめる感じがいい？」

「言葉にならないほど」

いいのだと川上久は言い、強く攻めを送りこみだした。

「ああッ、よいよい、よすぎるウ」

またも伊佐子は妖しくすすり泣いて、尻をのたうたせだした。

「好きだよ、奥さん、好きだよ」

「とってもお上手になったわ。わたし、たまらないわ」

「墓の前でされる気分はどう？」

伊佐子は答えず、嵐のような息づかいになって尻をゆすり立て、倒錯の肛淫の快感にのめりこんだ。麻薬のような妖しい肉の快楽に伊佐子は完全にとり憑かれた。

「いま、いま、尻をしばいて！しばいて！」

川上が平手打ちでしばきだすと、伊佐子はもの狂って泣き叫びだした。

「いくウ！もうだめっ、だめっ……アア」

文雄の部屋に、吉次がすっ裸のさゆりを連れてはいって来て、

「ひさしぶりにお前の裸を見るか」

と、伊佐子夫人の肩をたたいた。伊佐子は机の前に坐って、英語を教えているところだった。文雄と、そして客の

あぶちすと激白

赤児になりたい私

父親の愛に飢えている私は赤ちゃんみたいに可愛がってくれる男性が欲しいの。

私がオイタしたら優しくお仕置き、お洩らししたら柔らかなオムツを替えてくれる……そんな甘く素敵な親娘のラブレイの一刻を持ちたいの。

優しくしかも厳しいお父さまのお膝の上で、お尻を丸出しにして叩かれ、ポンポンが痛くなったら慈愛に満ちたお浣腸を……

お父さまになって頂く方は35~50才のロマンスグレイの方。社会的地位のある頼りがいのある方。独身でこどものない方だったら最高。

こんなことを夢見る私は33才の未婚女性。男性体験は過去に二人あります。

いちど赤ちゃんプレイがしたくてSMクラブに連絡したことがあるんですけど、母親役の女性ばかりで、父親役の男性はいなかったんです。

私は赤ちゃんプレイ以外のSM——たとえば緊縛なんかは興味なく、一人っ子だったのでとてもわがままなんです。自分で自分を持て余すほどなんですけど、お父さまになってくださる方の出現を夢見つづけます。(赤ちゃん子)



川上久にも、英語を講義していた。墓地で伊佐子が燃えた日から、四、五日経った夜である。川上久が今夜またやって来たのは、伊佐子の肉体が目当である。が、それはあとまわしにして彼は英語を習っていた。

「伊佐子、さ、脱げ」

と、吉次は言う。伊佐子は口もとにつめたい笑いを泛べて、ゆっくりと言った。

「いやです」

吉次は笑って、

「この青二才が好きか」

と、川上久をあご指した。目が残忍に光って、小動物にいどみかかる虎の目だ。

「このガキを半殺しにしてやろうか」

川上久は怯えて顔が青くなった。

ふいに伊佐子が立上って、すばやく帯をほどきだした。

伊佐子は全裸になると、吉次の云うままに同じく全裸で立っているさゆりの腰を抱いて互い形^{たが}の張形を埋め合っているが、たがいにはげしく肉をせめぎ合った。

つぎは文雄が、やはり吉次の云うままにさゆりを浣腸責めで責めた。二百CC大型浣腸器が二回三回とつきさされてつめたい水を注入する。

吉次は、窓から犬を入れた。果樹園の番犬として吉次が飼^いい、かわいがっている大きな秋田犬^{いぬ}のオスが、よつばい

になって苦しんでいるさゆりのそのぬれた尻をなめる。

文雄が、さゆりの尻の下にゴムの布をひろげると、さゆりは排泄した。ゼリーのような軟便を犬が貪りくらった。

吉次は犬をかかえあげて、うしろからさゆりの腰にのしかからせた。犬の太い前肢が白い腰をはさみつけて興奮したかった。死にたいわ、とさゆりは泣いた。だが、さゆりは濡らしていた。吉次は巧みに犬を扱って、交わらせた。

「吉野子爵邸は魔の館だ」

と、川上久が言ったのは、伊佐子夫人の部屋で二人きりになったときで、声をひそめてそう言った。吉次は悪魔だとも言った。伊佐子は「殺して」と言った。

「許せないわ、殺して」

「――」

「拳銃があるのよ」

夫が残していった自動拳銃を、伊佐子はタンスの奥から取出して川上の掌にのせた。

やがて、令嬢さゆりの部屋で銃声が起り、男の断末魔のうめき声が湧いた。

川上久は犬を射殺するつもりで夫人の部屋を出たが、気が変わったのだ。

ふっと、気が変って、彼は山田吉次を射殺した。だが、川上久は裁判の時、その被告席で、吉野伊佐子への自分の愛情を述べ、愛のために下男を射ったのだと陳述した。

〔体験・告白・日記など〕

S M・エネマ・フェチ・レズ、スワップ・トリプル・複数・アニメル・窃視・妊婦嗜好など、本誌にふさわしい異色なものをのぞみます。

創作ではなく、実際に経験、実行したことをありのままに、平易な文章でお書きください。

文章の上手下手は問いません。写真（モノクロ、カラー、ポラロイド）のある方はそえて下さい。

四百字原稿用紙2枚以上（長篇は連載）。

掲載分には規定の原稿料をお支払いします。

文章がニガ手な方は写真だけでも結構ですが、簡単な説明を書きそえて下さい。

〔創作・小説など〕

S M小説界に新風を吹き込む新人の登場を期待しています。

題材はS M、フェチなど情念的なもので、既成の作家のものとは異なる作品を歓迎します。

四百字詰原稿用紙で二〇―三〇枚以上です。

優秀な作品は本誌に掲載（長篇は連載）とし、規定の原稿料をお支払いします。

〔イラスト・カットなど〕

写実的なもの、幻想的なもの、あるいはイメージ画ふうのものなど

自由に描いて下さい。

なるべく白いケント紙か画用紙にエンピツ、ペン、筆で。

イラストの大きさは本誌2ページ大ぐらいまで、カットは葉書半分以上大ぐらいまで。

採用分には規定の原稿料をお支払いいたします。

〔文献・資料など〕

文献や資料を提供または譲って下さる方はご一報下さい。

※投稿作品（写真を含む）の返却を希望される方はその旨書きそえて下さい。

宛先

〒104 東京都中央区銀座1の22の10

ストークビル501号

風俗資料保存会編集室

「読者通信欄」への投稿

※郵便料金に注意して下さい

宛 先

〒104 東京都中央区銀座1の22の10

ストークビル501号

風俗資料保存会編集室

- 1・400字以内で通信文を書く。
- 2・通信文の内容は“交際”にこだわらず、本誌の感想、雑感、プレイ報告など、なんでも結構です。
- 3・投稿文の宛先は左記へ。

「読者通信欄」掲載者への手紙の出し方

- 1 手紙を書く。
- 2 手紙を封筒①へ入れて封をする。
住所、氏名を書いてもよい人は書く。
- 3 No.、ニックネームを記入した回送シールと60円切手3枚をクリップでとめ、
封筒①と一緒に少し大きめの
封筒②へ入れて封をする。
封筒②のウラには正確な住所、氏名を記入して下さい。
- 4 封筒②の宛先は左記へ。
※当事者間で生じたトラブルに対しては、当
会は責任を負いかねます。

No. _____

様

回送シール

S.57.2.28まで有効

No. _____

様

回送シール

S.57.2.28まで有効

No. _____

様

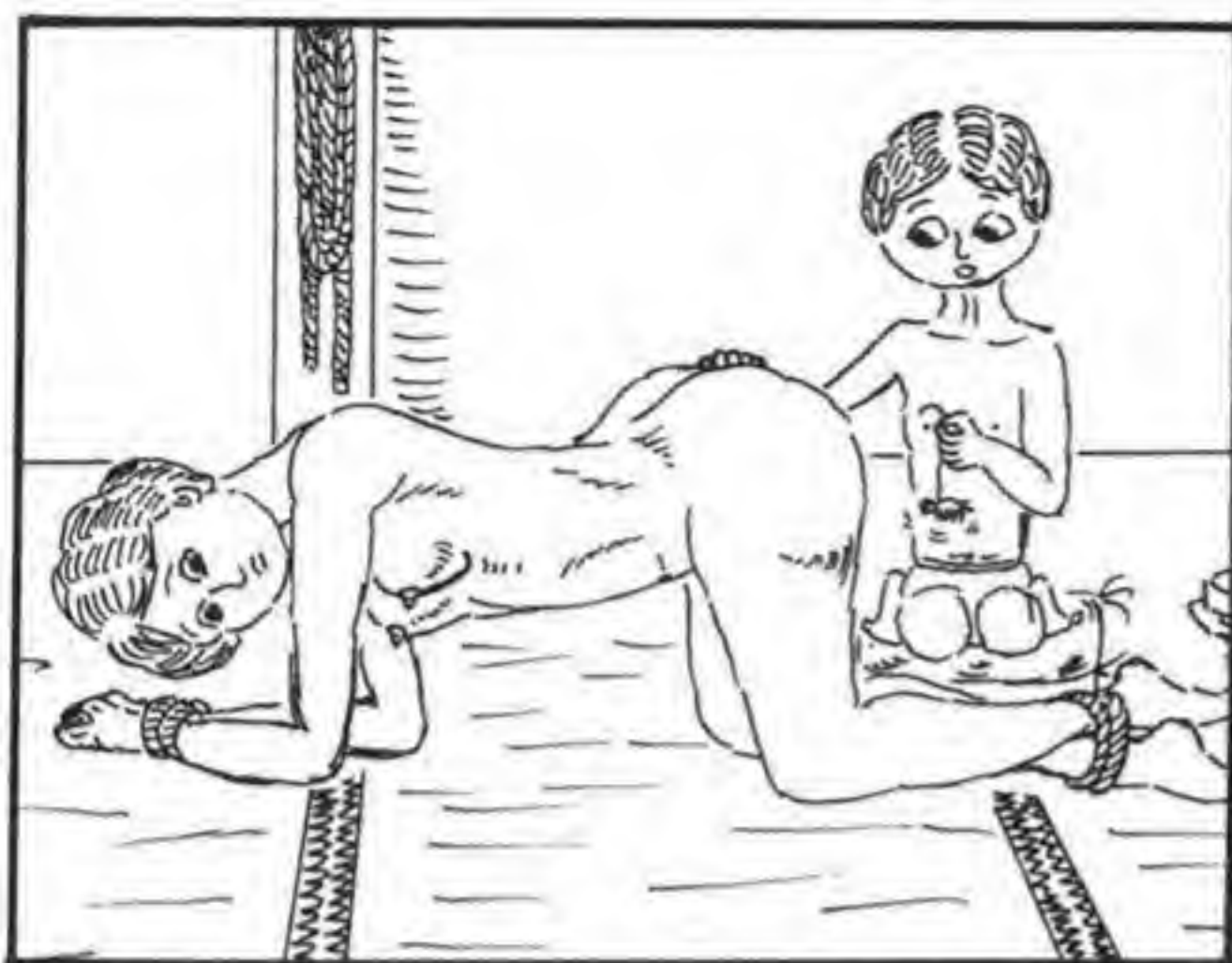
回送シール

S.57.2.28まで有効

エロスの殉教者

絢爛たるエロスの香りを発散させる表紙の絵の書き手は、デカダンスはなやかなりし十九世紀末にこの世に生をうけ、二十世紀前半まで幻想画の分野で大活躍したドイツの画家フォン・バイロスです。

神戸在住の山本芳樹氏は美術の愛好家であ



りまた蒐集家なのですが、とりわけバイロスの絵を愛し、所蔵される原画は膨大な量です。

氏は自分ひとり見て楽しむだけでなく、大勢の人にもその素晴らしさを分かち合いたいと思い立たれ、一昨年、サバト館より出版されました。

その画集がワイセツ図画として神奈川県警より発禁処分を受けたことは皆様のご記憶にも新しいことでしょう。

だがバイロスの筆致の格調の高さと山本氏の真摯の故か、起訴猶予処分となったのです。

編集室ノート

商業主義のSM雑誌が氾濫するなかで、純粹SMを希求する声も少なくありません。偽物では満足できないホンモノ指向の方々のニーズにそうべく、小誌が復刊されました。

「奇譚クラブ」の前オーナー、故吉田稔氏の長年の親友・賀山茂氏がいろいろとご苦勞なされ、復刊の運びとなった訳ですが、十年ほ



どの休刊中に周囲の状況もかなりの変貌をとげています。

「四畳半襖の下張り」裁判における判決文にもあったように、性に対する社会通念が大幅に変わりました。また性の氾濫のため、世の人達もちよつとやそつとのことでは刺激を受けなくなっています。したがってポルノ的傾向の雑誌はエスカレートの一途をたどり、警視庁との鬼ゴッコが果しなく続けられます。

純粹SMとは、直接的に性とかかわり合いを持たずとも、充分読者が満足を得ることのできる方向を目指すものです。小誌の編集方針にご賛同の向きはご支援をねがいます。